中高生のための

日本野球史

吾に向ひて光る星 ―野球史探訪 明治時代篇―



弘田正典（野球史研究）

スポーツ文献社

中高生のための日本野球史

吾に向ひて光る星 ― 野球史探訪 明治時代篇 ―

【目次】

※各章のタイトル部分をクリックするとジャンプします

第 01 章 「コロラド号」の航跡 ―― 明治04年の野球試合

軍艦「コロラド号」/ 韓米戦争(辛未洋擾) / 予期しない出来事 / 最古の野球記事 / 従来説の誤り / 新たな資料 / 雨・雨・晴天 / その後の「コロラド号」

第 02 章 ウイルソンと謎の「好球生」―― 明治05年の野球伝来

来日前のウイルソン / その頃の南校 / ベースボール伝来は 1872年09月か / 「好球生」とは誰か / ウイルソンのこと

第 03 章 白球のこだま ―― 明治09年の野球交流

ベースボールのひろがり / 当時の野球風景 / 1876年の日米野球 / 参加した人たちのプロフィール / 初期の日本人選手

第 04 章 平岡凞がまいた種 ―― 明治10年代の社会人野球

14歳の留学生 / クラーク博士と同じ船で帰国 / 1876年の日本の野球界 / 平岡の手紙が伝える新橋倶楽部 / クラブチームのひろがり / 当時のメンバー / 新橋倶楽部の解散・その後の平岡凞

第 05 章 坪井玄道と体操伝習所 ―― 明治10年代の野球伝播

体操教師・坪井玄道 / 軍部の動き / 体操伝習所への影響 /坪井のスポーツ観 / 体操伝習所の野球用具 / 卒業生たちが伝えたベースボール /『戸外遊戯法 一名、戸外運動法』/ その後の坪井玄道

第 06 章 外国人教師と教え子たち―― 明治10年代の学生野球

ふたつの系統 / アメリカのキリスト教 / ベースボールの歓び / 東京大学予備門 / 工部大学校 / 駒場農学校 / 東京英和学校 / 東京一致英和学校/慶応義塾/立教大学校/各地のベースボール / 当時の学生野球

第 07 章 インブリー事件の幻影 ―― 明治23年の一高野球

インブリー事件とは / 事件の背景 / 「和魂洋才」/ 事件の終止符 / 事件の原因をめぐって / 猛練習と三大試合

第 08 章 正岡子規と中馬庚 ―― 明治27年の「野球」命名

「野球」という言葉/ふたりの生いたち/訳語の移りかわり/病弱な従軍記者とエリート志願兵 / ふたりの野球論 / その後のふたり

第 09 章 国際試合のはじまり ―― 明治29年の日米野球

ベースボールの普及 / 横浜の外国人スポーツクラブと一高野球 / 外国人チームとの試合 / 野球とジャーナリズム / 当時の社会・時代の壁

第 10 章 早慶時代と武士の心 ―― 明治30年代の野球界

落日の一高 / 野球の普及 / 慶応と早稲田の躍進 / 早慶時代 / 「武士道」とベースボール / 少年・少女たち

第 11 章 害毒論争とデモクラシー ―― 明治40年代の野球問題

慶応・早稲田の海外交流 /「野球害毒論争」のおこり / 大きな波紋 / 「一等国」の現実 / 戊辰詔書・大逆事件 / 害毒論争の意義 / 新しい時代へ

第 12 章 ルールと用具の進化 ―― 明治時代の野球の発達

みる人のためのルール / 日本での規則 / 投手板の逸話 / 直木松太郎 / 用具類の発達 / 日本初のボールづくり / 野球産業のあゆみ / 伊東卓夫

附録Ⅰ 知の清流―齋藤三郎

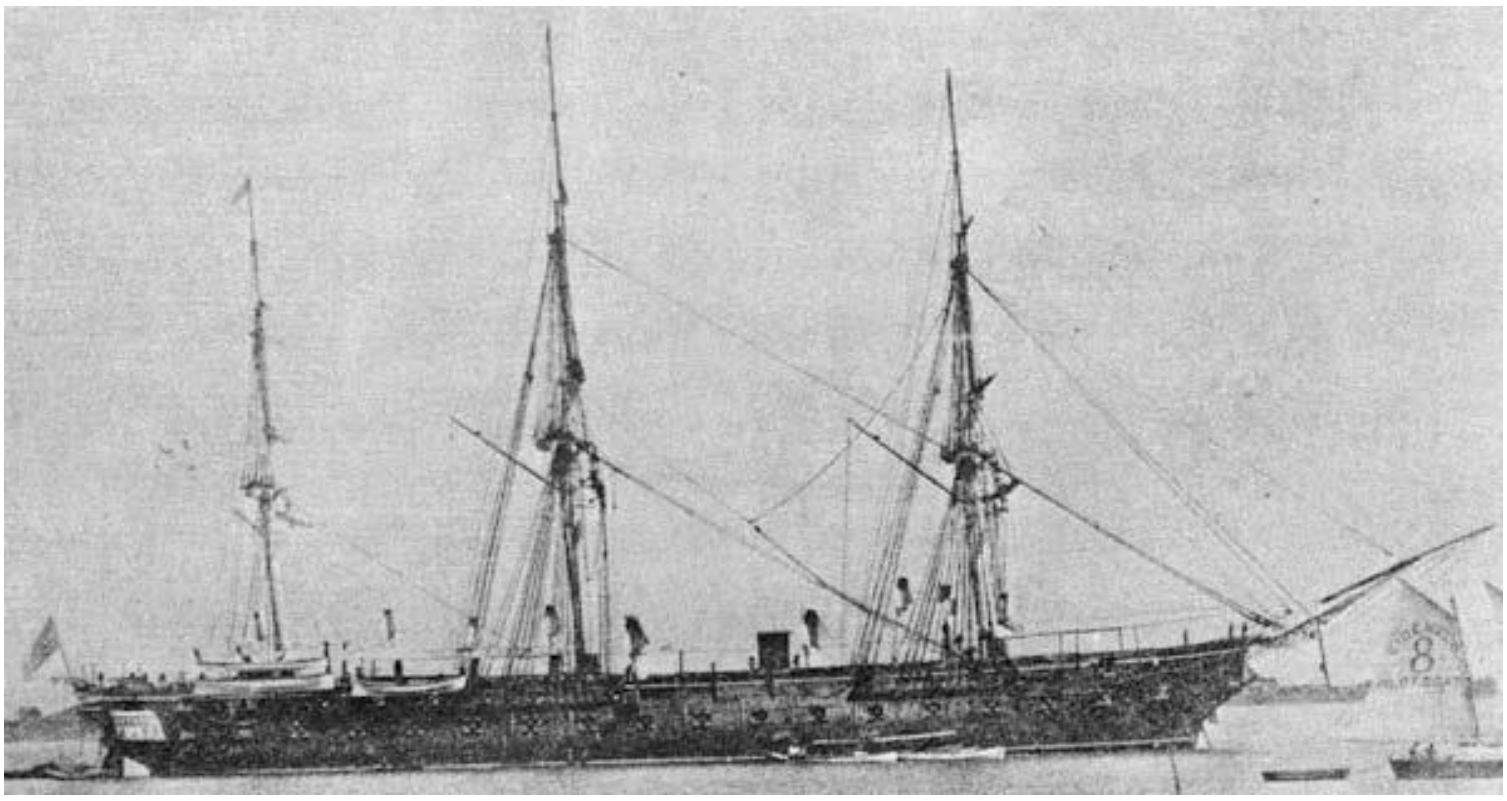
附録Ⅱ 明治時代の野球文献案内

附録Ⅲ 明治時代の野球年表

― 齋藤三郎とすべての野球人に―

「コロラド号」の航跡

1871(明治04)年の野球試合



USS *Colorado*, Rear Admiral John Rodgers' flagship

ベースボールが、日本へ伝えられたのは、いつのことでしょう。

野球史研究の先駆者・**齋藤三郎**によると、それは、1872(明治05)年のことです。

齋藤は、**日本人が国内で初めてプレーした時期を**あいまいな言い伝えではなく、書き残された資料によって**証明しました。**

一方、外国人同士の野球は、少なくとも 1869年7月には神戸でおこなわれていたと近年わかりました。(「THE HIOGO NEWS」1869.08.04 より)

また、日本での最古の試合記録は、今のところ「1871(明治04)年の横浜での外国人同士のゲーム」のものとされています。

このうもれていた事実が知られたのは、1988(昭和63)年でした。

ある新聞に「**初の野球試合は明治４年　横浜**」の見出しで、

「**横浜の外国人居留民と、貨客船「コロラド号」の船員との間で、同年十月三十日の土曜日に行われた**」という記事が掲載されています。

今回は、そのゲームに参加した人たちをのせた「コロラド号」を追いながら、日本の空にはじめて白球が飛んだ日について調べてみました。

軍艦「コロラド号」

さて、前述の新聞記事には、**貨客船「コロラド号」**とあります。

この優雅な旅を連想させる船名は、サンフランシスコと上海をむすぶ北太平洋定期航路の第一便として有名な民間会社の「コロラド号」のことでしょう。

けれども、調べてみると貨客船「コロラド号」は、そのとき日本にはいませんでした。

1871(明治04)年のゲームがおこなわれたときに日本へ来ていたのは、アメリカ海軍の軍艦「コロラド号」でした。

軍艦「コロラド号」は、当時のアメリカ海軍アジア艦隊のなかで、最大のスクリュー式フリゲート艦。全長80.37 メートル、船幅16 メートル、排水量3,425 トン、800馬力、最大速力は時速17 キロメートル。

船首に大きい槍のような飾り(バウスプリット)があり、むかしながらの三本のマストをもっています。

しかも、45門の大砲をそなえていました。その頃の日本の指導者たちからみれば、強くて頼もしい完璧な軍艦でした。

「コロラド号」は、1858年から 1885年までカリブ海やニューヨーク、あるいは、ヨーロッパなど世界各地で任務についています。

とくにアジア艦隊に所属していた 1871(明治04)年の朝鮮での戦い(辛未洋擾)では、中心的な役割をはたしていました。

この戦いは「韓米戦争」とも呼ばれ、東アジア近代史でも重要な事件とされています。

そして、この戦争が、日本野球史上の記念すべき試合となった横浜でのゲームの遠因にもなっていました。

「コロラド号」の航跡をおってみましょう。

韓米戦争（辛未洋擾しんみようじょう）

1870年の 04 月にニューヨークを出発した「コロラド号」が、ブラジルやシンガポールなどを経由して上海へ到着したのは、その年の 09月です。

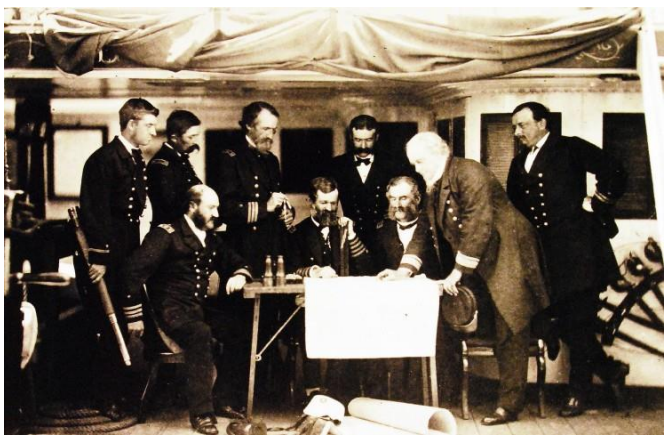
その後、朝鮮へ開国をせまるための遠征計画が正式に決定されました。そして、12月下旬には、遠征の準備のため長崎を訪れます。

また、翌年のはじめには、長崎から神戸・長崎・香港とあわただしく各地をめぐります。

さらに、04月上旬から上海近郊で遠征の最終的な用意をととのえて、1871年05月に長崎へふたたび姿をみせます。

当時の新聞によると、「コロラド号」の乗員は、700人。
その他の 04隻（「アラスカ号」「ベニシア号」「モノカシイ号」「パロス号」）とあわせて 総員 1,485名の遠征隊の旗艦として、05月16日に朝鮮へむけ出港します。

艦隊は、島々のあいだを測量しながら進み、やがて朝鮮の首都をうかがう江華島にほど近い場所へ碇をおろし交渉にのぞみます。


「コロラド号」船内での会議（1871 年）

そして、05月30 と 31 の両日「コロラド号」をたずねた朝鮮側の使者にアメリカは高級官僚との交渉を要求します。

また、06月01 日からは周辺の測量を開始するとも通告しました。

遠征隊は、予告どおり測量をしながら朝鮮領内に深く侵入します。そこは、朝鮮側にとって防衛上の最重要地点でした。

たちまち砲弾の飛びかう戦場となり、これをきっかけにアメリカ側の武力行動がはじまりました。



Hand-to-hand fighting in one of the Korean forts

06月10日、アメリカは海上からの擁護砲撃のもと江華島に上陸します。

朝鮮側は槍や刀が折れてもたちむかい、敵の眼に土を投げつけるなどして最後までたたかいました。

しかし、守りの拠点ともなる砲台は次々と破壊され、翌日には最大の要塞も制圧されてしまいます。

この二日間の激戦で、朝鮮側では有名な将軍をふくむ多くの人が犠牲となりました。

アメリカは、朝鮮側のあまりに凄惨な戦い方に、「(勝つには勝ったが)誰も記憶したくない勝利」と評したと言います。

その後も、朝鮮側に話しあいの意志がまったくないことは明白でした。

けれども、アメリカが、さらに大規模な攻撃をおこなうには、兵力不足でもありました。

遠征隊は朝鮮側の態度を非難し、今後アメリカ市民が朝鮮国内で遭難するようなことがあれば、かならず救助・保護するよう一方的な要求をします。

07月03日、これ以上の交渉は無理と判断した遠征隊は朝鮮をはなれ、二日後に中国の山東省芝罘（今の煙台）へ入港します。

これが、「辛未洋擾」ともよばれる1871(明治04)年の韓米戦争です。

この 40日間にもおよぶ不毛な戦いは、朝鮮側の多くの重要な施設を破壊しました。

しかも、犠牲者はアメリカに10数名、朝鮮側には200人以上にのぼる深刻な被害をのこしました。

予期しない出来事

その後、一ヵ月あまりを芝罘ですごした「コロラド号」は、二度目の朝鮮遠征の準備のため、08月上旬に艦隊を離れて日本へむかいました。

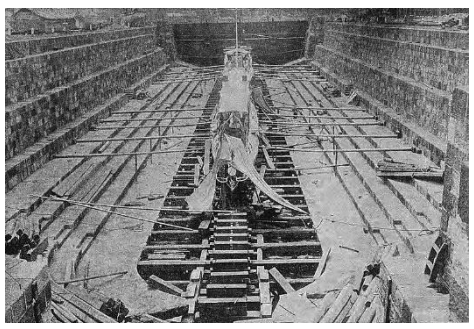
航海の途中は悪天候で荒れる海になやまされながらも、船は下関海峡にまでたどりつきます。

しかし、「コロラド号」は、この海難事故の多発した流れの速い海峡で予期せぬ事態におそわれます。

浅瀬の大岩に激しく乗りあげ、船体を大きく損傷してしまったのです。おそらくは、すさまじい衝撃音とともに船は大きく傾き、船員たちは大混乱したことでしょう。

座礁した「コロラド号」は、救助にかけつけた鹿児島藩の「豊瑞丸」によってかろうじて助けられます。

そして、傷ついた「コロラド号」が神戸を経て横浜の港へ姿をみせたのは、事故から10日ほどすぎた08月の下旬でした。



The first Yokosuka dry dock

その頃の日本で大型船の本格的な修理ができたのは、横須賀のドライドックだけです。

「コロラド号」の修理は、すぐに手配されました。

けれども、実際は、およそ一ヵ月間も横浜で待たされて、09月21日に横須賀へむかいます。

当時の横須賀は開かれた港ではなく、船員たちは自由な外出も許されていませんでしたが、警備を逃れて造船所の外へ出た者たちは、横須賀の住民たちから限りないもてなしを受けました。

また、船上では「ボール遊び」をするなどスポーツに明け暮れ、横須賀での滞在は、船員たちにとって楽しい思い出となったようです。

修理をおえて横浜にもどったのは、10月のなかばすぎでした。

最古の野球記事



1870 年ころの横浜

その頃の横浜は、文明開化の象徴的な街として、新しい土地の開発、鉄道や港の整備などが活発にすすめられていました。

外交官や宣教師・貿易商をはじめ千人以上の外国人が住み、さながら西洋の小都市のようでした。

横浜に滞在中の「コロラド号」の乗員たちは、居留民たちとの交流も深めていました。

それを伝える話題が、「ジャパン・ウイークリー・メール」という英字新聞の 1871(明治04)年11月04 日号にのこされています。

『ベースボールの試合が、先月三十日の土曜日に、九人の「コロラド号」の水兵と九人のシビリアン(居留民)とのあいだでおこなわれた』

これが、いまのところ日本国内で最古の野球試合として知られている記事で、先に述べた 1988(昭和63)年の新聞記事の元になった資料です。

従来説のあやまり

ところで、ゲームがおこなわれた場所と日付についても、これまでの通説は再検討しなければなりません。

まず、試合の場所は、当初から今の横浜公園(スタジアム付近)と一般に伝えられています。

しかし、横浜公園内のグラウンドは、この年にはまだ工事中でした。

完成したのは、翌年の 1872(明治05)年のことです。

また、その試合の記事をのせた英字新聞にも『**スワンプ(沼地地区)で**』と書かかれています。

このようなことから、本当の試合場所は、横浜公園からすこし西よりに数百メートルはなれた地域にあった「ヨコハマ・クリケット・クラブのグラウンド」(今の横浜中央病院あたり)だと確定できます。

このグラウンドは、1868年に、ふたりのイギリス人が海に近い沼地をうめたててつくったものです。

そのため不完全なところもありましたが、球技スポーツ用の本格的なグラウンドとしては、日本で最初のものでした。

それでは、試合の日付についてはどうでしょう。

これまでは、1871(明治04)年「10月30日の土曜日」におこなわれたとされてきました。

けれども、その年の10月30日は、「土曜日」ではなく「月曜日」でした。日付と曜日にちがいがあります。

そこで、もともとの英字新聞を読みかえしてみました。

すると、記事には、ただ『**先月30日の土曜日に**』とだけありました。

30日が土曜日なのは、その年では、09月と12月だけです。

試合の記事は、12月よりも前のものなので、「**先月30日の土曜日**」をあてはめるとすれば、該当する日付は、09月30日しかありえません。

このように考えて、日本国内で最古の野球試合は「1871年09月30日におこなわれた」とするのが妥当、と以前から提唱してきました。

新しい資料

ところが、2016(平成28)年の春、思いがけず新しい資料とであいます。

『横浜で初めての野球の試合が先月(10月)の26日に、九人のアメリカ人居留民とアメリカ軍艦「コロラド号」から選ばれた九人とのあいだでおこなわれた』

という記事を掲載した1871年の「ニューヨークヘラルド」紙です。

その内容を横浜の英字新聞とくらべると、

試合の日付（30日と26日のちがい）以外は、ゲーム当日のグラウンド状態や試合結果などすべてが一致していました。

横浜の英字新聞では、

『とてもすべりやすかった』と書かれたグラウンドの状態は、

「ニューヨークヘラルド」紙によると、

『前の二日間ずっとふりつづいた大雨の影響で非常に悪いグラウンド』

とありました。

　これで、横浜の英字新聞が、**『とてもすべりやすかった』**と記したグラウンドの状態は、**『前の二日間ずっとふりつづいた大雨』**が原因だったとわかります。

　あらためて「試合がおこなわれた日」について、当日の天気から調べてみましょう。

雨・雨・晴天

　そのころの日本には、まだ気象台もなく、公式な記録から試合当日の天気を確認することはできません。

　また、当時の新聞には気象欄がありましたが、その日の紙面は見つけることができませんでした。

　けれども、試合がおこなわれた前後の天気を調べる資料は、のこっていました。

　『関口日記』は、生麦村（いまの横浜市鶴見区生麦）で名主をしていた関口家の当主たちが、江戸時代から明治期の後半まで、五代にわたって書きつづけた日記でした。

　内容は、おもに日々の天気や日常生活・事件・金銭出納などです。

　試合は、その生麦村から直線距離で約五キロメートルのちかいところでおこなわれていました。

　『関口日記』により、09月後半から10月の末日までの約40日間の天気を調べてみると、

横浜の英字新聞にある「10月30日」は、前日からつづく「雨天」。
予定されていた行事(神楽)が延期されるほどの天気で、野球の試合は不可能でした。

また、『ニューヨークヘラルド』紙の「10月26日」は、「陰天(くもり)」、その前の二日間は両日ともに「薄晴」で、試合がおこなわれた日の条件とは一致しません。

さらに、自説の「09月30日」は「薄晴」、その前の二日間は、「晴天」、「陰天」となっていました。

その他の日についても同様に調べましたが、
結果として、この期間に二日間の雨のあとに天気が回復したという条件にあてはまる日は、「10月31日(雨・雨・晴天)」しかありませんでした。

したがって、日本最古の野球の試合は「1871(明治04)年10月31日の火曜日におこなわれた」と考えるのが妥当だと思われます。

今後の課題としては、
なぜ試合の日付が資料によって違っているのか。
両チームの選手がどのような人たちであったのかなど、アメリカ側にのこされている資料もふくめて、さらに調べをすすめる必要があります。

その後の「コロラド号」

傷ついた船体を修復された「コロラド号」は、晩秋になるとふたたび動きはじめていました。

11月の中旬には、天皇へ着任のあいさつをする上級将校たちをのせて東京にでむきます。
下旬には、横浜で仲間の船とボートレースをおこなったりもしました。
そして、結果的に二度目の遠征はなくなり「コロラド号」は 12月07 日に横浜をさります。

長崎を経て、アメリカのアジアでの拠点・上海へ帰還したのは、12月下旬でした。

こうして、30年近い「コロラド号」の航海のなかで、もっとも困難な一年がすぎていきました。

「コロラド号」の船員たちは、戦争のため一年以上も母国をはなれて、不安と危険と恐怖の連続でした。

そんななか、つかの間の休日が日本野球史の冒頭をかざります。

文明は戦争によって運ばれるとも言いますが、皮肉なことに日本でのベースボールのはじまりも、そのころの緊迫した国際情勢とふかく関係していたのです。

「コロラド号」の選手たちは、すべりやすいグラウンドにもかかわらず、夕暮まで洗練された試合ぶりをみせました。



Quartermaster's gang of the COLORADO, about 1871. In the front row, with the spool of line, is George R. Willis.

◎主な参考文献　（書名をクリックするとジャンプします）

『THE STORY OF OUR CRUISE IN THE US FRIGATE COLORADO1870-1872』
（BY GEORGE R. WILLIS / 1873年）

『薩藩海軍史』（公爵島津家編輯所 / 1928～1929年）

『朝鮮開國交渉始末』（奥平武彦 / 1935年）

『日本の野球発達史』（廣瀬謙三 / 1957年）

『横浜市史』第三巻上（横浜市 / 1961年）

『明治天皇紀』第二（明治二年正月-明治五年十二月）（宮内庁 / 1969年）

『居留外国人による横浜スポーツ草創史』（山本邦夫・棚田真輔 / 1977年）

『横浜市文化財調査報告書 第08輯の 17』関口日記 第17巻
（横浜文化財研究調査会［石井光太郎・内田四方蔵］ / 1981年）

『日本初期新聞全集 ： 編年複製版 31』『外務省日誌』第七号～第一四号　明治四年四月～七月
（明治4年4月（1871年5月）-明治4年7月（1871年9月））（ぺりかん社 / 1991年08月）

『Historical Dictionary of the United States Navy』（James Morris・Patricia M.Kearns / 1998年）

『旧・横須賀鎮守府庁舎&ドライドック ： 横須賀に眠る文化遺産』（長浜つぐお / 1998年）

＊「The Japan Weekly Mail」「THE HIOGO NEWS」「THE NAGASAKI EXPRESS」「The North-China Daily News」「横濱毎日新聞」などの 1869年～1872年の各紙各号

＊「The New York Herald（ニューヨーク ヘラルド）」紙（1871年12月18日付 10面）

＊「読売新聞」（1988年02月03 日付 朝刊27面）

＊「Newly Identified Newspaper Article Pushes Earliest Date of Japanese Baseball Back to July 1869」（Robert K. Fitts/2025.05）
〈https://www.robfitts.com/post/newly-identified-newspaper-article-pushes-earliest-date-of-japanese-baseball-back-to-july-1869〉

今回は **1871（明治04）年の野球試合** について調べてみました

行 到 水 窮 處　　行きて至る 水極まる所

坐 看 雲 起 時　　座して見る 雲起こる時

王維「終南別業」より

【参考資料 01】

A BASE BALL match was played on Saturday the 30th ultimo, between nine of the sailors of the Colorado and nine civilians. The ground selected was on the swamp, and was very slippery; but despite this drawback a good game of four innings aside was played, the Colorado men especially being very smart in the field. The following is the score.

	1st,inn;	2nd,inn;	3rd,inn:	4th,inn;	Total
Colorado……2	2	4	6	15	
Civilians……5	0	1	5	11	
The Colorado Winning by				3	

"The Japan Weekly Mail" November 04, 1871

先月 30 日の土曜日、コロラド号の船員 9 人と民間人 9 人のあいだでベースボールの試合が行われました。選択されたグラウンドは沼地にあり、非常に滑りやすかったにもかかわらず、4 イニングの好ゲームがおこなわれました。とくにコロラドの男たちはフィールドで非常に賢かった。 以下はそのスコアです。

	1回	2回	3回	4回	合計
コロラド号	2	2	4	6	15
シビリアン	5	0	1	5	11
勝者 コロラド号					3

「ジャパン ウイークリー メール」紙 1871 年 11 月 04 日より

【参考資料 02】

AN AMERICAN FIELD MATCH.

The first base ball match ever play in Yokohama came off on the 26th ult, between nine American residents of this place and a picked nine of the United States ship Colorado, in spite of the ground being in very bad condition, on account of heavy rains during two days previous, a very good game of four innings a side was played, and it was only brought to a close on account of darkness. In the four innings the Colorados made fourteen runs to the civilians' eleven, the navy being the victors by three runs.

The strict rules of the National Base Ball Association were not cnforced.

"The New York Herald" Monday, December 18, 1871

アメリカン・フィールド・マッチ

横浜で初めて行われたベースボールマッチは、先月 26 日に行われました。当地に住むアメリカ人 9 人とアメリカ艦船コロラド号の選抜 9 人との試合で、前二日のあいだ続いた大雨のためにグラウンドは非常に悪い状態でしたが、4 イニングの非常に良いゲームが行われ、暗くなってから終了しました。試合は 4 回まで行われ、コロラド軍が 14 点、市民軍が 11 点、海軍が 3 点差で勝利しました。

全米ベースボール協会の厳格なルールは適用されませんでした。

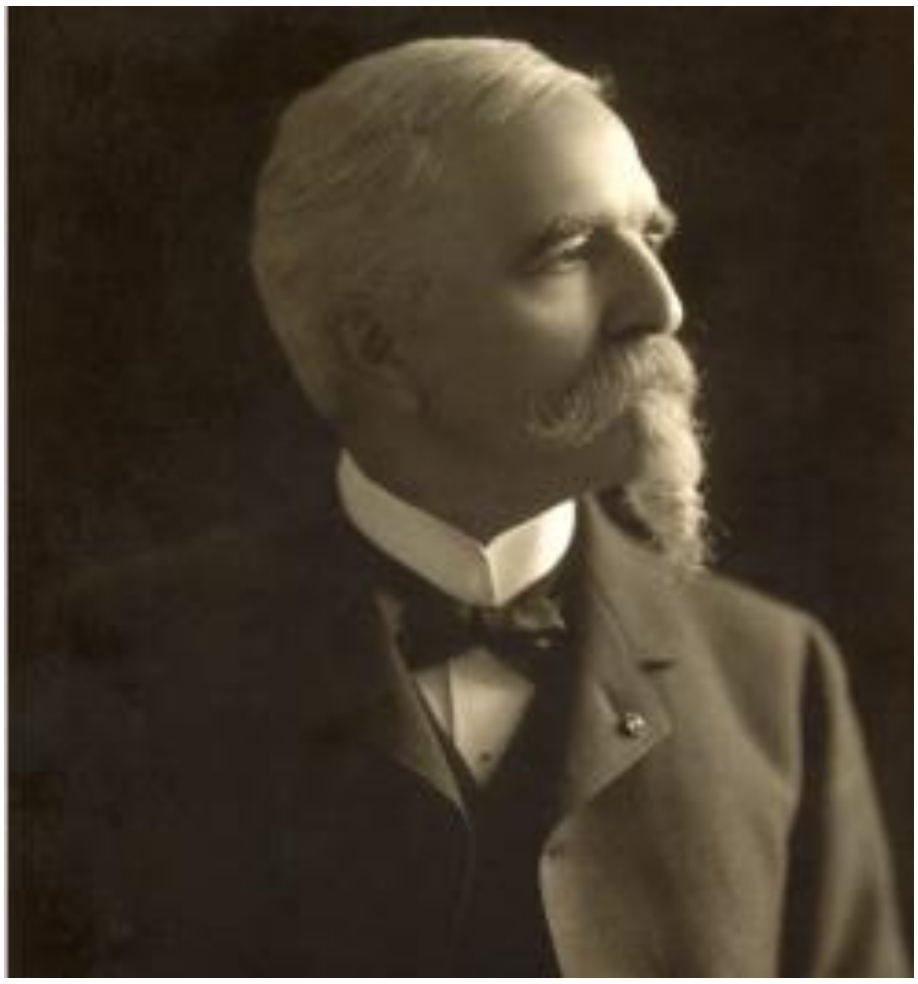
「ニューヨーク デイリー ヘラルド」紙 1871 年 12 月 18 日より

【参考資料 03】

No.	西暦	曜日	和 暦 （明治 ）	天気（『関口日記』による）	『横浜毎日新聞』		備考
					天気	正午気温	
01	1871/09/22	金・ＦＲＩ	M04/08/08	陰天	半晴	22.77	
02	1871/09/23	土・ＳＡＴ	M04/08/09	薄晴	半晴	17.22	
03	1871/09/24	日・ＳＵＮ	M04/08/10	薄晴	半晴	15.55	
04	1871/09/25	月・ＭＯＮ	M04/08/11	陰天	曇	20.00	
05	1871/09/26	火・ＴＵＥ	M04/08/12	薄晴 夕刻より雨	曇	23.89	
06	1871/09/27	水・ＷＥＤ	M04/08/13	陰天 昼前折々少雨	小雨	22.22	
07	1871/09/28	木・ＴＨＵ	M04/08/14	晴天	晴	22.22	
08	1871/09/29	金・ＦＲＩ	M04/08/15	陰天	晴	22.78	
09	1871/09/30	土・ＳＡＴ	M04/08/16	薄晴 朝ノ内雨降	半晴	16.67	旧弘田説
10	1871/10/01	日・ＳＵＮ	M04/08/17	晴天	晴	23.33	
11	1871/10/02	月・ＭＯＮ	M04/08/18	陰天	雨	20.00	
12	1871/10/03	火・ＴＵＥ	M04/08/19	薄晴	半晴	25.00	
13	1871/10/04	水・ＷＥＤ	M04/08/20	陰天	曇	25.00	
14	1871/10/05	木・ＴＨＵ	M04/08/21	薄晴	曇	25.00	
15	1871/10/06	金・ＦＲＩ	M04/08/22	薄晴	曇	23.89	
16	1871/10/07	土・ＳＡＴ	M04/08/23	陰天 小雨降	雨	15.56	
17	1871/10/08	日・ＳＵＮ	M04/08/24	雨天	雨	15.00	
18	1871/10/09	月・ＭＯＮ	M04/08/25	雨天	雨	15.00	
19	1871/10/10	火・ＴＵＥ	M04/08/26	大雨	雨	18.89	
20	1871/10/11	水・ＷＥＤ	M04/08/27	晴天	晴	20.00	
21	1871/10/12	木・ＴＨＵ	M04/08/28	晴天	晴	21.11	
22	1871/10/13	金・ＦＲＩ	M04/08/29	晴天	晴	21.11	
23	1871/10/14	土・ＳＡＴ	M04/09/01	薄晴	・・・	・・・	
24	1871/10/15	日・ＳＵＮ	M04/09/02	陰天	・・・	・・・	
25	1871/10/16	月・ＭＯＮ	M04/09/03	晴天	・・・	・・・	
26	1871/10/17	火・ＴＵＥ	M04/09/04	晴天	・・・	・・・	
27	1871/10/18	水・ＷＥＤ	M04/09/05	晴天	・・・	・・・	
28	1871/10/19	木・ＴＨＵ	M04/09/06	晴天	・・・	・・・	
29	1871/10/20	金・ＦＲＩ	M04/09/07	晴天	・・・	・・・	
30	1871/10/21	土・ＳＡＴ	M04/09/08	晴天	・・・	・・・	
31	1871/10/22	日・ＳＵＮ	M04/09/09	陰天 朝ノ内雨降	・・・	・・・	
32	1871/10/23	月・ＭＯＮ	M04/09/10	薄晴	・・・	・・・	
33	1871/10/24	火・ＴＵＥ	M04/09/11	薄晴	・・・	・・・	
34	1871/10/25	水・ＷＥＤ	M04/09/12	薄晴	・・・	・・・	
35	1871/10/26	木・ＴＨＵ	M04/09/13	陰天	・・・	・・・	「The New York Herald 」1871.12.18
36	1871/10/27	金・ＦＲＩ	M04/09/14	雨天	・・・	・・・	
37	1871/10/28	土・ＳＡＴ	M04/09/15	薄晴	・・・	・・・	
38	1871/10/29	日・ＳＵＮ	M04/09/16	雨天	・・・	・・・	
39	1871/10/30	月・ＭＯＮ	M04/09/17	雨天	・・・	・・・	「The Japan Weekly Mail 」1871.11.04
40	1871/10/31	火・ＴＵＥ	M04/09/18	晴天 岸谷諏訪神社神楽安五郎屋敷二而興行昨日之処雨天故今日ニ相成英太郎行	・・・	・・・	☆弘田新説

ウイルソンと謎の「好球生」

1872(明治05)年の野球伝来



Horace E. Wilson（1843 年 02 月 10 日 - 1927 年 03 月 04 日）

ホーレス・Ｅ・ウイルソン(Horace E. Wilson)が、日本でベースボールを教えはじめたのは、１８７２(明治05)年です。

しかし、古い野球の本には、１８７３(明治06)年に**ウイルソン**ともうひとりの外国人教師が伝えたと書かれています。

これは、１９１６(大正05)年に出版された『**野球年鑑**』という本が、もとになっていて、以前は**１８７３年＝「明治06年説」**が、ベースボール伝来の定説となっていました。

それをくつがえしたのは、在野の野球史研究者・**齋藤三郎**でした。彼は「**好球生**」という人が書いた新聞の投書をみつけて、それまでの定説よりさらに一年前の、１８７２(明治05)年に**ウイルソン**ひとりが伝えたとする「**野球伝来＝明治05年説**」を１９３９(昭和14)年に発表しました。

今回は、日本にはじめてベースボールを伝えたという**ホーレス・Ｅ・ウイルソン**(1843-1927)や**齋藤三郎**が発掘した「**好球生**」のことなどについて調べてみました。

来日前のウイルソン

ホーレス・E・ウイルソンは、1843年02月10日にアメリカ東部の**メイン州ゴーラム**(Gorham,Maine)で生まれました。

少年期を同地ですごし、1863年(20歳の年)から北軍の兵士として南北戦争に参加します。

そして、1866年に軍隊生活をおえた（除隊時の階級は少尉）のちに、**ゴーラム**の隣町**ウェストブルック**(westbrook,maine)での短い教師生活の後、1868年頃には**サンフランシスコ**で簿記係をしていました。

ウイルソンが来日したのは、1871(明治04)年のことです。

その頃に、**サンフランシスコ**の日本領事をしていた**チャールズ・W・ブルークス**が、**大学南校**(今の東京大学の前身校)の教頭**ギドー・H・F・フルベッキ**の依頼により選任したふたりの教師のなかのひとりでした。

そのとき彼は28歳、学校長級の待遇です。

この人選は、のちの日本野球にとっても、実に幸運な選考でした。

ウイルソンは、09月01日に妻と幼いひとり息子をつれて、貨客船「ジャパン号」でサンフランシスコをたち、09月25日に横浜へ到着しました。

同じ船には、**マリオン・M・スコット**(師範教育の元祖)や**アンリ・A・プレグラン**(横浜ガス灯の導入者)、**前島密**(郵便制度の確立者)なども乗りあわせています。

彼が、**南校**（元の大学南校）へ着任したのは、09月26日でした。

その頃の南校

ここで、**ウイルソン**が教えた**南校**についてみておきましょう。

「廃藩置県」が実施される以前の 1869(明治02)年に、明治政府は、**開成所**（旧幕府時代からつづく学校）を**大学南校**とあらためます。

そして、「**貢進生**」とよばれる各藩から推薦された学生たちを東京にあつめ、その学校で学ばせていました。

場所は、神田一ツ橋。今の学士会館の近くです。

「**貢進生**」は、様々な分野で将来を期待されたエリートたちです。

数百人の若者が、英語やフランス語・ドイツ語など語学別にクラス編成されていました。

しかし、1871(明治04)年頃になると、学生たちの学力差が著しくなるなど様々な問題に直面していました。

そこで、学校側は思い切った改革をおこないます。

まず、夏休みがおわって新学期をむかえた初日の09月05日、それまでの「**大学南校**」から「**南校**」へと校名が変わります。

また、「**貢進生**」を廃止し優秀な学生だけをあらためて入学させる決定もしました。

この決定は、どんなに成績が優秀でも日頃の態度によっては、退学になると噂されたほど、学生たちを大いにあわてさせました。

ウイルソンが来日したのは、このような混乱のさなかでした。

そして、着任した一ヵ月あまり後には「**貢進生**」の廃止にともない学校そのものが一時的に閉校されます。

閉校中には、新しい校則を定めるなどの改革が進められました。

学校が再開したのは、12月に入ってからです。

「**南校**」は、その翌年(1872年)の 09月に「**第一大学区第一番中学**」となります。

はるばると海をこえて、バットとボールをもってきた**ウイルソン**にすれば、すぐにでも学生たちに野球を教えたいと考えていたのかもしれません。

けれども、現実は学校そのものが激しい変化のなかにありました。

学生たちにしても、ベースボールを楽しむ余裕はなかったでしょう。

また、この学校に運動場ができたのは、1872(明治05)年05月と伝えられています。

そもそも、野球ができる環境も整っていませんでした。

ウイルソンが、来日直後にベースボールを伝えた記録が残されていないのは、このような事情があったためとも思われます。

ベースボール伝来は1872(明治05)年09月か

それでは、**ウイルソン**がベースボールを実際に教えはじめたのは、1872(明治05)年の何月頃か、すこし詳しく考えてみましょう。

ここに、「**野球の來歴**」という短い一文があります。

それは、1896(明治29)年07月に「**好球生**」という野球好きな人が、「ベースボール伝来」に関する**正岡子規**の誤りをただすために書いた新聞の投書です。

おそらく、**ウイルソン**から直接に指導をうけた人が、二十数年前の自分の体験をふりかえって書いたとされています。

「**好球生**」は、まず**子規**の誤りを指摘したのち、『**抑ゝベースボールの初りは明治五年の頃なりし**』と書きはじめます。

そして、1872(明治05)年頃に**第一番中学**で英語や歴史などを教える**ウイルソン**という人がいたと続け『**此人常に球戯を好み體操場に出てはバットを持て球を打ち余輩に之を取らせて無上の樂とせし**』と書きすすめています。

これが、「**好球生**」の伝えるベースボールが日本でおこなわれた最初期の様子です。

もちろん、今のようにグラブやミットなどなく、素手でボールを追いかけていました。

まわりの人たちは、この初めて目にする珍しい光景にとてもおどろいていたことでしょう。

「**好球生**」の文章をそのまま素直に解釈すると、

ウイルソンが学生たちに野球を教えはじめたのは、**南校**が**第一番中学**と改称された1872(明治05)年09月以後ということになります。

けれども、その年の春には、学校も落ち着きはじめ運動場もできていました。

そう考えると、1872(明治05)年の 05月頃から（野球シーズン到来とともに)、**ウイルソン**が学生たちに教えていたとしても不思議ではありません。

「好球生」とは誰か

ところで、「**好球生**」とは誰のことでしょう。

ウイルソンが、ベースボールを教えはじめた時期を知るためにも、この問題を考える必要があります。

けれども、「**好球生**」のことを最初に取りあげた**齋藤三郎**も、その人が「誰」であったのか、確信をもつまでにはいたりませんでした。

また、その後の研究でも、あまり進展はないようです。

そこで、はっきりとした断言はできませんが、「**好球生**」とは誰か、ということをあえて推理してみましょう。

この「**野球の來歴**」という文章が、「**好球生**」の実体験にもとづくとすれば、彼は、1872(明治05)年頃に「**第一番中学**」で、**ウイルソン**から歴史の授業をうけていたと考えられます。

ところが、これを裏付ける具体的な証拠は残されていません。

それは、「**第一番中学**」と呼ばれた時期が、およそ半年間と短く、移りかわりも激しかったからだと思われます。

そこで、その頃の科目表や学生名簿、あるいは当時の新聞・雑誌など間接的な資料から様々に調べてみました。

　すると、この時期に在籍していた学生たちのなかで、歴史(史学)の授業をうけていた学生は、全部で85人いることがわかりました。

　一方、**ウイルソン**は「**第一番中学**」になる前の受け持ちクラスでは、歴史の授業をしていません。

　それは、当時の時間割りから明らかです。

　また、翌年(1873年)の 07月以降は簿記や数学、語学などを専門に担当するようになりました。

　このような事実から、**ウイルソン**が歴史(史学)の授業をしていたのは、「**第一番中学**」の時期（1872年09月から翌年03月まで）以外には、考えにくいのです。

　そして、そのころの外国人教師の雇用状況なども考えあわせると、ウイルソンが歴史を教えたと思われる学生たちは、24名います。

　そのなかで、少なくとも1876(明治09)年（「**好球生**」の投書で具体的に書かれた最後の年）まで在籍していた人は、次の14名

伊藤新六郎、大島道太郎、河上謹一、久米祐吉、高橋健三、高松豊吉、高山甚太郎、 種田織三、中久木信倫、西川鐵次郎、畠山重明、三田善太郎、松村任三、 渡邉渡　でした。

　このなかで、**中久木信倫**という人は、後に改姓して「**好球生**」の投書に『**馬場信偏**（偏は倫の誤り)』とあり、**久米祐吉**は『久米某』とされています。

　また、**松村任三**(植物学者)、**三田善太郎**(土木技師)、**大島道太郎**(採鉱冶金学)、**河上謹一**（日本銀行理事）など様々な分野で知られている人たちもいます。

「**好球生**」は、この14人の誰かに違いない—そう考えて、投書を何度も読みかえしました。

　すると、この明治の薫り高き文章は誤りを決してそのままにしておけない人物が書いたものだと、あらためて気がつきます。

そして、この投書は、**正岡子規**の野球伝来についての誤った記事から、わずか三日後に掲載されています。

これは、一般読者からの反響としては、あまりにも早い時期です。

「**好球生**」は、この新聞や**正岡子規**とも深いつながりがあった人だと推測されます。

さらに、投書の後半には、当時の選手たちの氏名と二十数年後の職業・肩書きが列記されています。

彼は、そういうことを日頃から正確に知りえる立場の人でした。

そこで、このような人を前記した 14名のなかから探してみると、ひとりの人物が浮かびあがってきます。

その人は、この新聞社の社長とも古くから親交があって、新聞の運営にもかかわっていました。

また、若い頃の**子規**は、彼を面識のある著名人と友人への手紙に書いています。

さらに、**子規**の「自らを恃む(自恃)」という人格形成には、彼が影響を与えたと思われる点もあります。

これらのことから、その人は、**子規**の新聞が投書を掲載するとき、内容について最も信頼できる人でもあったと考えられます。

そういう人からの投書であればこそ、**子規**の書いた誤った記事のわずか三日後に「**野球の來歴**」という投書が掲載されたのです。

また、その人は官報の発行にも最初期からかかわっていました。

政府関係など、様々な人事にも精通していたと考えられます。

投書には、そういう彼の配慮かと思わせる部分もあります。

それは、初期の選手たちのなかで、最も熱心であった**宇田川三郎**という人が記されていないのです。

宇田川は、のちに外交官となりますが、「**野球の來歴**」という投書が書かれる数年前に没していました。

それは、紙面の都合や記憶の問題かもしれません。

けれども、この投書に名前がある人は、その時点で全員が生きていたのです。

さらに、他の 13名についても同様に調べましたが、これほど条件にあてはまる人はみあたりません。


高橋健三

謎の「**好球生**」その人とは、かつての貢進生・**高橋健三**(元内閣書記官長)のことでしょう。

高橋は、1872(明治05)年05月頃には**ウイルソン**のクラスではありません。

彼は、歴史が好きで、何事にも厳密な性格でした。そのため、仮に**ウイルソン**が担当クラスの学生たちに春頃からベースボールを教えていたとしても、自分が実際に体験していない時期のことはあえて書かなかったとも推測されます。

さて、投書には『**此頃高等學校と米國人の試合ありたるを見て懐旧の情に堪へず**』とあります。

もしも、高橋が「**好球生**」だとすると、彼は、その試合をみていたことになります。

そのゲームは、東京でおこなわれた初の「国際試合」として話題にもなりました。([第09章 国際試合のはじまり]を参照)

「一万人」ともいわれる多くの観客のなかには、彼の学生時代からの古い友人たち（**杉浦重剛・久原躬弦**など）の姿もありました。

高橋が、彼らといっしょにいた可能性は高いと思われます。

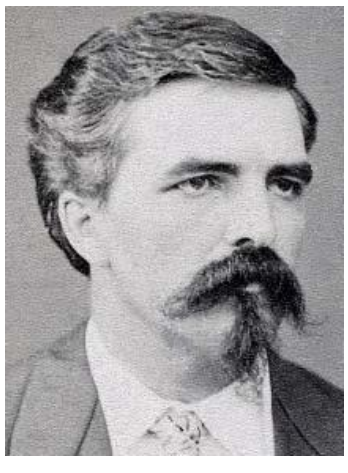
けれども、現在その証拠はなく、今後の課題となっています。

いずれにしても「**好球生**」は、その「国際試合」をみていました。

そして、思わず筆をとらずには、いられなかったのです。

ウイルソンのこと

ここで、若き日の「**好球生**」たちに野球を教えた**ホーレス・Ｅ・ウイルソン**について紹介しておきます。



若き日のウイルソン

彼は、ひげの形から「なまず」というニックネームで学生たちに親しまれていました。

そして、学生たちにベースボールのほかに器械体操の指導もするほどスポーツが好きでした。

授業中は非常に厳しいが、教室外では大変やさしい先生だったようです。

また、**ウイルソン**は、仲間の教師たちからも信頼されていました。南北戦争に参加した影響から大学にまで進めなかった彼のために、特別に学位の申請をしてくれた同僚もいたほどです。

けれども、アメリカの独立記念日にまつわる些細なトラブルから当局側の取り調べをうけるという苦い経験もしたようです。

1877(明治10)年07月、**ウイルソン**は日本での六年間の教師生活に別れをつげ帰国の途につきました。

その際、在職中の功労にたいし、賞与と記念品が贈られています。家族も男の子がひとり増えていました。

そして、帰国後はサンフランシスコに永住して、同地の日本協会のセクレタリー、在郷軍人会の分団長、あるいは図書館や州立病院の理事などを歴任します。

不幸にも彼の息子のひとりは、若くして亡くなりました。

しかし、海をへだてた異国には、多くの頼もしい息子たちがいるのです。彼は、今「日本野球の父」とも呼ばれています。

ホーレス・Ｅ・ウイルソンは、1927(昭和02)年03月04 日、病身の二年を経て、動脈硬化症のため息をひきとりました。享年84歳。

たとえ「**好球生**」が誰であれ、彼はエリートの階段をのぼりつめたのかもしれません。

けれども、その内面には他人に語れないこともあったでしょう。

自分の心を鎧に押し込むような歳月のなかで、ある日、目にした野球の試合が、彼を懐かしい時へとさかのぼらせます。

そして、その記憶の底に輝いていたのは、ウイルソンとの楽しい日々の思い出でした。

自らを「**好球生**」と名のる その人は、あたかも大切な仕事を成しとげたかのように、投書のおわりを次の言葉でむすんでいます。

『別に要なき事なれど一言申送りぬ』

◎主な参考文献

『第一大學區第一番中學一覧表』（第一番中學/1873年）

『東京開成學校生徒月表』（東京開成學校/1876年）

『自恃言行録』（川那辺貞太郎〔編〕/1899年）

『旧東京大學 三幅對』（小谷保太郎〔編〕/1903年）

『東京帝國大學五十年史』（東京帝國大學/1932年）

『日本野球創生記』（君島一郎/1972年）

『貢進生』（唐沢富太郎/1974年）

『文部省雑誌』複製版（佐藤秀夫〔解題・解説〕/1981年）

『お雇い米国人科学教師』増訂版（渡辺正雄/1996年）

『明治五年のプレーボール』初めて日本に野球を伝えた男―ウイルソン（佐山和夫/2002年）

＊「Shipping Intelligence」（「The Japan Weekly Mail」/1871年09月30日付）

＊「野球の來歴」（好球生/「日本新聞」1896年07月22日付）

＊「野球の渡来年代に就て」（齋藤三郎/「讀賣新聞」1939年12月15日付から18日付 朝刊に連載）

今回は **ウイルソンと謎の「好球生」** について少し調べてみました

“baseball as the very symbol, the outward and visible expression of the drive, and push, and rush, the struggle of the raging, tearing, booming 19th century.”

「野球は、まさにシンボルであり、19世紀という激動し、引き裂かれ、沸き立つような時代の原動力、推進力、突進力、闘争心を目に見える形で表現したものである。」

マーク・トウェイン(Mark Twain 1835-1910 アメリカ人作家)の言葉

（1889年04月08日　ニューヨークのレストラン「デルモニコ」でのスピーチより）

【参考資料01】

●野球（べーすぼーる）の來歴　好球生投

廿日の日本新聞にベースボールの本邦に傳はりしを明治十四五年の頃とし 平岡技師が米國より歸りて鐵道局に始めて此れを試みたりとありしが左に非ず 抑々ベースボールの初りは明治五年の頃なりし 今の高等商業學校の處に南校といふ學校あり 明治五年頃は第一大學區第一番中學と 名付けて唯一の洋學校なりしが英語歴史抔を教ふるウイルソンと云へる米國人あり 此人常に球戯を好み體操場に出てはバットを持て球を打ち 余輩に之を取らせて無上の樂とせしが漸く此仲間に入る學生も増加し 明治六年第一番中學の開成學校と改稱し今の錦町三丁目に宏壯の校舎建築成り開業式には 行幸抔もあり運動場も 天覧ありし位に廣々と出來たりし事 故以前に勝りて體操の方法も擴張し來り兵式器械體操抔も始まり彼のウイルソンは米國の南北戦争に出でたる人とて兵式器械體操抔も中々に能くやりたり各學生も氏に就て大分學びたり 此頃より何時となく余輩の球戯も上達し打球は中空を掠めて運動場の邊隔より塲外へ出る程の勢を示せしが終には本式にベースを置き組を分ちて野球（べーすぼーる）の技を初むるに至れり 左れど初めの事とて其業の見るべき程の事もなかりしが明治七八年に至りては非常に發達し終に或人の照會によりて横濱の米國人と試合を爲したる事も度々なりし 八年九年の頃は校内毎土曜日 には球技盛んに流行し見物人も山をなして外人と戰ふ時抔は非常の人氣なりし 此頃高等學校と米國人の試合ありたるを見て懐舊の情に堪へず 試に我記憶に殘る創業時代の撰手を擧ればピッチャー本山正久（拓殖務書記官）久米某、キャッチャー石藤豊太（陸軍技師）福島廉平、ファースト・ベース田上省三（長崎裁判所判事）高須碌郎（第一高等学校教授）セカンドベース青木元五郎、（土木監督署技師）青山元、（牧馬監督官）サードベース秋山源蔵（横濱地方裁判所長）、馬場信倫（中央氣象臺技手）、ショート、ストップ、レフト、ライトフィールド其他は一々能く覚えざれど 小藤博士、中澤博士、平賀博士、千頭清臣（高等學校教授）谷田部梅吉 五代龍作、大久保利和、牧野伸顕、喜多村彌太郎 其他 知名の學士數名なりし此れより 東京大學より 豫備門に第一高等中學と漸次傳へくて今日に至れるなり 故にベースボールの誕生地は一ツ橋外の舊高等中學校の在りし所なれば野球は十四五年の頃鐵道局に於て初めたるものに非ず別に要なき事なれど一言申送りぬ

升曰く吾輩のおぼろげなる傳聞を以てベースボールの來歴を掲げしに好球生此奇あり以て其の誤を正す 吾輩の詳に其來歴を知るを得たるは實に好球生の賜なり。依て其全文を掲げて正誤に代ふと云爾。

「日本」新聞　１８９６（明治29）年07月22日（一）より

【参考資料02】

●ベースボール談　其の助

（一）発　端

ベースボールのことですか、判りましたー、世間では中々に評判が高い、頻りにベースボールくといふて居る、新聞にも書き、雑誌にもかき、誠に八方で持て囃すけれどもが、それがです、唯々勝敗とか、結果とか、點數とかいふことばかりで以て、凡そ今までに、扨てこのベースボール、所謂野球術といふものは、何ういふ調子にして遣るものであるか、又それは、何時頃から初まつたものであるか、今東京に於て、學生社會、紳士仲間の中に於て、何ういふ所を本部として居るとかなどといふことに到りましては、實に書いたものがない、二三年前、僅に日本新聞にです、アレは誰が書きましたか、慥かに正岡ねー、アノそれ御存知でせう、俳諧の名人です、あの正岡子規君が随筆様に書いた、さうするとそれに少々違つて居る處があるといふて、直ぐ其翌日、その正岡君の文章が出た翌日、誰か知りませんが、投書してそれに追加したことがあつたが、實にこれだけの外、一ツとしてそんな事を書きましたものは御坐いません、だからね、門外の人、この遊戯術を知らぬ人には、少しも此術のやり方、それから規則、乃至は掛引きなど、追々に申したいと存じて居ります。

この評判の高いベースボールが、趣味も興味も興へない、從つてそれを引入れて益々此術を擴げるといふ様なことは出來ん、と兎角物不足なる感を懐いて居りました、處にです、高等學校の校友會から、雑誌の號外として、詳しく書いたものを出し、又々ミマス輩から、野球術といふ本をも出しましたのは、至極此遊戯のためによいことと喜んで居ります、即ち私が御話し致しますことも、畢竟は、この二ツのものを本と致しまして、それに新しき本、舶來の本などから少々附け加へて、やるまでのことであります。

其處でーと、其の話すことの順序です。第一にはこの野球術の歴史、歴史といふのも大袈裟ですが、兎に角にこの日本に置きまして、今日の如く發達してまいりましたことの筋路、それをまづ一通り御話し致しまして、其次ぎに、遊戯といふことを重んじないですからいけません、待合とか、料理屋とかいふもの丶外には、殆ど樂しみといふことのない様に心得、遊びといふ言葉が、一種忌むべきことを意味するなどとは、實に存外なことであります、だから、何んでも、書き立て、話したてゝ、この面白いベースボール、それから玉突ね、あんな種々のもの、所謂眞正の遊びなるものを一般の人々に教へねばなるまいと私は常に心掛けて居ります。

さてこれから、追々と今申しあげました順序によりて御話し致しませう、時節柄、必ず一部の人には喜ばれるでせうよ。

「國民新聞」１８９８（明治31）年04月20日（一）より

【参考資料 03】

American Teachers for Japan

Among the passengers on the steamship Japan, which sailed from San Francisco for Yokohama, a few days ago, were Horace Wilson and M.M.Scott, gentlemen well-known in educational circles of this city. They have accepted positions as teachers in the Imperial College of Yeddo, with which institution Rev. P. V. Veeder, (formerly of Union College, Schenectady, and later of the San Francisco City College) is connected. Japan, says the San Francisco Bulletin, is determined to progress rapidly within the next few years, in order make up for lost time; and the surest and best way for the development of the country lies in the employment of American educators and artisans. It is evident that the Japanese do not need prompting on this point.

Springville Journal (Springville, New York) 07 Oct 1871, Sat・Page 4

日本のためのアメリカ人教師

数日前サンフランシスコから横浜に向けて出航した蒸気船「ジャパン号」の乗客の中には、この街の教育界でよく知られている紳士であるホーレス・ウイルソンと M.M. スコットがいました。彼らは、P.V. ヴィーダー牧師（以前はスケネクタディのユニオンカレッジ、後にサンフランシスコ・シティカレッジ）が関係する江戸のインペリアルカレッジで教師としての地位を受け入れました。「サンフランシスコ・ブレティン」紙によると、日本は失われた時間を埋め合わせるために、今後数年以内に急速に進歩することを決意しています。そして、国の発展のための最も確実で最良の方法は、アメリカの教育者と職人の雇用にあります。この点については、日本人に促す必要がないことは明らかです。

「スプリングビルジャーナル」紙（ニューヨーク州スプリングビル）
1871 年 10 月 7 日、土曜日・4 頁より

【参考資料 04】

TWO NEW SUPERVISORS APPOINTED BY MAYOR.

Henry J. Stafford and Horace Wilson

Selected to Fill Vacancies on the Board.

MAYOR PHELAN yesterday announced the appointment of Horace Wilson and Henry J. Stafford to be members of the Board of Supervisors. Stafford and Wilson were selected to succeed the late Supervisors Helms and Duboce, who died in office. In politics Stafford is a Democrat, while Wilson is a Republican. Neither one of the appointees, when interviewed, would outline his intended course as a city father. Both said they would be governed by circumstances as they arose.

（omission of middle part of a text）

Horace Wilson is a native of the State of Maine and came to California in 1868. He was for sixteen years librarian of the Mechanics' Institute, and is at present a trustee of the same institution. He was a member of the Charter Convention of One Hundred. He is a Grand Army man and member of the Loyal Legion, having served in the Civil War in the First Maine Cavalry and Twelfth Infantry. He is at present. Secretary of the J. D. Maxwell Company, in the insurance business, and was chairman of the last Fourth of July committee.

The SAN FRANCISCO CALL. THURDDAY, NOVEMBER 1, 1900

市長が ふたりの新監督を任命

ヘンリー・J・スタッフォードとホーレス・ウイルソンが

理事会の空席を埋めるために選ばれました。

昨日、フェラン市長は、ホーレス・ウイルソンとヘンリー・J・スタッフォードを監督委員に任命したことを発表しました。スタッフォードとウイルソンは、任期中に死去した故ヘルムズ、デュボース両監督の後任に選ばれました。政治的にはスタッフォードは民主党、ウイルソンは共和党です。インタビューに答えた両氏とも、市政の父としての意向は語りませんでした。両者とも、その時々の状況に従うと述べました。

(中略)

ホーレス・ウイルソンはメイン州出身で、1868 年にカリフォルニアに来ました。メカニック・インスティテュートの図書館司書を 16 年間つとめ、今は同校の理事です。百の憲章委員会のメンバーでもあります。彼は陸軍の軍人であり、在郷軍人会のメンバーで、南北戦争では第 1 メイン騎兵隊と第 12 歩兵隊に従軍しました。現在は、保険業を営む J.D.マックスウェル社の秘書で、前回の 7 月 4 日委員会の委員長をつとめました。

「サンフランシスコ・コール」紙　1900 年 11 月 01 日　土曜日　より

白球のこだま

1876(明治09)年の野球交流



開成学校（今の東京大学の前身）

１８７２(明治05)年に**ホーレス・Ｅ・ウイルソン**が**第一番中学**にはじめて伝えたベースボールは、その数年後には他の学校にもひろまっていました。

もちろん、**開成学校**といわれるようになった**ウイルソン**の学校でも人気となっています。

とくに、学生たちが外国人を相手に試合をするときなどは、非常に多くの観衆があつまっていました。

後年、野球史研究者の**齋藤三郎**が、その頃のゲームにも出場した**石藤豊太**から直接に取材したところによると、

「夏の暑い日の外国人たちとの試合では、こちらがヒシャクで水をガブガブ飲んでいるのに、あちらはビンの飲み物をどんどんカラにする。贅沢で、けしからんとみてみると、それがラムネという飲み物であった」という意味の興味深い談話ものこっています。

今回は、野球のひろがりや外国人チームとの試合、今では忘れられている当時の選手たちのプロフィールなどを調べてみました。

ベースボールのひろがり

ウイルソンが、**第一番中学**で初めてベースボールを伝えた少し後のことです。

東京・芝にあった**開拓使仮学校**（今の**北海道大学**の前身校）でも若いアメリカ人教師**アルバート・G・ベイツ**が、学生たちにベースボールを教えはじめていました。

1873(明治06)年に 19歳で**開拓使仮学校**の教師となった**ベイツ**は、言葉の壁ものりこえ学生たちを熱心に指導しました。

そのため、**開拓使仮学校**では野球が短期間で非常に発達します。

しかし、二年後の 1875(明治08)年01月に**ベイツ**が急死したため、（原因は、寒い時期の入浴中に木炭ストーブを使用したことによる不慮の炭素中毒）それ以降の発展は望めませんでした。

なお、この学校は、1875(明治08)年07月に北海道へ移転し、**札幌農学校**となります。

そこでは、別のアメリカ人教師(**デイヴィッド・P・ペンハロー**など)が、ベースボールを教えました。

また、**開成学校**の近くにあった**東京英語学校**でも、みようみまねの野球が、はじまっています。

そこでは、「一撃生風」などと刻んだ手づくりのバットを振りまわし、鉛の芯が入ったボールを追いかけていました。

おかげで、手の指をひどく曲げてしまう者さえありました。

当時の野球風景

さて、1874(明治07)年頃には、ウイルソンがいた**開成学校**でも、野球はますます盛んになっていました。

アメリカ留学していた学生が、新しい用具を持ち帰ってきたからです。

当時のベースボールは、今のソフト・ボールよりもさらに窮屈なアンダーハンドからの投球を打ち、素手でボールを追いかけていました。

そのために、一点をめぐる緊迫した試合ではなく、数十点を取りあう打撃中心の楽しいゲームでした。

もちろん、ユニフォームもなく、はかまをたくしあげ、はだしで走りまわる者もいます。

また、雨の日も蓑笠をつけて練習するほど熱心な人もいました。

言うまでもなく、バットやボールなどは貴重品です。

留学生たちが、アメリカから持ち帰ってきたものを修理しながら大切につかっていました。

1876(明治09)年の日米野球

開成学校での野球は、1876(明治09)年頃に最盛期をむかえます。

近年になり、その当時の外国人たちとの試合についても少しずつわかってきました。

おそらく、学生たちには、日頃の練習で上達した技術の腕試し、外国人たちにとっては、レクリエーションとして試合がおこなわれるようになったのでしょう。

このような交流試合のうち、これまでに判明した最も古い記録は、1876(明治09)年の初夏に東京（おそらく**開成学校**の運動場）でおこなわれた試合です。

それは、「**極東の放浪者**」という横浜在住のアメリカ人からの手紙として、当時のアメリカで発行されていた新聞に掲載されました。

ゲームは、横浜から出てきた人たちの帰りの汽車の都合もあって、七回で終了しました。

しかも、八人しかあつまらなかった外国人チームが、34対11 で勝利をおさめています。

先攻の外国人チームからメンバーを紹介しましょう。

打順	（守備）	氏名	（年齢）	住所
一番	（二塁）	**エドワード・Ｈ・マジェット**	（24歳）	東京
二番	（遊撃）	**フランク・Ｍ・レーシー**	（29歳）	東京
三番	（左翼）	**ホーレス・Ｅ・ウイルソン**	（33歳）	東京
四番	（捕手）	**ヘンリー・Ｗ・デニソン**	（30歳）	横浜
五番	（一塁）	**Ｃ・Ｅ・チャーチル**	（不明）	横浜
六番	（三塁）	**オスマン・　Ｍ・レーシー**	（20歳）	東京
七番	（投手）	**サムエル・Ｄ・ヘップバーン**	（32歳）	横浜
八番	（右翼）	**デュラハム・Ｗ・スティーブンス**	（24歳）	東京

後攻の**開成学校**の学生チームは、

打順	（守備）	氏名	（満年齢	出身地）
一番	（一塁）	**石藤豊太**	（17歳	今の広島県）
二番	（左翼）	**野本彦一**	（18歳	今の広島県）
三番	（遊撃）	**青山元**	（18歳	今の福井県）
四番	（中堅）	**来原彦太郎**	（19歳	今の山口県）
五番	（右翼）	**田上省三**	（21歳	今の岡山県）
六番	（三塁）	**本山正久**	（18歳	今の東京都）
七番	（捕手）	**青木元五郎**	（21歳	今の栃木県）
八番	（投手）	**久米祐吉**	（21歳	今の岐阜県）
九番	（二塁）	**佐々木忠二郎**	（19歳	今の福井県）

となっています。

審判は、**ヴァン・ビューレン**（当時のアメリカ領事）でした。

この試合に横浜から参加した人たちは、のちに**ヨコハマ・ベースボール・クラブ**の委員をつとめた熱心な愛好者ばかりです。

けれども、その頃の日本では横浜のアメリカ人社会でも野球への関心が低く、彼らは練習さえままならないつらい数年間をすごしていました。

そういう彼らにとって、この日は心も躍る一日であったにちがいありません。

未熟な学生たちが相手とはいえ何日も前から楽しみにして、家族や友人たちと横浜から訪れたのかもしれません。

一方の学生たちは、年齢も技術も体格も数段上の外国人チームに圧倒されつつも、大勢の仲間の声援をうけて、全力で投げ、打ち、走り、そして、走りました。

その体験は彼らの人生の誇らしい日の出来事として、ながく記憶されたことでしょう。

参加した人たちのプロフィール

このゲームに参加した両チーム選手たちは、どのような人だったのでしょうか。

まず、外国人チームのメンバーは

一番　**エドワード・ハッチンソン・マジェット**（1858-1909）

カリフォルニア州オークランドの兵学校を卒業後、1871年に来日し、今の福井県で英学教師。1875年から東京英語学校の教師となります。以前は誤って、**ウイルソン**とともに初めて野球を伝えたといわれていました。1909年に横浜で亡くなっています。

二番　**フランク・M・レーシー**（1847-1926）

兄・フランク、弟・オスマンというレーシー兄弟。当時は、ふたりとも東京英語学校の教師をしていました。兄のフランクは帰国後にインディアナ州インディアナポリスで写真家となりました。

三番　**ホーレス・Ｅ・ウイルソン**（1843-1927）

日本に初めて野球を紹介した人です。

四番　**ヘンリー・ウイラード・デニソン**（1846-1914）

ヨコハマ・ベースボール・クラブの初代キャプテン。　来日前は、セミプロ野球の選手としても活躍。1869年からアメリカ領事裁判所の判事、副領事などを歴任。のちに日本の外務省で顧問となります。

五番　**Ｃ・Ｅ・チャーチル**（生没年は不明）

1879年から 1882年まで**ヨコハマ・ベースボール・クラブ**の会計係でした。1876年の人名録には、横浜にある会社の事務員と記載されています。

六番　**オスマン・Ｍ・レーシー**（1856-1891）

レーシー兄弟の 弟。日本で五年間にわたり英語教師をつとめて帰国。1883年からインディアナ州クローフォーズビルに移り住み、同地で「著名な書店員」と言われていました。1891年01月10 日に腸チフスマラリア熱のため亡くなりました。

七番　**サムエル・デビッド・ヘップバーン**（1844-1922）

ヨコハマ・ベースボール・クラブでは、委員や会長などを歴任。ヘボン式ローマ字で有名な宣教師**ヘボン**の息子。1865 年に来日し、一時期アメリカへ帰国しましたが、1875年に再来日しています。

八番　**デュラハム・ホワイト・スティーブンス**（1851-1908）

1876年の人名録にある同姓のふたりのうち、東京に住んでいたとわかっている**Ｄ・Ｗ・スティーブンス**が、この試合に出場した可能性が高いと考えられています。彼は、1873年から 1882年まで東京のアメリカ公使館に勤務。その後、駐米日本公使館の名誉参事官をつとめるなど、日本の外交にも貢献がありました。

次に**開成学校**の学生チームは、

一番　**石藤豊太**（1859-1945）

学生時代は、小柄ながら俊敏な左利きの野球選手として活躍。工学博士。
1887年から三年のフランス留学を経て、軍関係の火薬製造に従事。
その後、民間の火薬会社の設立にも参加し、指導的な立場から業界に貢献しました。

二番　**野本彦一**（1858-1882）

一番の**石藤**と同郷（今の広島県）で、南校ではフランス語学部に在籍。
1878年に「東京大学理學部教場助手補」、1882年には「東京大学図書課八等書記」でした。1882年07月に亡くなっています。

三番　**青山元**（1857-1918）

南校・東京英語学校、東京大学と学び、1880年に駒場農学校を卒業して農務省に出仕。その後、家督をつぎ貴族院議員もつとめました。
なお、元の英字新聞では「Hwogama」となっています。
当時、この学校に在籍した学生たちを調べると「Awoyama」というつづりがもっとも近い表記と思われます。「A」を「H」、「y」を「g」と誤ったのではないでしょうか。

四番　**来原彦太郎**（1857-1917）

のちの**木戸孝正**。1874（明治07）年07月にアメリカ留学から帰国し、**開成学校**へ入学。アメリカからボールなどを持ち帰り、野球の普及に貢献したことは、よく知られています。
なお、元の英字新聞では「Kusahorra」と書かれています。これを三番の選手と同じように調べると「Kurubara（**来原**）」または「Kasahara（**笠原**）**挌**」が近い綴りと考えられます。異論もあると思いますが、ここでは熱心に野球をやったとわかっている**来原**と推定しました。

五番　田上省三（1854-）

岡山兵学館や大阪開成所で学び、1871年に南校に入学。1887年から三年間のドイツ留学の後、司法省に出仕。長崎・名古屋の裁判所長なども歴任。晩年は、京都府で弁護士として活動しました。

六番　本山正久（1857-）

学生時代は最も優秀な運動選手との評判。東京大学法学部を卒業。のちに拓殖務省などを経て衆議院書記官をつとめます。また、父が旧幕府で柔術の教授であったので、柔道の創始者・**嘉納治五郎**とも親交がありました。

七番　青木元五郎（1854-1932）

学生時代は大柄で俊足の野球選手として活躍。1880年、東京大学を卒業。工学博士。神奈川県の土木課をはじめ、各地の土木監督所長などを歴任し、治水事業に貢献しました。

八番　久米祐吉（1854-1903）

最初期の選手のなかでも、もっとも熱心だった人のひとりです。1870年に高須藩（今の岐阜県海津市）の貢進生として、大学南校に入学。学生時代には、**久米**を探すなら運動場とも言われて、いつもキャッチボールをやっていました。のちに、**愛知県中学**（今の**旭丘高校**）の教諭などをつとめています。

九番　佐々木忠二郎（1857-1938）（忠二郎は『東京開成学校一覧』明治08年02月による）

学生時代は「投石に巧みなる人」でした。**東京大学**でエドワード・S・モースに動物学を学び、のちに理学博士。養蚕や害虫防除の基礎を築き人材の養成にも尽力しました。

以上が非公式ですが、記録に残るもっとも古い日米野球に参加した選手たちです。

初期の日本人選手

この試合の選手たち以外でも、**開成学校**での野球を経験した人は多く知られています。

福島廉平（1854-　今の福井県出身）
海軍の主船局・統計局をはじめ、呉や佐世保の鎮守府で造船部の技師などをつとめました。

高須碌郎（1856-　今の兵庫県出身）
学生時代は最も熱心に野球をやったひとり。のちに第三高等中学校や第一高等学校の教授をつとめています。

秋山源蔵（1858-　今の千葉県出身）
各地の地方裁判所所長や大審院判事などを歴任。のちに弁護士となり、ミラーの殺人事件を担当しました。

馬場信倫（1858-1940　今の三重県出身　旧姓：**中久木**）
日本の海洋気象学の泰斗として知られています。「**好球生**」の投書に「**信偏**」とあるのは誤り。

小藤文次郎（1856-1935　今の島根県出身）
理学博士。日本における地質学の創始者。地震や火山の研究で世界的な評価をうけています。

中澤岩太（1858-1943　今の福井県出身）
工学博士。**京都帝国大学名誉教授**。無機化学工業の指導者としても活躍しました。

平賀義美（1857-1943　今の福岡県出身）
有機化学と染色を研究して、化学工業の発展に貢献しました。工学博士。

千頭清臣（1856-1916　今の高知県出身）
東京日々新聞相談役。元貴族院議員。栃木・宮城・新潟・鹿児島の各県知事などもつとめています。

谷田部梅吉（1857-1903　今の秋田県出身）
東京物理学校の創立者のひとり。初代のフィリピン領事や京都商業学校の校長なども歴任しています。

五代龍作（1857-1938　今の大阪府出身）
旧姓は**九里**。工学博士。東京大学教授。のちに実業家・**五代友厚**の養嗣子となり、日本鉱業会理事会長もつとめました。

大久保利和（1859-1945　今の鹿児島県出身）
元貴族院議員。**大久保利通**の長男。**牧野伸顕**の実兄。日本鉄道の創立にもかかわりました。

牧野伸顕（1861-1949　今の鹿児島県出身）
元文部大臣。留学先のフィラデルフィアで野球を覚えて帰国します。
元首相・**吉田茂**の岳父です。

喜多村彌太郎（1858-　今の三重県出身）
地質調査所で化学分析に従事した後、ドイツへ留学。その後、**八幡製鉄所**の技師となります。

以上が、「**野球の來歴**」という古い新聞の投書に氏名をあげられている人たちです。

また、当時の**開成学校**では、**山岡義五郎**（のちに神戸区裁判所判事など）、**飯島魁**（理学博士。動物学者）・**高松豊吉**（工学博士。のちに東京ガス社長）・その他など、「**皆がベースボールを盛んにやった**」と言われるほどに、野球は人気となっていました。

のちに「明治」という時代を築いた老大家たちが、まだ若く無名であった頃、無邪気に白球とたわむれていたグラウンドは、時の流れのなか今では跡形もありません。

けれども、彼らが初めて「ベースボール」とであったときの歓声は、時空をこえ、こだまのように今もなお日本中で響きわたっています。

◎主な参考文献

『東京開成學校一覧』明治九年（東京開成學校/1876年）
『東京大學法理文三学部一覧』（東京大學/1882年）
『大日本博士録』全五巻（井関九郎/1921-1930年）
『石藤先生』（吉本誠一〔編輯〕/1935年）
『クラーク先生とその弟子達』（大島正健/1937年）
『日本人名大事典』（下中邦彦〔編集〕/1979年）
『日本外交史辞典』（日本外交史辞典編集委員会〔編〕/1979年）
『来日西洋人名事典』増補改訂普及版（竹内博〔編著〕/1995年）
『幕末明治在日外国人・機関名鑑』全46巻・別巻2（立脇和夫〔監修〕/1996年）
『明治維新と日米野球史』（島田明/2001年）

＊「ニューヨーク・クリッパー」紙（野球体育博物館〔所蔵〕/1876年12月23日付）
＊「明治９年の日米野球」①～⑧（「ベースボールニュース」Vol.1 No.4～Vol.3 No.4 / 野球体育博物館〔発行〕）
＊「日米野球史に〝隠し球〟」（フィッリプ・ブロック/「日本経済新聞」2000年06月02日付　朝刊40面）

今回は 1876(明治09)年の野球交流 について少し調べてみました

不知道将来你能否做到　忘掉失去的　珍惜拥有的
将来 そなたは過去を忘れ 今を大切にできるかな？

中国TV ドラマ「宮廷女官 若曦」（2011年）第18話より

【参考資料 01】

THE GAME AMONG THE ORIENTALS.

One of THE CLIPPER'S friends who is now sojourning in Japan advises us in the subjoined letter of the doings of baseball devotees in the Mikado's domains:

YOKOHAMA JAPAN, Nov. 14, 1876.

EDITOR CLIPPER.—Dear Sir: Thinking that a short account of the progress of baseball in Japan might interest your readers, I send you the scores of a few games played here this autumn. For some years we have been trying to get up a baseball club, but without success, and it was not until just before the arrival at the United State flagship Tennessee that we were able to excite any interest in the game. However, I am happy to state that, after beating the navy, ball-fever seized on the largest part of the American community, and now we have in Yokohama a club with over forty members, and in Tokio, the capital, they have one with over thirty. Of course the largest part of us, when in command, had not had any practice for a few years; but, although the scores of the matches which I send are all large. I think that we could pick a nine out of the two clubs that would play a good game for amateurs. The first game was played early in the Summer, before either of the clubs was termed , against the Japanese students of the Imperial College at Tokio , and was the poorest of the screens, as we were unable to get together a nine of men who were able to play. The Japanese take a great deal of interest in the game, and, as they are very quick and generally good throwers, they will make fair players with some instruction. Below is the score, the game being called at the end of the seventh inning, to allow some of the visitors to catch the train for Yokohama.

FOREIGNERS .		R .	O .	JAPANRSE		R .	O .
Mudgett,	2d b····	5	3	Ishido ,	1st b····	2	2
F. Lacev.	s. s·····4		2	Nomoto .	l.f ·····	2	3
Wilson,	l. f ·····2		5	Hwogama .	s.s ·····	2	2
Denison,	C ·····7		1	Kusahorra,	c.f.·····	1	4
Churchill,	1st b··· 6		1	Tarukami ,	r.f.·····	1	2
O. Lacey,	3d b···	4	2	Motsyama ,	3d b····	2	2
Hepburn,	P····· 3		4	Awokie,	C·····	1	2
Stevens,	r..f.···· 3		3	Kumi,	P·····	0	1
—				Sasaki ,	2d b····	0	3
Totals		34	21	Totals		11	21

Foreigners 5 1 0 2 7 12 7—34

Japanese 0 1 6 0 0 1 3—11

Umpire , Mr. Van Buren.

AN EXILE IN THE FAR EAST.

The New York Clipper, 23 December 1876.

東洋での試合

現在日本に滞在しているクリッパー紙の友人のひとりがミカドの領地での野球愛好家の活動について、以下の手紙でアドバイスをくれました：

1876（明治 09）年 11 月 14 日、横浜 日本

クリッパー編集者さま—拝啓：日本における野球の進歩について簡単に説明すれば、読者の興味を引くのではないかと思い、この秋に日本で行われたいくつかの試合のスコアをお送りします。何年もの間、私たちは野球のクラブを立ち上げようとしてきましたが成功せず、アメリカ合衆国の旗艦テネシーの到着する直前まで、このゲームに興味を沸かせることはできませんでした。しかし、海軍を打ち負かした後、アメリカ人のコミュニティの大部分で野球フィーバーが広まり、今では横浜に 40 人以上の会員がいるクラブができ、首都の東京にも 30 人以上のクラブができました。もちろん、私たちの大部分は、指揮をとるようになってから数年間は練習をしたことがありませんでした。けれども、私が送った試合のスコアはどれも大きなものでしたが、ふたつのクラブのうち、アマチュアとしてよい試合をするふたつのクラブから 9 人を選ぶことができると思います。最初の試合は、どちらのクラブも発足する前の夏の初めに、東京にある帝国大学の日本人学生たちを相手におこなわれました。私たちはプレーできる 9 人が集まらなかったため、この試合は最もお粗末なものとなりました。日本人はこのゲームに非常に興味を持っており、非常にすばしっこく、一般的に投げるのがうまいので、多少の指導を受ければそれなりの選手になるでしょう。試合は、横浜行きの列車に乗るビジターがいたため、7 回終了時に中止となり、以下のようなスコアとなりました。

外国人		得点	ｱｳﾄ.	日本人		得点	ｱｳﾄ.
マジェット	二塁···	5	3	石藤	一塁···	2	2
F. レーシー	遊撃···	4	2	野本	左翼···	2	3
ウィルソン	左翼···	2	5	ホウォガマ	遊撃···	2	2
デニソン	捕手···	7	1	クサホラ	中堅···	1	4
チャーチル	一塁···	6	1	田上	右翼···	1	2
O. レーシー	三塁···	4	2	本山	三塁···	2	2
ヘップバーン	投手···	3	4	青木	捕手···	1	2
スティーブンス	右翼···	3	3	久米	投手···	0	1
—				佐々木	二塁···	0	3
合計		34	21	合計		11	21

外国人 5 1 0 2 7 12 7—34

日本人 0 1 6 0 0 1 3—11

審判は、ヴァン・ビューレン氏。

極東の放浪者

「ニューヨーククリッパー」紙 1876（明治 09）年 12 月 23 日より

【参考資料 02】

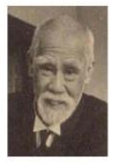
摂政宮賜杯十年

—東京大學野球聯盟祝賀會—

スカイ・ボール野球

長老二人が登場





牧野伸顯伯と佐々木博士

日本最古の名選手

東京大學野球聯盟では既報の通り摂政宮賜杯拝受十周年を記念して來る廿三日上野精養軒に盛大な祝賀會を開催するので、明治二十年頃から十數年續いた一高黄金時代 次いで早慶戰華やかなりし頃等我が國野球史を飾る古き名選手を各學校野球部の手で捜し求めて當日の參列を希望してゐるが、こゝに明治八、九年、日本で最も古くベースボールをやつたといふ長老が二人登場、この二人こそ日本の野球の生みの親として祝賀準備の關係者を頗る喜ばせてゐる、その一人は元内府牧野伸顯伯（七六）であり、他の一人は東京帝大名譽教授東京昆蟲學會々長理學博士佐々木忠次郎氏（八〇）である、共に相前後して東京帝大の前身開成學校に學んだ時、當時の先生であるアメリカ人にすゝめられてベースボールの革の球を握つた人々である【寫眞は（上）牧野伯と（下）佐々木博士】

維新の元勳大久保利通侯の二男に生まれた牧野伸顯伯がベースボールの育ての親といふのも頗る愉快な話で、十一日澁谷神山の自邸で病氣も恢復した伯は次のやうに球界草創時代を語つた

自分は十一歳の時、明治四年に岩倉公が遣米使節で行かれる時 一緒について渡米した、當時は 外國の空氣を吸はなければ一人前になれなかつた時代でフイラデルフイヤの中學に四年ゐた、寄宿舍にゐたのでベースボールといふものもそこで始めて覚えたわけだ、アメリカには既にその頃職業野球もあつたと記憶する、そして日本に歸つたのが明治七年で開成學校に籍を置くことになつた、今の學士會館のあるところより錦町寄りに四千坪の地所を持ち運動場が千坪もあつた、その運動場にある運動具といふのがブランコだけだつたのだから實にがらんとしたものだ

そこで ベースボールをやらうと言ひ出したのが、數學の教師だつたウイルソン先生だつた、その頃開成學校の先生といへば漢文だけ日本人で、あとは殆ど外國人だつた、地理でも化學でも皆英語で習つたものだ、さてウイルソンの言い出しで ベースボールをやらうといつても道具がない、グローブやミットはもちろん、革の球さへなかつたのを、ウイルソン先生が何かを一つ ほかの人が球を一つ、アメリカから歸つた人がバットを持つてゐて それをかき集めてやつたわけである、自分はたゞアメリカの中學にゐたといふので引出されただけで、今生きてゐるのでは佐々木さんや中澤さん—京大名譽教授 工學博士 中澤岩太博士（七九）—が一緒にやつたと覚えてゐる 自分は本當に

子供 だつたのでファースト・ベースかセカンド・ベースをやつてゐた、もちろん素手でやつたのだし、ルールなども大ざつぱなもので、今の野球とはまるで別物のやうだらう、非常に下手だつたことを自白するが、それでもいつかアメリカ大使に會つた時、その頃の話をしたら大變喜んでゐた

◇・・・◇

佐々木博士は當年八十歳、體のどこにも故障がないといふ元氣さだ 開成學校で始めてモースといふ先生に講義を聞き、日本で始めて動物學の道を開いた権威者であり、そしてベースボールの恩人、青山南町の家で眞白い鬚の間に愉快な笑ひを浮べて野球昔話をした

牧野さんはひよろくとしてゐたし、中澤さんも余りやらなかつた、わしは明治八年、九年と二年ばかり相當にやつて、以後専門の道に進んださう、ウイルソンといふ數學の教師がやりだしたと思ふが、あの先生をやつつけた時は愉快だつたねえ、わしはピツチヤーとかキヤツチヤーとかいふ面倒臭いことは大嫌ひで、フアーストかセカンドを守つてゐた、先生がベースを逃出したので、球を持つて追かけて到頭突倒してアウトさ、面白かつたねえ、しまひには横濱の西洋人もやつてきて試合をやつたこともあつたが、もちろん面（マスク）も手袋（グローブ）もないし、うつかりすると指が逆にそつて痛かつたものさ・・・・・さうだ、球を打つ秘訣といふのがあつた

球は地上二尺位の所をすつ飛んで行くと中々捕へられないのだ、スカイ・ボール（高いフライ）は、君、いかんよ どうぢや、よく知つてゐるだらう、棒は今でもバツトといふだらう、球は三べん振つてもいゝのだらう、ルールは今も變つとらんと思ふから、わしはその後少しも見物せずとも、よく判つてゐる、若いのがやりをるわい、と六十年の昔を偲んでゐるわけである

「東京朝日新聞」１９３６（昭和11）年10月12日（十一）より

平岡凞がまいた種

明治10年代の社会人野球



Japan's first baseball team, Shimbashi Athletic Club. taken at Futami Photo Studio in Ginza, 1880. (Hiroshi Hiraoka, the organizer of the club, is in the center and he begs to say: “Happy to see you.”)

１８７６(明治09)年06月、ひとりの若い鉄道技師が、およそ五年間のアメリカ留学から帰国しました。

初期の日本野球にとって最大の功労者・**平岡凞**です。

平岡は、留学中におぼえたベースボールを持ち帰り、日本人を主体とする初めてのクラブチーム「**新橋アスレチッククラブ**」(以下は、**新橋倶楽部**と略記）をつくるなど、野球の普及に力をつくします。

また、あまり知られてはいませんが、彼はアメリカで遊んだギターやローラースケートも日本に伝えた先駆者です。

さらに、のちには実業家となり、民間として国内初の本格的な鉄道車両工場をつくり、晩年には伝統音楽にも新しい流派をおこします。

今回は、若き日の夢多き平岡凞を中心に、新橋倶楽部の様子や当時のメンバーなどについて調べてみました。

１４歳の留学生

平岡凞は、１８５６(安政03)年09月17日(旧暦の 08月19日)、徳川幕府の重臣の家に生まれました。

父の凞一は、明治政府への政権交代の事務責任者。新政府でも要職をつとめています。また、両親とも歌や踊り、楽器の演奏などにしたしみ芸能関係者とも交際がありました。

アメリカに留学する前の平岡は、12歳頃から「三叉学舎」(箕作秋坪が今の東京都中央区日本橋蛎殻町に開設した私塾)で英語を学んでいます。

当時の平岡少年は、横浜の外国人居留地をたびたび訪れて、西洋へのあこがれを胸にきざんでいました。

１８７１(明治04)年06月、平岡は私費留学生として 14歳でアメリカにむかいます。

貨客船「アメリカ号」で太平洋をわたり、サンフランシスコで初めて目にした汽車に感激し、鉄道技師を志望したと伝えられています。

その後、ボストンの学校で学んでいた最初の三年間は、何度か転居しながらいっしょに留学した仲間たち(清水篤守・森明善・堀田顕など)と行動をともにしていたようです。

その頃の平岡は、アメリカ人の生徒たちとも友好を深め、熱心に勉強していました。

また、当時のボストンでは、全米でも最強のプロ野球チーム「ボストンレッドストッキングス」が人気をあつめていました。

スター選手のアルバート・G・スポルディング投手などの活躍に彼も地元の人たちとともに一喜一憂していたに違いありません。

平岡少年が初めて接したベースボールは、当時の世界で最高レベルのものでした。

なお、スポルディングは、のちに運動用品の会社をつくり、スポーツ全般にわたって用具の製造・販売をてがけたことでも知られています。

後年、平岡が、スポルディングあてに書いた手紙によると、留学中の平岡は「**アメリカ各地を訪れて、新しい生活を大いに楽しんだ**」とあり、「**ベースボールは、大学生や会社員たちと一緒にプレーした**」とあります。

また、真相は定かでありませんが、アメリカでも「或るチームの右翼として名高かった」とか「しばしば紐育金剛石運動場」での野球の試合に出場したと伝える資料ものこっています。

クラーク博士と同じ船で帰国


20 歳頃の平岡熙

平岡が、フィラデルフィアなどで鉄道技術を習得したのち、約五年間の留学生活をおえたのは二十歳の年です。

１８７６(明治09)年 06月 01 日、貨客船「グレート・リパブリック号」でサンフランシスコを出港した平岡は、途中の激しい風雨のため通常よりも大幅に遅れましたが、06 月 29日に横浜へ無事に到着します。

乗客のなかには、日本へむかうクラーク博士(札幌農学校の初代教頭)も乗りあわせていました。

博士の同行者によると、船旅のあいだには輪投げやクリケットに似たゲーム(ウイケット)などを楽しんでいました。

また、平岡自身も「長い航海の退屈凌ぎに乗客を集めて甲板で(野球の)練習を始めた」と語っています。

平岡や夏休みを利用して一時帰国する吉川重吉(のちの貴族院議員)も、このような遊びに喜んで参加していたことでしょう。

１８７６(明治09)年の日本野球界

帰国した平岡は、しばらくの間、神田三崎町にあった練兵場などで、弟の寅之助や郷 温(郷誠之助の義兄)などの仲間をあつめてベースボールを楽しんでいたようです。

その頃、ホーレス・Ｅ・ウイルソンのいた開成学校では、学生たちが外国人たちとゲームをおこなうまでになっていました。

また、札幌農学校や東京英語学校、熊本洋学校など日本の各地で野球がひろがりはじめています。

さらに、この１８７６(明治09)年の秋には、横浜に住んでいた 35人の外国人が「ヨコハマ・ベースボール・クラブ」という日本で最初の正式な野球のクラブチームを設立します。

横浜で初めて試合がおこなわれた１８７１(明治04)年の五年後でした。

平岡の手紙が伝える新橋倶楽部

平岡は、帰国した翌年の１８７７(明治10)年に新橋鉄道局へつとめるようになります。

この年は、02月に「西南戦争」がおこり、鉄道が初めて本格的な軍事目的の輸送につかわれるなど社会が混乱していた時期でした。

近年、当時の平岡が直面していた困難な野球状況を示す重要な資料がみつかりました。

それは、前述のスポルディングあての平岡の手紙を紹介したアメリカの古い新聞記事です。(「シカゴトリビューン」紙 1888年07月15日付)

それによると、新橋倶楽部をつくる前の平岡は、アメリカから忘れずに持ち帰った数個のボールと大工に頼んでつくらせたできるだけ原形に近いバットをつかい、仕事のあいまに若者たちへ野球を教えていました。

若者たちは、初めのうちこそ楽しそうでしたが、ケガや練習のつらさなどから遠ざかる人が次第に多くなります。

けれども、平岡はメンバーがどんなに少なくなっても野球を続けました。さいわいにも、彼が教える前からベースボールを経験していた人たちがのこってくれたのです。

それが、この手紙をしたためる三年前までの状況でした。

その後、若者たちのあいだで急にスポーツへの関心が高まり、野球が一番の人気となります。

平岡は、それを素直に喜び、そして「**東京アスレチッククラブという名の球団をつくりました**」。

この球団が、新橋倶楽部のことで、実力は横浜のアメリカ軍チームと互角に試合ができるほどではなかったようです。

手紙は、「**その年のメンバーの写真を同封します**」(冒頭の写真)と続き、最後に注文した野球用具についての要望が書かれています。

新橋倶楽部について、これまでは、平岡が１８７８(明治11)年頃から鉄道関係者をあつめ、楽々とつくられたようにいわれてきました。

しかし、この記事によると、仲間のケガや練習のつらさからメンバーの確保さえ困難な時期があったこと。

そのため、新橋倶楽部がチームとして活動をはじめるまでにかなりの年月を必要としたことなど、これまで知られていなかった多くの事実があきらかになりました。

その意味でも、この平岡の手紙は日本野球の初期の実状を語る貴重なものです。けれども、記事には手紙の日付までは明記されていません。

この記事の手紙は、いつ頃に書かれたのでしょうか？

記事によると、手紙を書いた当時の平岡は、「assistant locomotive superintendent（**汽車監察方助役**）」の職についているとあります。

彼が、汽車課の課長となったのは、１８８３(明治16)年07月でした。

また、その年の 06月に日本で出版された様々なスポーツを紹介した本でも「ベースボール」が一番くわしく解説されています。

どうやら、この手紙は、１８８３(明治16)年 06月以前に書かれていたようです。

このことから、新橋倶楽部がユニフォームや専用グラウンドを整備し、チームとして充実した活動をはじめた時期は、１８８３(明治16)年頃ということがうかがえます。

そこには、平岡凞のアメリカでの野球体験と本格的なクラブチームをめざす強い気持ちがありました。

クラブチームのひろがり



15 歳頃の徳川達孝

平岡凞が関係したクラブチームは、新橋倶楽部だけではありません。

徳川達孝（1865-1941 田安徳川家の第09代当主）を中心とする「**ヘラクレス倶楽部**」もそのひとつです。

このチームは、達孝の英語教師だった平岡にすすめられ、１８８０(明治13)年に当時15歳の達孝がつくったといわれています。

達孝は、桐の木のバットや三田綱町の邸内につくったグラウンドでの新橋倶楽部との試合などのエピソードをのこしています。

また、多くの学校でスポーツへの関心が高まるにつれて、学生たちもきそって平岡からの指導をうけるようになっていきました。

彼らは、やがて母校でも組織的な活動をおこなうようになり、それが各学校のベースボールの発展（学生野球）へとつながっていくのです。

その頃のメンバー

新橋倶楽部の活動は、１８８３(明治16)年頃からの五年ほどが最盛期です。この期間には、投手のオーバースローも認められるなどルールが大きく変わった時期でもありました。

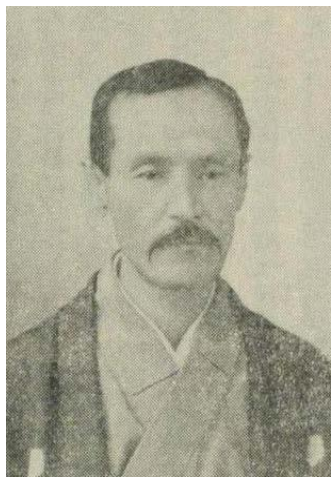
その頃の平岡は、週末ごとにグラウンドの手入れをし、毎年のようにアメリカのルールブックを取り寄せるなどして、最新のベースボールを若者たちへ指導していました。

これにより、競技としての野球が日本でもようやく普及の道をたどりはじめたのです。

ここで、これまでに判明した新橋倶楽部のメンバーや平岡から指導をうけた人たちの略歴などについて紹介しておきましょう。



Ｒｏｂｅｒｔ　Ｊｏｈｎ　Ｗａｒｄ
ロバート・Ｊ・ウォード(–)　イギリス人の機関士。１８６９年に来日。平岡にベースボールを学んだ最初期からのメンバーで投手・コーチ役。晩年になっても横浜で野球の試合を観て楽しむ姿がよくみかけられていました。



天沼　熊作 (1849-1916)　東京出身の鉄道技師・実業家。六代目十寸見蘭洲。新橋倶楽部のメンバー。　後年、当時の野球の思い出を談話としてのこしています。また、機関車についての著書もあり、その本の序文は平岡が書いています。



飯田 義一 (1851-1924)　山口出身の実業家。１８７４年から１８８４年まで鉄道局につとめ、初期の新橋倶楽部のメンバーとしても活動していたようです。その後、実業界に入り、多くの会社で重役を歴任しました。



市川 延次郎（1864-1905） 東京・千住の出身。
1889(明治22)年、東京帝国大学理科大学植物学科を卒業。
日本の変形菌学の先駆者。平岡からの指導をうけた初期の名選手といわれ、暴漢を野球の技術で撃退した逸話が有名。



一條 牧夫（1858-1938） 岩手出身。１８７７(明治10)年に駒場農学校へ入学。 平岡の教えをうけたとされ、岩手県へ野球を伝えた人ともいわれていました。 馬をはじめとする家畜の改良や牧場の整備にも功績をのこしています。



野澤 房敬(1864-1934) 静岡出身。 平岡から教えをうけた初期の学生のひとり。１８８８年に東京大学の土木科を卒業。のちにイギリスへ留学して、鉄道トンネルについての翻訳をのこすなど土木技術界のすぐれた指導者でした。



平岡 寅之助（1868-1934） 東京出身。平岡凞の実弟。野球とのかかわりは兄の凞より長く、のちに第01回の全国中等学校優勝野球大会（今の夏の甲子園大会の前身）でも副審判委員長をつとめています。



村尾 次郎（1872-1921） 東京出身。平岡から教えをうけた最初期の学生。慶応野球部創設の中心メンバー。
１９１１(明治44)年、慶応野球部の第01回アメリカ遠征のとき総監督をつとめました。



山田 文太郎(1861-1932) 福井出身。 1886(明治19)年、東京大学を卒業。工学博士。のちに神岡鉱山事務所長。平岡からの指導をうけた学生。打撃にすぐれホームランのことを初期の用語で「文太球」というようになった語源の人です。

さらに、文学者の正岡子規や鉄道局の赤穴敏介・三岡丈夫、学生の生田益雄など、その他にも多くの人が平岡の指導をうけていました。

新橋倶楽部の解散・その後の平岡凞

１８９０(明治23)年、平岡凞は日本野球の発展を次の世代にたくし、新橋倶楽部の活動に終止符をうちます。彼が34歳の年でした。

平岡は、その数年前から次の事業への準備にとりかかっていました。そして、将来の地位が約束された鉄道局をはなれ、１８９０(明治23)年06月に彼自身が経営する鉄道車両工場を開業します。

場所は、今の東京ドーム球場の近くです。



錦糸町の平岡工場　1900年頃

数年後には現在の錦糸町駅付近へ移って、さらに大規模な工場に成長しました。

その後、不本意な会社の合併も経験しましたが、彼は、そこでも人望を集めて、副社長として会社の発展に貢献しています。

しかし、のちに社長となるよう強く要請されたときには、それを固く辞退しています。



40歳代の平岡凞

平岡は、様々な文化活動にも積極的でした。

鉄道関係の団体の評議員、競技スポーツの発展をめざす雑誌の特別協賛会員などもつとめています。

晩年には「江児庵吟舟」と号し、静かな生活のなか日本の伝統音楽に新しい流派(東明流)を確立します。

平岡は、彼が望めば野球界の権威者として、永く影響力を保つこともできました。それは、鉄道局や経済界でも同じです。

けれども、彼は、そうはしませんでした。

その姿は、まるで常に新天地を探し続ける開拓者のようです。


晩年の平岡凞

未開の荒野をきりひらき、種をまき、大切に育てあげ、ようやくむかえる実りの時期に、そのすべてを後継者にゆずり、新たな土地へたちむかう。

それが、独自の美学をつらぬいた彼の生き方でした。

１９３４(昭和09)年 05月 09日、平岡凞は狭心症のため、79歳で突然この世をさります。

幕末から明治初期の頃、数百人の留学生が欧米をめざしています。

彼らの多くは、国家の利益や自分の立身出世のために科学や技術を学んでいました。

そんな時代に海を渡った若き日の平岡凞は、人生の新しい楽しみの種を持ち帰ってきます。

それは、彼が想いをこめ「**忘れずに**」と手紙に書いた数個のボールのことでした。

◎主な参考文献

『当代の傑物』工業界の快男児 平岡凞　　佐瀬得三 / 1906(明治39)年09月20 日

『野球年鑑 大正七年度』慶応野球部史(覇権を握る迄)村尾次郎氏談 / 1918(大正07)年05月25日

『日本野球戦史』横井春野 / 1932(昭和07)年10月20 日

『平岡吟舟翁と東明曲』高橋義雄 / 1934(昭和09)年10月20 日

『駒場農学校等史料』安藤圓秀 / 1966(昭和41)年05月31日

『お雇い外国人』④交通　山田直匡 / 1968(昭和43)年08月10 日

『クラークの一年－札幌農学校初代教頭の日本体験』太田雄三 / 1979(昭和54)年08月30日

「第一高等学校野球部史」校友会野球部 編輯

「運動界」第 03 巻第 02 号 1899(明治32) 年 02 月 05 日

「初めて表はれたる野球チーム　創始者ウォード氏の談」

「月刊ベースボール」第02巻 第01号　1909(明治42)年01月10 日

「BOSTON PUBLIC LIBRARY所蔵の日本人名簿 (1871-1876)」北垣宗治

「英学史研究」1998(平成10) 年　第31号 p. 111-132

「海外新報」学業の上達ぶりをアメリカ紙が紹介

「東京日日新聞」1873(明治06)年 09 月 18 日

「JAPAN HAS A BALL CLUB」

「Chicago Tribune」紙1888(明治22)年07月15日 p.14 (大阪大谷大学図書館所蔵)

今回は **平岡凞と新橋倶楽部** について少し調べてみました

『凞と云う男は当世の人間には珍しく出来て、あれが本当の江戸っ子で、
其淡泊として腹の大きいところなんていものは、丸で助六(ママ)が洋行した奴さ』

『当代の傑物』工業界の快男児 平岡凞　　佐瀬得三 / 1906(明治39)年09月20 日　63頁より

【参考資料 01】

JAPAN HAS A BALL CLUB.

THE AMERICAN GAME FINDS ITS WAY TO THAT COUNTRY.

Introduced by a Native Who Had Been Educated in America It at First Became Popular, but Declined After One or Two Players Had been Hurt — Revival of Interest in the Sport — Supplies Ordered from Chicago.

That the National game, base-ball, is having an extraordinary growth is prover by the number of clubs that are springing up all over the world. Australia and England are taking great interest in the American game, and now comes Japan, as will be shown by the following letter and the accompanying picture of the first Japanese ball club ever formed. H. Hiraaka, a young Japanese who was educated in this country, writes; "It was in, the summer of 1870 when I went to America. I resided three years at Boston, eighteen months at Philadelphia, and three years at Manchester, N.H., and during my stay in America I visited nearly all parts of the United States and enjoyed my new life well. My chief object was to learn American locomotive engineering and for which I am now holding a position as assistant locomotive superintendent in Tokio for the Government railways. I also learned all sports and athletics. Base-ball I played with the college students and workmen in the shops. At that time the Boston nine was the champions of the country, and Spalding the pitcher and White the catcher — excuse me for naming Spalding if it has any connection with your family, as I am only putting it down here as mere reference. Naturally enough when I finished my business in America I returned home, never forgetting to take with me a few balls. I had some bats made as nearly the shape as our carpenters could make and started to train our young people at the leisure hours of my duty. At first they all seemed to take a delight in the game, but gradually they dropped off because one fellow got his finger hurt, or another got his nails off, and some would say too hard running, and so on. I kept on, however small the number of members was. Fortunately previous to my starting the game some of the professors who came over to our country from America for our university had also started the game with students; and, although they had in the same manner got tired of the play, there were a few remaining. I went on until three years ago, when suddenly our young people had attained the notion of trying to play all kinds of out-door exercises, such as boat-racing, foot-ball, and I'm glad to say, more of base-ball playing, and for the first time I have organized a club named Tokio Athletic Club. The members were not strong enough even to attack American men-of-war at Yokohama because at that time some of the team in the men-of-war pretty good players. I enclose photo which will show you the members of that year. Among them you will see one European. He is an Englishman of the railway staff, who learned the game. The organizer of the club, or the writer of this letter, is in the center— one who has the cap on—and he begs to say: "Happy to see you." The members represented in the photograph are mostly railway people, but there are a great many students and private people whom I have learned the game.

"I have used up what balls I brought from America, and have had to make our own balls, which of course were not satisfactory. As regards bats we have no wood at present to meet the purpose — at least I have not yet been able to find any. I ordered some of you last year, but the bats are a little heavy for our Japanese muscles; otherwise they suit well. I think if the balls were made a trifle smaller in diameter, would meet Japanese hands better."

Mr. Spalding has complied with the wish of the Jap by making up a special order as requested, and sent the package with the compliments of the firm.

Image 14 of The Chicago Tribune (Chicago, Illinois), July 15, 1888

日本には野球クラブがある

アメリカのゲームが その国への道を開く

アメリカでの教育をうけた現地の人が紹介したのがきっかけで
はじめは人気でしたが、ひとり ふたりと選手がケガをして衰退
ーその後スポーツへの関心が復活ーシカゴから物資を取り寄せる

国民的ゲームであるベースボールが驚異的な成長を遂げていることは、世界中に誕生しているクラブ数からも証明されています。
オーストラリアとイギリスがアメリカのゲームに大きな関心を寄せているなかで、今度は日本です。それは、次に紹介する手紙と添付された日本初の野球クラブの写真でわかるでしょう。
この国で教育を受けた若い日本人・平岡凞は次のように書いています：「私がアメリカに行ったのは 1870 年の夏（実際は 1871 年 06 月）でした。私はボストンに 03 年、フィラデルフィアに 18 ヶ月、ニューハンプシャー州マンチェスターに 03 年間住んでいました。アメリカ滞在中の私は合衆国のほぼ全域を訪れ、新しい生活を大いに楽しみました。 私の主な目的は、アメリカの機関車工学を学ぶことでした。そのため、現在の私は、政府の鉄道局で東京の機関車監督補佐（汽車監察方助役）の職についています。
また、すべてのスポーツと陸上競技も学びました。ベースボールは大学生や会社員たちと一緒にプレーしました。
当時、ボストンナインはこの国のチャンピオンであり、スポルディングが投手、ホワイトが捕手でした。— 失礼ながら、もしスポルディングという名前があなたの家族にさしさわりがあるなら、お許しください。ここでは単に参考として書いただけです。
アメリカでの仕事をおえたとき、私は当然のように、いくつかのボールを持っていくのを忘れずに帰国しました。私たちの大工にできるだけ原形に近いバットをいくつかつくってもらい、私の仕事のあき時間に若者たちを訓練しはじめました。最初はみんな楽しそうにゲームをしていたのですが、ひとりが指を痛めたり、別のもうひとりが爪をはがしたり、ランニングがつらいと言う人もいて、だんだんとやめていきました。私は、メンバーがどんなに少なくなっても続けました。さいわいにも、私がこのゲームを始める前に私たちの大学のためにアメリカから来日した教授たちの何人かも学生たちとこのゲームを始めていました。そして、彼らも同じようにこのゲームに飽きていたのですが、まだ数人がのこっていました。
私は 03 年前までも続けていましたが、突然、若者たちは、ボートレースやフットボール、そして、嬉しいことにもっと多くの人がベースボールなど、あらゆる種類の屋外での運動をやってみる気になりました。そして、私は初めて東京アスレチッククラブ(Tokio Athletic Club)という名のクラブをつくりました。メンバーは横浜のアメリカ軍チームを攻撃するほど強くありませんでした。なぜなら、当時の軍人チームのなかにはかなり優秀な選手がいたからです。
その年のメンバーを紹介する写真を同封します。
そのなかに、ひとりヨーロッパ人がいるのがわかるでしょう。彼は、このゲームを学んだ鉄道スタッフのイギリス人です。
クラブの主催者、つまり、この手紙の筆者は中央にいて— 帽子をかぶっている人で — 彼は「お会いできてうれしいです」と言っています。
写真に写っているのは、鉄道関係者が中心ですが、学生や一般の人も多く、私がゲームを教えてもらったこともあります。

「私はアメリカからもってきたボールをつかいきり、自分たちでボールをつくらなければなりませんでした。しかし、もちろん満足のいくものではありませんでした。 バットについては今のところ目的にあった木材がなく、少なくとも私にはまだ見つけることができません。昨年、御社に注文したバットは私たち日本人には少し重いですが、それ以外はよくあっています。 ボールは直径をもう少し小さくすれば、日本人の手にもっとよくなじむと思うのですが。」

スポルディング氏は、日本人の要望にこたえて要求された特別注文品をつくり、会社の賛辞をそえて荷物を送りました。

「シカゴトリビューン」紙（イリノイ州シカゴ） 1888 年 07 月 15 日 p.14

※疑問のある部分：渡米時期(1870 年)や在米期間(ﾏﾝﾁｪｽﾀｰに 03 年)、
添付写真の説明（帽子をかぶっている人）などは色文字にしました

【参考資料02】

日本野球の元祖



１８８０（明治13）年　銀座二丁目十番地　二見謹写

平岡凞氏ボールを持歸る
日本で最初のグラウンド
怖ろしや素面素手の試合

今日旺盛の域に達して居る日本野球の元祖は誰あらう平岡凞氏其人で今を去る三十三年前氏が米國から齎し歸つた球こそは實に我野球界に蒔かれた第一の種子である　從つて日本野球史の第一頁を飾るべきものは此初種の蒔人なる平岡氏の昔話でなければならぬ、麹町區永田町は山王臺の下、閑靜な廣い座敷の椽近く寛濶な態度を卓子に靠せた氏は折柄差迫つた　用を控へながら「大分古い事だから今急に　順序を追つて詳しく話すことは何うかね」と微笑しつつ最と興ありげに語り出づる、話す人に深い趣味の有る丈けに聞く身も膝の進むを　覚えなかつた

△愉快の自負心　今横濱の四番に居るウヲード(R・J・WARD)氏は英國人であるからクリケットやフツトボールは知つて居るが野球は全くでも野球と云ふ事が解つて來て局内にも何うやら野球熱が傳染して來た　ソコで一人三十銭位　づく持出して時の局長（井上勝）にも若干の寄附を願ひ　今の芝浦製作所のある處にグラウンドもスタンドも出來た、これが日本で野球グラウンドの皮切りである　チームは後に新橋倶楽部と稱へて一時盛名隆々たるものであつた　此時分に慶應の村尾君兄弟（兄・岡田英太郎　弟・村尾次郎）も加入して居られ　又大久保公の令息（大久保利武）が加はつた事もある　彼のウヲード氏も自分が手を取つて教へたと云つて好い、新橋にグラウンドが出來た時分に來た人は大概忘れて仕舞つたが築地から米國人が二人、工部大學から二三人、夫れから農科大學からも來て居た彼是する内　ユニフォームも出來外から試合を申込むものさへある程になつた　それは明治十一年頃と記憶する

△用具一式で三百圓　私が米國に居た時ボストンチームの投手をして居た今有名のスポーヂング會社のスポーヂング（Albert Goodwill Spalding）氏とマンチエスターで會見した事があるが其時代には投手のピツチングの範圍が頗る狭くて下手投一方に限られ又球は六球であつた　私が歸國して新橋に野球團をオーガナイズしたと云ふ事をスポーヂング氏に通知して遣ると氏は非常に喜んで間もなくシカゴ トリビユーンの紙上に「日本の野球」と題した記事のあるのを切抜いて送つて呉れ　同時にプロテクターとマスク打棒 球と價格にすると六百圓程の用具を送つて呉れて金は三百圓で好いと書き添へてあつた　其厚意は實に謝するに餘りがある、一切の用具の到着と同時にガイドブツクも來た、見ると驚いたのは野球規則が

△田安家の構内　私の米國へ行つたのは汽車製造抔に關した事を研究する爲めで明治四年に行き六年（後）に歸つた、其時に始めて米國からベースボールの球と打棒とを持つて來た　長い航海の退屈凌ぎに乘客を集めて甲板で練習を始めたが中々面白い、調子に乘つてやつて居る内に半ダースの球を半分まで海の中へ投り込んで仕舞つた此上やつて折角の土産を玉なしにしてはと色々考へた末その後は袋の中へ小豆を詰めて堅く締め之を球に代用　した、日本へ歸つて見ると野球を知つて居るものは一人も無い　開成學校で行り始めたのは　それからズツと後の事で一向揮はない　私の勤め先きは新橋の鐵道局、其處に役人も随分居たが球を見て唯だ堅い奇妙な球だ位に思つて居た、私は其時木挽町に住んで居て鐵道局へ出る外に三田の田安家と紀州侯の家族へ英語の教授をした、英語ばかりぢや可けない運動も必要だ夫れには野球が好いと田安家の構内で始める、仲間は私が英語を教へて居た人々で直ぐにチームが出來上る、我もくと人數が殖える、最う球の捕りやりが出來る様になる、占めた、サア面白くて堪らない

△最初のグラウンド　その中に彼方でも此方でも野球と云ふ事が解つて來て局内にも何うやら野球熱が傳染して來た　ソコで一人三十銭位　づく持出して時の局長（井上勝）にも若干の寄附を願ひ　今の芝浦製作所のある處にグラウンドもスタンドも出來た、これが日本で野球グラウンドの皮切りである　チームは後に新橋倶楽部と稱へて一時盛名隆々たるものであつた　此時分に慶應の村尾君兄弟（兄・岡田英太郎　弟・村尾次郎）も加入して居られ　又大久保公の令息（大久保利武）が加はつた事もある　彼のウヲード氏も自分が手を取つて教へたと云つて好い、新橋にグラウンドが出來た時分に來た人は大概忘れて仕舞つたが築地から米國人が二人、工部大學から二三人、夫れから農科大學からも來て居た彼是する内　ユニフォームも出來外から試合を申込むものさへある程になつた　それは明治十一年頃と記憶する

△用具一式で三百圓　私が米國に居た時ボストンチームの投手をして居た今有名のスポーヂング會社のスポーヂング（Albert Goodwill Spalding）氏とマンチエスターで會見した事があるが其時代には投手のピツチングの範圍が頗る狭くて下手投一方に限られ又球は六球であつた　私が歸國して新橋に野球團をオーガナイズしたと云ふ事をスポーヂング氏に通知して遣ると氏は非常に喜んで間もなくシカゴ トリビユーンの紙上に「日本の野球」と題した記事のあるのを切抜いて送つて呉れ　同時にプロテクターとマスク打棒 球と價格にすると六百圓程の用具を送つて呉れて金は三百圓で好いと書き添へてあつた　其厚意は實に謝するに餘りがある、一切の用具の到着と同時にガイドブツクも來た、見ると驚いたのは野球規則が非常に變更されて居た事で六球が四球と御存知なかつたのである、では一番最初に日本へ野球を傳へたものは誰かと云ふと烏滸がましいが斯く云ふ私なので其頃は素より今の様に旺盛を極めやうとは思はなかつたが今から考へると心中聊か自負の愉快を感ぜぬでもない、中年過からは全然野球と手を切て近頃は餘り・・・イヤ随分久しい間見にも行かないが今年はウイスコンシン大學の選手が來るとの事、何うかして是非一度見たいと思ふ

△素手と素面　此時代の試合振りを今の若い人達に見せたいと思ふ、捕手の用ふマスクも無ければミツトもグロウブもありはしない小指が非常に強いグラウンダーでも素手で捕るのだ、斯様になつて拇指を着けて指を離さない様に掬ひ上げると云つた形だがそれが中々危険な仕事で其證據には　私　が或時ピツチヤーに立つてインカーヴやアウトカーヴの打ち方抔に就いて（？）プレーニングして居るプレーの打ち方抔に就いて　プレーニングして居る飛んで來た　何のと受けた積りのが見事外れて左の小指に打衝り球は其儘飛んで行つた、と打手の打つた恐ろしい強い直球が眞正面に小指に打衝り球は其儘飛んで行つた、左の小指が非常に痛いと思つたら其時の傷で今に斯様になつて居る（と小指の第二關節の所の歪んで居るのを示す）

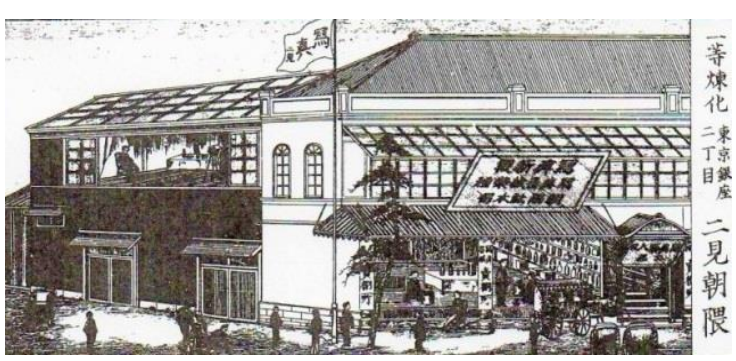
△プロフエツシヨナル　古い話は此位にして扱て私の意見をいふと今日斯くまで野球が盛んになつたのを幸ひ日本でもプロフエツシヨナルチームを作つては何うかと思ふ　そして俸給を支給する事にしたら學校を卒業したり會社へでも勤めるやうになると　モウ駄目だなどく云ふ嘆聲は聞かなくて済む、高い俸給を出せば學生以外にも選手希望者が出て來る　チト突飛か知らぬが斯うしたら一層盛んになる事と考へる。　私が

米國を出發する時すらシカゴチームの第一壘守オロール（Jim O'Rourke ?）と云ふ人は一シーズン一萬二千圓でニューヨークへ傭ひ入れられた　三十年前既に此多額を支拂つて居るのだもの盛んにならずには居られない譯だ、日本にも早晩　此プロフエツシヨナルの起る時代が來るであらうと信ずる　今度來たウイスコンシン大學の技倆が互角だと面白い餘り差があつては氣乗りがしないし第一野球の進歩の途でもなからう

非常に變更されて居た事で六球が四球となり下手投のみであつた範圍も廣められて米國の野球の駸々として進歩して居る事が一目に判つた　さて右の紀念ともなる球と打棒は帝國大學と慶應義塾へ寄贈したが塾では大切に保存して今でも野球部茶話會には此紀念品を飾付けるとか　其　志　が嬉しいで其證據には　私　が丁度三崎町に移轉し三崎町原で其中に　私　は丁度三崎町に移轉し三崎町原で練習を始めたが此時の人で今早稲田の選手になつて居る人もあると聞いて居る

◎明らかな誤記は（色文字）で修正
本文一段2行目…原文は「今を去る三十六年前」とある　平岡凞の帰国時期は一八七六年六月なので「三十三年前」と修正
◎人名などは資料により（緑字）にて補足
本文三段4行目…「時の局長（井上勝）」など

「時事新報」紙　1909（明治42）年09月18日「野球號」01頁より



二見写真館
初代 二見 朝隈(ふたみ あさま)が１８７８(明治 11)年に京橋区銀座二丁目に開業した写真館

【参考資料03】

亜米利加〇マツサチユセツツ〇邦内〇ウースター〇ノ新聞紙ニ載セシ〇レウス〇學校ノ師〇ボードマン〇ヨリ此學校の議長〇ドクトルシーウルス〇ニ希有ノ上達ヲ爲セシ日本の兩少年ノ事ヲ告ル千八百七十三年三月ノ書狀ノ略解

ハルヨシ森（森明善）并ニヒロシ平岡（凞）ハ千八百七十一年八月此國ニ來レリ各家塾ニ就テ學ブコト一月而シテ森ハ第四等ニ入リ茲ニ到リシヨリ六月ニシテ第二等ニ上リ一年ノ終リニ第一等ニ入レリ〇平岡ハ暫クノ間初歩ノ學校ニ於テ日ヲ送リ乃四等ニ入リ而シテ六月ヲ經テ二等ニ達シタリ　平岡ハ交友ヲ喜ビ其同學ノ戯嬉ニ大ヒナル佳趣ヲ添フ　是ニ由テ彼ハ英語ヲ話スコトニ於テ大ヒナル進益ヲ得タリ　而シテ英語ヲ以テ　甚ダ好キ話本ヲ作レリ

此兩少年此月〇グラマ〇スクール（讀書上ノ語ヲ教ウル小學校ノ名）ヲ去ル其故ハ彼等ハ十分速ニ等級ノ進歩ヲ爲サザルガ爲ナリ而シテ當秋ニ於テ〇インスチチユート〇オフテコノロジー〇（技術上ノ語ヲ修スル所）ニ入リ各自ニ適當スルヲ試ントス　ベガン（偶像人鬼鳥獣魚虫等ヲ祀ル宗旨ノ惣名）ノ國ヨリ來リテ慇懃ナル兩少年ハ我國ノ小児輩六年ニシテ成ルヲ望ム程ノ多クノ業ヲ二年ニテ爲シ且我國ノ小児輩ノ好ク做スヲ競ウ徳業ニ平生勉励ス云々

「東京日日新聞」一八七三（明治06）年09月18日

【参考資料04】

◎運動場開設の計畫　鐵道局技師平岡凞氏が曩に學業研究として米國へ滞在中身體の健康を保護せんが爲め學習の豫暇には種々の運動を務めたりしに寧ろ虚弱の質なりし氏の身體も多年の學習中一度も病に侵されたることなきのみならず筋骨益々強壯を加へたる事實の明白なるより學業成て歸朝の後も常に朝夕運動を事とし鐵道局技師と爲りて新橋停車場に在勤するや技手の諸氏へ親く種々運動の効能を説示し最初僅に數名の同意者を得て同構内の空地にて假運動場を設け嘗て在米中傳授したる運動技術中ベースボール（球抛）を規則正しく教授したる處漸次之に仲間入りする者ありて都合三十餘名に及び今月

今日迄殆んど十餘年間終始渝らず規定の運動を行ひ來り尚ほ此間も氏は諸學校教諭に慫恿し飽く迄ベースボールを我邦に擴めんと種々盡力したるに最初の程は容易に擴べき様子もなかりしが追て體育の事は世の一問題となりたる以來右運動術も漸く行はれ三四年前來は諸學校及陸海軍人中にも續々氏に就て教授を乞ふ者あるに至りたる由　氏は三四年前運動會員たる人々三十餘名と寫眞を取り歸朝以來日本にベースボールの先導者と爲り追々該運動の開けたる事實を書き綴りて在米國中運動教師たりし某氏へ寫眞と共に送致したるに教師の喜び限りなく手簡の儘各新聞に掲げたるのみならず自身製造のベースボール（代價百弗位）を平岡氏に贈り且叮嚀なる書簡を寄せて深く其功勞を賞したりと　元來米國にてはベースボール常に盛んに流行し各都府とも其仲間組合を設け競馬などの如く時々球抛の勝敗を試み廣く公衆に縦覧せしむるが其技術者へは組合中より一年千圓以上の給料を支給する程人氣の集りて體育上必要の技術と知られたるものなる由　平岡氏は目下既に時機の到來せるを期し遠からず東京に一大運動場を開設し茲にベースボールを廣く一般人に擴むるのみならず此内には更に弓銃射的場、馬場、撞球場其他尋常の運動を實施する大運動場を開かんとの計畫ありと云ふ

「時事新報」紙一八八九（明治22）年01月15日より

【参考資料05】

我が國野球界の變遷（上）

日本製樽株式會社
取締役
平岡寅之助氏談

日本に於ける野球の沿革は明治十年前後まで遡り得る、西郷戦争の頃が丁度

▲その濫觴　である、當時東京では大學南校の御雇教師ストレンジ氏の肝煎りで南校の運動場や神田三崎町の練兵場などで投球を主としてベースボールを行つたもの

【参考資料06】

慶應野球部史（覇権を握る迄）

村尾次郎氏談

平岡凞氏が米國

にて鐵道に關し研究しつゝあつた傍らベースボールを習ひ覚え西南戦争のあつた明治十年歸朝した。氏は米國にありても或るチームの右翼として名高かつた程であるから日本に歸つてからもボールに熱心であつた。未だ氏が鐵道院の汽車課に入ぬ前は氏が一つ橋藩士であつた關係上、プライベート・スクールを綱町に設け

徳川達孝伯を

始め鐵道局の人々や帝大の有志及私の兄（岡田式部官）などにボールを教へて呉れた。その中　田安さんが金を出してフランネルのユニフォーム及帽子などを作り、毎日午後になると夕方まで練習をやつたものである。それは丁度明治十二年から十四年まで續いたと思はれる。

これ等の選手は

當時餘程ハイカラなものであつたに違ひない。何にしろ其の時分フランネルのユニフォームとか揃ひの帽子などゝ云つては一寸毛色が變つて居るから……。是等は皆な平岡氏が米國で見た通りのものを誂へたので、帽子などでも現今選手の用ひて居るものと少しも變らない。

平岡氏が鐵道局

に這入り汽車課長となると、今の八つ山車庫邊の地面に五百圓程も金をかけて掎麗に芝生を植た本式のグラウンドを作り上げた。此頃こんな運動場は日本に見る事の出來なかつたのは勿論である。之が新橋倶楽部の前身となつたのである。（後略）

『野球年鑑　大正七年度』一九一八（大正07）年05月20日より

▲日本最古マスク　であろう、多分その前年かと思ふが東京の外人（明治學院、立教大學、青山學院の宣教師達）が横濱の外人を相手にして新橋で試合をやつたことがある、その時用いたグラウヴはフートボール用の手袋であつた、十八年には虎の門の工部大學に山口俊太郎、生田益雄、秋山義一、丹羽鋤彦、増田袈裟四郎の諸君がゐたし之と相前後して豫備門には久保勇、中谷弘吉、島友雄、青山鼎助、三池貞一郎、堀尾権太郎諸君が此方面に活動してゐた、豫備門は福島、伊木、中馬、高田、山本、平佐諸氏の時代を経て鹽谷、岩岡諸氏の頃に、町田、小野、平山、加賀山諸氏を有つてゐた駒場農學校と互に好敵手で能く鎬を削つてゐた、勝負は五分々々で先づ伯仲の間に在つた、二十年代に入つて慶應には松山、猪谷、黒田、村尾、濃泉諸氏があつた、然し慶應が頭角を斯界に擡げる迄にはまだ之に歳月を價さなければならなかつた、二十二年頃明治學院に白洲、村山諸氏、高等商業に志岐、赤羽、斯く申す余などがゐた、高商にチームのあつたのは前後此の時代の諸氏が當時の面々であつた、尤も横濱居留地の外人は時々野球の催しをしてゐた様である、之より先き米國に留學してゐた余の兄平岡凞が九年の五月頃歸朝して鐵道局に奉職することになつてから兄の部下の人々に此の技を教へ漸次局外の人も參加して十四、五年の頃新橋鐵道局の構内の一部にグラウンドを拵へた、又同じ兄が三田の徳川家の公達に英語の指南をしてゐた關係から此の運動を公達に勧め徳川家では馬場を擴げて三田綱町に運動場を設けた

▲その頃使用した球　は兄が米國から見本として持つて歸つたのに模して神田今川小路の靴屋が造つた、と云ふのは靴屋がゴムや皮革を扱ふ商人だつたからである、それから明治十六年には余が米國に在學の友人に依頼してボールやバットやマスクなどの道具一揃が兄の手許へ届いた、そのバットは明治四十年　余の大連にゐた頃満鐵チーム對外國軍艦試合の時に折つてしまつたがマスクは今も余が珍蔵してゐる、恐らく

だけと云つても宣い、まだ外に溜池クラブと云ふのもあつた二十三年には前に述べた鐵道局のチームが解散して所有の器具を各方面で分けて寄贈したことも一寸附け加へて置かう。

「大阪朝日新聞」一九一五（大正04）年08月05日より

坪井玄道と体操伝習所

明治10年代の野球の伝播



坪井玄道（1852-1922）



体操伝習所第 01 回卒業生の記念撮影（1881 年）

明治10年代(1877-1886)に日本のベースボールの基礎をきずいたのは、**平岡凞**です。

平岡がひきいた**新橋倶楽部**は、モダンなユニフォームを身につけ、よく整備されたグラウンドでアメリカ製のバットやミットをつかい、最新のルールで野球を楽しんでいました。

同じ頃、東京の神田一ツ橋に**体操伝習所**という体育の専門教師を養成する学校がありました。

そこには、身体の健全な発達に必要な知識をえるため、全国から学生たちがあつまってきます。

そして、正規の学科外には、ベースボールやボートなど、各種のスポーツも教えられていました。

坪井玄道は、その学校の中心となった教師でした。**体操伝習所**の野球は、やがて卒業生たちにより全国各地へひろがっていきます。

今回は、明治10年代にベースボールの普及に貢献した**坪井玄道**と**体操伝習所**のはたした役割について調べてみました。

体操教師・坪井玄道

坪井玄道は、1852(嘉永06)年01月、下総国葛飾郡中山村鬼越（今の千葉県市川市鬼越）の農家に生まれました。

彼は、14歳のとき医者をめざして、江戸へ出て英語を学びます。

そして、**坪井**は19歳となった1871(明治04)年に**大学南校**（今の**東京大学**の前身校）で英語を教えるようになりました。

また、1872(明治05)年には開校したばかりの**師範学校**（今の**筑波大学**の前身校）でアメリカ人教師の通訳をつとめ、1875(明治08)年　から**宮城英語学校**の教諭として仙台へ赴任しています。



リーランド
(1850-1924)

彼の転機は、1878(明治10)年でした。政府が**ジョージ・Ａ・リーランド**をアメリカから招き、**体操伝習所**をつくるときに、26歳の**坪井**が東京へ呼び戻されたのです。

1879(明治12)年04月、**体操伝習所**は 25人の学生をむかえて開校します。授業は、欧米の体操を中心に医学や英語・物理・化学などもふくまれ、正規学科外には様々なスポーツも教えられました。

そして、第01回の卒業生(21名)を育て、リーランドは1881(明治14)年に日本を離れます。

その約三年間、**坪井**は誰よりも熱心に、**リーランド**から学んでいました。彼は、当時のことを次のように回想しています。

「私はリーランド氏の教授を生徒の前で通訳するのが、私の職務であつたが、書物の講義と違つて、技術に関する事なので、常に生徒に教授する前に、私はリーランド氏から其日の課業を實際に學んで置いて、それから授業に出ることにして居たので、私は何時しか一人前の體操の教師となつて了つた。」

こうして、医者を志して英語を学んだ**坪井**が、いつの間にか日本の体操教師の先頭に立っていました。

軍部の動き

ところで、1880年代までの日本は、さまざまな分野で欧米からの指導者を招いています。

当時の日本では、先進の科学や技術などを積極的に取り入れようとしていたので、体育はあまり重要視されていませんでした。

体操伝習所は、その反省から設立されました。

けれども、その頃の政府は、ひとりひとりの人間性を豊かにするために、体育を充実させようとしたのではありません。

むしろ、軍と国家に役立つ人材を育てようとしていました。

軍部の動きをふりかえってみましょう。

明治時代の軍事力強化は、1873(明治06)年の「**徴兵令**」からはじまります。

次に、1877(明治10)年の不平士族による大規模な内戦（**西南戦争**）と1878(明治11)年の近衛砲兵下士卒の反乱（**竹橋騒動**）を制圧して、国内を安定させる体制は整えられました。

そして、1882(明治15)年01月、日本の軍隊を天皇の軍隊と明確に定めた「**軍人勅諭**」が下付されます。

また、同年08月に朝鮮で発生した日本公使館襲撃事件(**壬午軍乱**)の直後には「**戒厳令**」と「**徴発令**」があいついで制定されました。

さらに、その年の年末までには、軍備拡張のために増税することも決定されました。

こうして、軍部は外国との戦いを念頭に、勢力を拡大する方針を次々と打ちだしていきます。

とくに、上官の命令は絶対と心得よという「**軍人勅諭**」は、1945（昭和20）年に日本軍が解体されるまで、６０年以上にわたって、一字一句も変更されることなく、日本の軍事体制を支える不動の柱となっていきます。（大江志乃夫『戒厳令』より）

体操伝習所への影響

このような情勢は、教育の分野にも波及しました。

体操伝習所には、陸軍の教官が派遣されて、1880(明治13)年11月から半年にわたり週三回の軍事教練が実施されました。

さらに、1881(明治14)年04月には、週一回の射撃演習もおこなわれるようになります。

しかし、**体操伝習所**では、その年の 05月に一応の訓練期間が終了したことを理由に軍からの教官の派遣を辞退しています。

また、1883(明治16)年05月、**体操伝習所**は、文部省(今の文部科学省の前身)から剣術や柔術を学校教育に取り入れる場合の利害適否を調べるよう指示されました。

これに対して、**体操伝習所**では医学的な影響を含む様々な調査を実施しました。

その結果として、「(剣術や柔術は) 学校教育の正規科目としては不適当」との報告を 1884(明治17)年11月に提出しています。

さらに、**体操伝習所**の教育内容にも変化がみえます。

まず、1882(明治15)年には、開設当初からの英語科目にかわって「修身 (今の道徳に相当する)」が正規科目に取り入れられました。

これは、天皇を国家の中心とする教育方針を徹底するための変更でした。

そして、1885(明治18)年からは**兵式体操**(戦場で役だつ動作を基本とする体操)の実施が全国の学校で義務となり、**普通体操**のほかに**兵式体操**の教員を養成するための科目が組み入れられます。

このようにして、教育の現場にも重苦しい雰囲気が忍びよっていました。

坪井のスポーツ観

さて、今でこそ「**スポーツ**」が日常の話題となることは珍しくありません。けれども、1880(明治13)年頃の日本では、ほとんどの人が「**スポーツ**」という言葉さえ知りませんでした。

坪井は、その頃の日本で「**スポーツ**」について、最も深く考えていた人です。

それは、**リーランド**に学んだだけではありません。得意の英語をいかし、欧米で出版された本からも独自に知識をえていました。

また、同じ頃に日本で教えていた他の外国人教師との交流からも考えを深めていきます。

それらを通じて得た彼のスポーツ観は、次のようなものです。

「単に身体の健康を増進するだけなら、『**普通体操**』で充分である。しかし、そこには身体の活発な動きから生まれる壮快さが不足している。だから『**優暢快活**』で心まで健康にする**スポーツ**こそ、学校教育へもっと積極的に取り入れるべきだ」というものです。

これは、今からみれば、平凡な結論かもしれません。

けれども、戦場を想定した訓練が学校教育に採用されつつあった時代に、**坪井**は、ひとりひとりの学生たちの「人間性」を重視した**スポーツ**の普及に目をむけていました。

体操伝習所の野球用具


自在畫扁額 十五面 ○生徒用器畫 二冊 ○生徒作文
○體操傳習所出品
第三十四號 鉄機場内外部撮影（扁額）五面
第三十五號 鉄機器具類 噴鈴二對（大小男子用價二錢 小幼兒用價三拾錢）○棍棒二對（大男子用價一圓四拾錢 小女子用價九拾九錢）○球竿（價七拾錢）○木環（價二拾錢）以上四種輕捷運動ニ用フ 本郷元町一丁目 田中喜十郎製 ○豆袋（專ラ女子鉄機ニ用フ 價四拾五錢）
第三十六號 戸外遊戯器具類 猫環球（環八個 棒二本 球四個ヲ十個一組 價三圓）七拾五錢（神田淡路町一丁目 渡邊德次郎製）○ベースボール（環四個 打棒二本 一組價壹圓四拾錢 神田美土代町一丁目 森田金兵衛製）○蹴鞠（價八圓 米國製）
第三十七號 鉄機器具使用方圖 五枚
第三十八號 教場器具類、生徒用椅子卓子（價二圓七拾錢 田中喜十

『文部省教育品陳列場出品目録』（1881）より

ところで、**体操伝習所**では、早くから野球が取り入れられていたようです。

それについては、1881(明治14)年に東京・上野公園で開催された博覧会へ、**体操伝習所**からの出品として、

『○ベースボール［球四個、打珠棒二本］一組（價壱圓四拾銭）神田美土代町一丁目　森田金兵衛製』という記録ものこっています。

けれども、ここにはグラブもミットも記されていません。

その頃は、まだ素手野球の時代でした。

坪井は、ある本に「猶ベースボールも教へた。併し此頃は空拳でキヤツチをやるので、大抵指を曲げて了つた」と書いています。

なお、同じ博覧会に出品されたアメリカ製のサッカーボールは、一個で八円。一組の野球用具の五倍以上です。

ベースボールは、はじめて伝えられてから 10年近い歳月を経て、国内での用具の生産体制も整いつつありました。

また、博覧会が催された1881(明治14)年から翌年にかけて、**体操伝習所**ではバットやボールなど「八組」の野球用具を日本の各地に送っています。

それは、この期間に各府県の**師範学校**（今の**教育系大学**）などへ赴任した第一回の卒業生たちが注文したものです。

その数は、サッカーボールの三個とくらべて三倍に近く、各地に就職していった卒業生(17名)の約半数からの依頼でした。

このことは、**体操伝習所**でも早い時期からベースボールの人気が高かったことをうかがわせます。

卒業生たちが伝えたベースボール

それでは、その「八組」の野球用具は、実際にどこへ送られたのでしょうか。

今のところ判明しているのは、官立の**大阪中学校**(今の**京都大学**の前身校)だけです。

この学校には、1881(明治14)年に**体操伝習所**から数回にわたってバットやボールが届けられています。

当時この学校は、全国の中学校（今の高校にあたる）のモデル・スクールとして体育館なども整備されていました。

体操伝習所の前主幹・折田彦一が校長をつとめ、友野正忠（第一回の卒業生）が赴任するなど体操伝習所と密接な関係にありました。

校長の折田は、学校の方針として「体育」やスポーツを充実させることが重要だと考えていました。

野球用具の購入は、その考えの具体的なあらわれです。

また、体操伝習所の卒業生が教えた学生や生徒のなかには、のちに野球史上の有名選手となった例もあります。

1884（明治17）年の卒業生・黒崎信は、東京の府立第一尋常中学校（今の日比谷高校）で「ＡＳ会」というスポーツクラブを指導しています。

この会は、中学校（今の高校にあたる）の運動部としては、全国でも最も早くつくられたクラブのひとつです。

黒崎が教えた生徒には、のちに「一高時代」と呼ばれる時期に活躍した名投手・福島金馬がいました。

ひとつの時代を築いた福島も、体操伝習所のスポーツ精神を学んでいたのです。

さらに、1886（明治19）年頃になると、体操伝習所の卒業生たちが赴任していた岩手県や群馬県・長野県などの学校でも野球の道具を購入した記録が確認できます。

また、体操伝習所の卒業生から教えをうけた人たちも、その頃の野球の思い出を懐かしく語っています。

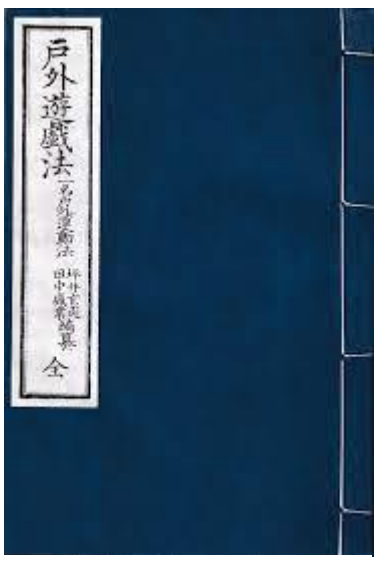
そして、1889（明治22）年04月に茨城県を旅行で訪れた正岡子規は、水戸公園で竹の棒をバットにして、柔らかい毬で野球のまねをして遊ぶ10歳くらいの子供たち（七・八名）をみかけました。

子規は、その光景から「この地方にベースボールがあるのは、体操伝習所の卒業生などが小学校にひろめたのだろうか」と思いをめぐらせています。

もちろん、**坪井**は野球だけの普及を考えていたのではありません。けれども、結果として、ベースボールは、**坪井**をはじめ**体操伝習所**の卒業生たちによって日本の各地へ普及していきました。

それは、技術的には未熟であったかもしれませんが、各地の少年たちにとっては、初めて体験する西洋のスポーツ文化でした。

『戸外遊戯法　一名、戸外運動法』



『戸外遊戯法』

1885(明治18)年04月、**坪井**は『**戸外遊戯法　一名、戸外運動法**』という本を**田中盛業**（**体操伝習所**第一回卒業生 1859-1924）との共編として出版しました。

この本は、明治期の前半を代表するスポーツ書です。

さまざまな競技を解説するなかで、野球は「ベースボール（打球ノ一種）ノ部」としてルールをふくめて、もっとも詳しく取りあげています。内容の一部を紹介しましょう。

『「ベースボール」ハ健康ト愉快トヲ享有スルニ最モ適當ナル戸外遊戯ニシテ――』　これが解説の冒頭です。

また、年齢を問わず誰でもがプレーできるとも書き、まるで実直な父親が子供たちに語りかけるように、野球がいかに優れたスポーツなのか具体的な例をあげて綴られています。

そして、一度そのやり方を理解すれば、皆がベースボールを好きになる。それればかりか、これを好み『寝食ヲ忘ルヽモノアリ』とさえ述べています。

この解説には、あたかも「未知の世界」へはじめて足を踏み入れた探検家からの手紙のように、自分たちが体験したスポーツに対する素直な歓びと驚きがあります。

また、その楽しさを多くの人に伝えたいという願いには、明るく自由な人間性を求めた**体操伝習所**の人たちの、「ベースボール」への深い理解と共感がこめられていました。

それは、その頃の人たちだけではなく、いつの時代にも共通するスポーツへの感動でもありました。

その意味で『**戸外遊戯法**』は、日本のスポーツ文化の原点と言える一冊です。

そして、この本との出合いが将来を決めてしまった**櫻田鐵之助**（明治期の秋田県を代表する野球の指導者）のような例もみられます。

小学生のときに成績優秀者として表彰された**櫻田**は、副賞として『**戸外遊戯法**』を手にします。

以来、その本でベースボールを独学し、熱中していきました。

彼は、のちに教師となり、この本をもとに、まさに「寝食を忘れて」生徒たちに指導しました。

その結果、秋田県の野球は全国的にも早い時期に発展したのです。

その後の坪井玄道

1887（明治20）年、**体操伝習所**は、約10年間の役割をおえて、**高等師範学校**（今の**筑波大学**の前身）の一部となりました。

坪井は、そこで体育科の教授を長年つとめ、明治時代を代表する教育者となっていきます。

坪井が追い続けたスポーツとは、新しい時代にふさわしい『**優暢快活**』な心身をもたらすものでした。

彼は、軍部と対立しながらも現実的な指導者として、その信念をつらぬきます。

しかし、急速に軍国化する日本は、**坪井**の理想をうちくだいていきます。彼は、1909（明治42）年に自分から教授の職をさりました。

坪井がめざしたスポーツは、勝ち負けへのこだわりや抑えつけられた人間性から最も遠いところにあったのです。

坪井の生涯には、同じ時代に活躍した**平岡凞**のような華やかさはありません。

また、独自の考え方を強く主張した「威勢のよい」著書もみあたりません。ただ、いつでも黙々と最善をつくしています。

それが、どんな状況でも未来を信じていた彼の生き方でした。

坪井玄道は、1922（大正11）年11月02 日に直腸癌で亡くなります。享年70歳。

自分の天職と誠実に取りくんだ人。それが**坪井玄道**です。

彼の人生は、寒風のなかに清々しく花を咲かせる梅の古木を思わせます。

その花が、やがて多くの果実となるように―

坪井玄道 と **体操伝習所**の人たちは、各地の人々の身近な生活のなかで欠かせない役割をはたしていました。

◎主な参考資料

『文部省教育品陳列場出品目録』（文部省／1881年）

『體操傳習所一覧』明治17,18年（體操傳習所／1885年頃）

『戸外遊戯法 一名、戸外運動法』（坪井玄道・田中盛業〔編〕／1885年）

『教育五十年史』（財團法人國民教育奨勵會〔編〕／1922年）

『東京府立第一中學校 創立五十年史』（東京府立第一中學校/1929年）

『学校体育の父 リーランド博士』（今村嘉雄／1968年）

『戒厳令』［岩波新書］（大江志乃夫／1978年）

『秋田県軟式野球連盟四十年史』（秋田県軟式野球連盟〔編〕／1985年）

『明治期学校体育の研究』― 学校体操の確立過程 ―（能勢修一／1995年）

『明治期比較地方体育史研究』

―明治期における石川・岩手県の体操科導入過程―　（大久保英哲／1998年）

＊「近代日本の体育思想３ 坪井玄道」（木下秀明／体育の科學・1964年06月号）

＊「明治期における群馬県師範学校体操教師の体育実践に関する一考察」（福地豊樹／群馬大学教育学部紀要[芸術・技術・体育・生活科学]第21号・1985年）

今回は **坪井玄道と体操伝習所** について少し調べてみました

リーランド氏は在職三年を経て帰った。私は何時しか體育に非常に熱心になって了ったので、とうとう其後を引受けて體操の教師として世に立つやうになった。

『教育五十年史』（財團法人國民教育奨勵會〔編〕／1922年）

第三章 創業時代の師範教育 体操伝習所の設置　坪井玄道　22頁より

野球史デジタル資料室 007-05

【参考資料01】

体操伝習所（第一期伝習員）活力統計表『文部省出陳 教育品附言抄 全』1881（明治14）年06月より

活力統計比較表

調製年月	局部	身長	指極	上臂周	下臂周	胸周	充盈空虚常時	肺量	體重	握力 右手	握力 左手	力量年齢	生徒姓名
十二年十月	現数	五五三	五五五	九五二	八二	二九七	二六一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	中島代次郎
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	中島代次郎
十二年十月	現数	五六〇	五五九	九五二	八二	二九七	二六一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	加藤重成
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	加藤重成
十二年十月	現数	五二四	五二九	八七	七九	二八〇	二五二	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	原收造
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	原收造
十二年十月	現数	五二九	五二九	八七	七九	二八〇	二五二	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	友野正忠
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	友野正忠
十二年十月	現数	五二六	五二九	八三	七九	二七九	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	遊佐盈作
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	遊佐盈作
十二年十月	現数	五二七	五二九	八三	七九	二七九	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	中村信量
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	中村信量
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	佐野誠一郎
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	佐野誠一郎
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	玉井瑳一
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	玉井瑳一
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	野間謹爾
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	野間謹爾
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	丹羽貞次郎
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	丹羽貞次郎
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	兼崎茂樹
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	兼崎茂樹
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	寺田寛之丞
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	寺田寛之丞
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	田中盛業
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	田中盛業
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	高橋金藏
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	高橋金藏
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	田中達三
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	田中達三
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	藤井欽三
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	藤井欽三
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	小關忠太郎
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	小關忠太郎
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	小山鐵也
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	小山鐵也
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	佐久間欽次郎
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	佐久間欽次郎
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	依田平四郎
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	依田平四郎
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	佐々木武治
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	佐々木武治
十二年十月	現数	五一七	五一九	八二	七八	二七八	二五一	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	年月	平均
十四年三月	差 増減	尺	尺	尺	尺	尺	尺	立方寸五百	瓩	瓩	瓩	度	平均

【参考資料 02】

逸話に富みたりし

元眞岡醫院醫官

田中盛業氏遂に他界へ

元樺太廳醫官眞岡醫院眼科主任であつた田中盛業氏は昨年より宿痾(しゅくあ)の爲退官となり眞岡醫院に入院して一時は快方退院　までになつたのが最近又々惡變の爲再度入院したが今度は命數盡きてか遂に逝去して仕舞つた 之より先

歸鄉中 の夫人は急電に接して直に來島したが夫君の看護僅か二日にして空しく世を異にせねばならなかつた この　田中氏に就ては種々の逸話がある。

曩に明治十九年始めて師範學校に教鞭を執つてから十五六年間専ら生理學の教諭として育英の職に當つてゐたが中途退官となつて夫(それ)から中國邊の某商家の婿養子となつた想(そう)だ、然るに恬淡なる氏の性格としては到底算盤の利を計るが如きは　　不適當であつた 案の條所謂

士族の 商法の文字通(もじどおり)で忽ち養家の預金に少からぬ空虚をさへ生ずる様になつたので遂に破鏡(はきょう)となり間もなく樺太へ渡つて廳醫院の嘱託をなつたのが確明治四十五年であつた想だ。夫から約十三年の間の氏は實に仙人の如き生活を送つた 旅館百足屋の六畳室に下宿して要務以外には一切門外に出でず人と語らず唯讀書に耽つて日を送り夜を更かすのみで　　あつた 此下宿住居の十三年間に

元養家 への負債千圓足らずを辨濟した外に義弟長沼君をば氏の力を以て大學に送り前年目出度卒業させた又長女は高等女學校を卒業して目下某校に教鞭を執つて居ると云う話 之すらも並々ならぬ努力であるに一昨年即ち氏が眞岡醫院　在職中長く手懸け眼病患者の眞岡町加藤美之君が病猶癒へぬ内に氏は退官となつて鄉里に歸らんとしたが加藤君の病氣を見捨去るに忍びずとて家族のみを

内地へ 送り氏は一人留まつて專心加藤君の治療に腐心した想だ 而も之は氏が職を失つてからの□であるか□毎日加藤君を□連ては□醫院□到り氏□手に依つて

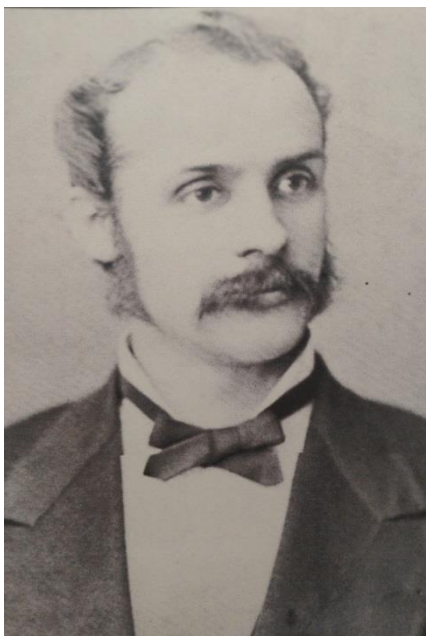
□治療を施しつゝあつたので知るも知らぬも其仁慈厚きを感嘆せぬものはなかつた想だ　氏は常に語つた想だ 弟や子女は最早獨立の出來る程になつた 自分は恩給に依つて前途の生活に支障はない この上はたゞ出來るかぎり世の中のため人のために盡して

この身 を終りたいと 實に仁術と稱せられる醫師は須らく斯ありたいと思ふのである 因に氏の葬儀は眞岡眞教寺に於て親戚知己一同ねんごろに之を營んだ。

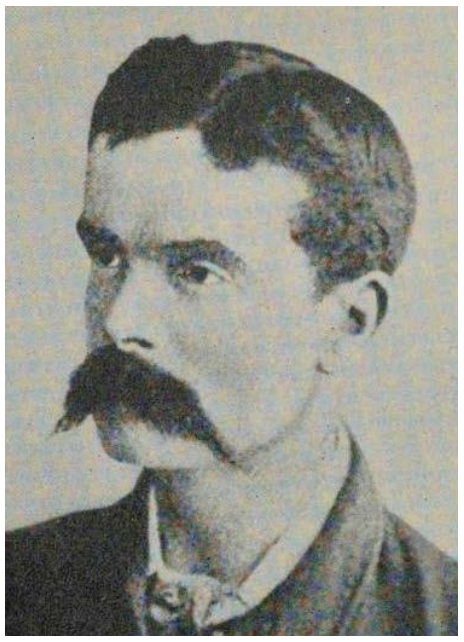
「樺太日日新聞」１９２４（大正 13）年 02 月 23 日付より

外国人教師と教え子たち

明治10年代の学生野球



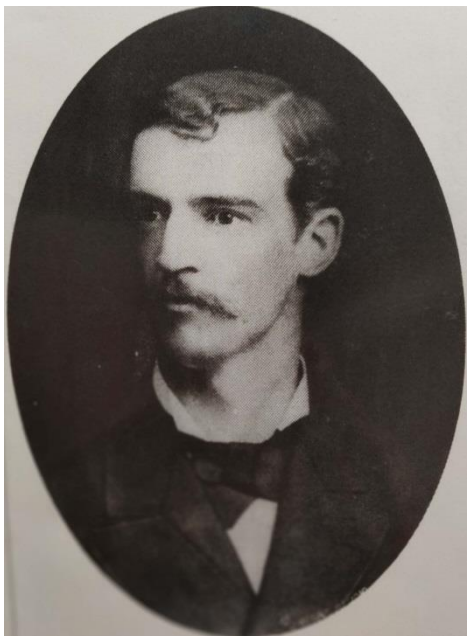
J・ブラックレッジ（1849-1929）



F・W・ストレンジ
（1854-1889）



T・M・マクネア
（1858-1919）



D・P・ペンハロー
（1854-1910）

野球は 1872（明治05）年に外国人教師**ホーレス・Ｅ・ウイルソン**が、日本に初めて伝えました。

そして、その約10年後からは、**体操伝習所**の人たちによって日本の各地へひろめられるまでになっています。

けれども、明治10年代（1877-1886）の日本で、野球界の中心となり本格的に取りくんだのは、**平岡凞**です。

体操伝習所の人たちが、ピラミッドの底辺をひろげたとすれば、その頂点には**平岡**がいました。

そして、彼のベースボール活動を支えていたのが、**平岡凞**を師とあおぐ多くの学生たちでした。

平岡は、ある手紙のなかで
「（**平岡**が）教える以前からすでにベースボールを経験していた学生たちが残ってくれたのでなんとか続けられた」という意味の回想をのこしています。

今回は、その頃の東京を中心に、外国人教師からも指導をうけていた明治10年代（1877-1886）の学生たちについて調べてみました。

ふたつの系統

明治10年代(1877-1886)の日本野球に貢献した外国人教師たちが教えた学校には、ふたつの系統があります。

ひとつは、**東京大学予備門**(今の**東京大学**の前身)に代表される官立の学校。

そして、もうひとつは、キリスト教の宣教師たちが設立した私立の学校です。

はじめに、それぞれの系統の大まかな説明をしておきます。

まず、明治政府が直接に関係する官立の学校では科学・技術を導入するさいの人材の養成に力を入れていました。

そのため、欧米人の教師の多くは理数系の科目を担当しています。

彼らは、安定した収入と恵まれた環境のなかで、学生たちにベースボールを教え、いっしょに楽しんでいました。

はじめて日本に野球を伝えた**ホーレス・E・ウイルソン**も、そのひとりです。

これに対し、私立のキリスト教系の学校では、おもにアメリカ人の若い宣教師が中心となって、ベースボールを指導しています。

そこには、どのような事情があったのでしょうか。

アメリカのキリスト教

歴史をたどってみると、19世紀後半のアメリカは、西部の開拓や南北戦争を経て、近代国家として統一されていく時代でした。

多くの人が経済的な成功をめざす競争にあけくれ、進化論などの影響から宗教に無関心な者も増加します。

そのようなとき、人々に改めてキリスト教へ目をむけさせたのが「大覚醒運動(リバイバル)」と呼ばれる活動でした。

この運動は様々な教派の相互協力や対立・分裂をまねきながらも、キリスト教の普及のために、次々と事業を展開していきました。

多くの宣教師たちを海外へ送りだしたのも、その活動の一環です。

同じ頃(1880年代前後)の日本では、欧米の科学や技術を導入することで、西洋に対抗できる国をつくろうとしていました。

そこで、来日したアメリカ人の宣教師たちは、「日本が近代国家となるためにはキリスト教をとり入れる必要がある」と説いています。

それは、自国の繁栄を根拠とする彼らの宗教的な信念でした。

そして、宣教師たちは自分たちの理想を実現するために、医療や教育など様々な社会事業をおこないます。

そのひとつが学校でした。彼らの学校は、西洋風の建築など異国情緒にみちた雰囲気のなかで、本格的な英語が学べる場として次第にうけ入れられていきました。

ベースボールの歓び

その学校で外国人教師たちは、授業の余暇にスポーツや音楽なども教えるようになります。

それは、彼らの生きている「実感」からわきでた行動であり、職業的な思いをこえた歓びであったのかもしれません。

そして、アメリカ人教師にとってベースボールは、自分たちの誇りでもありました。彼らは、ときには厳しく、ときには優しく学生たちを指導したことでしょう。

しかし、その頃の日本野球では、まだグラブもミットもつかわれていません。学生たちは、それでも夢中になってボールを追いかけていました。

それは、彼らが初めて体験する西洋のスポーツであり、そこには国や人種や宗教さえ問題にしない解放的な楽しさがありました。

学生たちは、その感覚を心の底から味わっていたことでしょう。もし、そうでないとしたら、彼らは、どうして指の骨を曲げてまでベースボールに熱中したでしょうか。

各学校の成りたちもふくめて、当時の様子を探ってみましょう。

東京大学予備門（のちの第一高等学校）

この学校は、**東京英語学校**の流れをくむ官立の学校です。

1877(明治10)年に、**開成学校**が**東京大学**と改称されたとき、**東京英語学校**は、付属する**東京大学予備門**となりました。

野球は前身校の頃からすでにおこなわれていて、外国人教師たちもベースボールを好んでいたようです。

たとえば、1876(明治09)年の**開成学校**の学生たちとの交流試合にも**東京英語学校**から**レーシー兄弟**と**Ｅ・Ｈ・マジェット**という三人のアメリカ人教師が出場していました。

また、1875(明治08)年には、イギリス人教師**フレデリック･ウイリアム･ストレンジ**（Frederick William Strange,1853-1889）が着任しています。

彼が、本格的にスポーツ（陸上競技やボートなど）の指導をするようになると、ベースボールもますますさかんになりました。

ストレンジは、1883(明治16)年に英文のスポーツ解説書『OUTDOOR GAMES』を出版しています。

そのなかで、彼が最も詳しく取りあげたのは、当時の学生たちにも人気が高かったベースボールでした。

イギリス人の**ストレンジ**は、来日後に同僚の教師たちとともに、横浜の外国人チームとの試合などへ参加して野球を覚えたようです。

さらに、彼は、**東京大学**の**法学部ベースボール会**の設立にも尽力するなど、**東京大学**の学生たちへもスポーツを教えています。

なお、**Ｆ・Ｗ・ストレンジ**は、1889(明治22)年07月05日に突然の心臓発作にみまわれ東京の自宅で急死します。34歳でした。

この学校で明治10年代の野球で知られている人たちには、**大久保利武**（元大阪府知事）、**中谷弘吉**（元逓信省東京郵便電信局長）、**島田剛太郎**（元岐阜県知事）などがいます。

工部大学校（今の東京大学[工学部]）

この学校は、1873（明治06）年に明治政府が、東京（虎ノ門）に開設した**工学寮**という学校が前身です。

それが、1878（明治11）年に改称し、**工部大学校**となりました。

この学校は、1878（明治11）年の学則でも授業のなかにスポーツを取り入れていました。

具体的には、体操科目（陸上競技や水泳など）のほかに、「遊戯科目」として、フットボールやクリケット、ゴルフやベースボールも採用されて　います。

しかし、野球がもっとさかんになったのは、1885（明治18）年頃からです。

同校の学生・**生田益雄**などが**新橋倶楽部**の**平岡凞**から指導をうけて、チームを結成したと言われています。

この学校で明治10年代のベースボールを経験した人たちは、**山口俊太郎**（元月島工作所取締役）、**丹羽鋤彦**（工学博士）、**宇都宮貫一**（元鉄道局技師）などが知られています。

駒場農学校（今の東京大学[農学部]）

この学校の前身は、1875（明治08）年に設置が認められた官立の**農事修学場**でした。

はじめは、今の東京・新宿区（新宿御苑の付近）で授業をしていました。

それが、1877（明治10）年に**農学校と**改称して、駒場野（今の**東京大学**[**教養学部**]一帯）へ移っています。

この学校では、1877（明治10）年には、すでにベースボールがおこなわれていました。

また、少なくとも 1883(明治16)年までには、学校の備品としても野球用具をもっており、学生たちは授業の余暇などに、運動場で自由にベースボールをおこなっていました。

そして、1885(明治18)年頃になると、熊本出身の**上田正懿**などが頭角をあらわし、当時の学生野球界を代表するチームとなりました。

この学校で、明治10年代に野球と取りくんだのは、**加賀山辰四郎**(元農商務省技師)、**古在由直**(元東京帝国大学総長)、**田原休之丞**(元神戸生絲検査所長)などの人たちです。

東京英和学校（今の青山学院）

この学校は、東京・築地にあった**東京英学校**と横浜の**美会神学校**が、合同してできたキリスト教系の学校です。

1883(明治16)年に青山へ移り、校名を**東京英和学校**としました。

ベースボールは、1883(明治16)年頃からおこなわれています。

当初は、宣教師として日本へ来たアメリカ人教師**ジェームス・ブラックレッジ**(James Blackledge, 1849-1929)、あるいは、**ジョン・オークリー・スペンサー**(John Oakley Spencer, 1858-1947)、学生の**福島武二**などが校内にひろめチームをつくったと伝えられています。

この学校で明治10年代にベースボールを経験した人たちは、**石坂正信**(元青山学院長)、**小林正吉**(元日本郵船会社重役)、**長谷川朝吉**(元日本メソジスト教会牧師)などが知られています。

東京一致英和学校（今の明治学院）

この学校は、1883(明治16)年に**築地大学校**と横浜の**先志学校**とがひとつになった学校です。初期には、東京の神田にありました。

その後、別のキリスト教系の学校とも合併し、1886(明治19)年に今の東京都港区白金へ移り、**明治学院**となります。

野球に関しては、1884(明治17)年に系列の**東京英和予備校**の学生たちが、その学校の教師をしていた**平岩愃保**の教えをうけています。

平岩は、**ホーレス・E・ウイルソン**(Horace E Wilson)がいた頃の**開成学校**の学生で、**体操伝習所**の教員をしていた時期もありました。

また、学生たちは宣教師をかねた野球好きのアメリカ人教師たち**ウイリアム・M・イムブリー**(William Miller Kisselman Imbrie, 1845-1928)や**ジョージ・ウイリアム・ノックス**(George William Knox, 1853-1912)からの指導もうけていました。

1884(明治17)年には、アメリカのプリンストン大学でもスポーツ選手であった宣教師の**セオドア・モンロー・マクネア**(Theodore Monroe MacNair, 1858-1915 当時26歳)が、この学校の教師となりました。

マクネアは、**白洲文平**(**白洲次郎**の父)などを中心として、校内にチームをつくり熱心に指導しました。

その結果、この学校は初期の学生野球界で強豪と言われるようになります。

この学校で明治10年代に活躍した人たちには、**岡田三郎助**(画家)、**九鬼隆輝**(元貴族院議員)、**白洲純平**(今の春の選抜高校野球大会の初期の大会委員長)、**白洲長平**(白洲三兄弟の末弟)などがいます。

慶応義塾(今の慶応義塾大学)

この学校は、1858(安政05)年に**福澤諭吉**が、江戸・築地鉄砲洲の中津藩中屋敷内で開いた蘭学の一小家塾に由来します。

その後、一時は別の場所で開塾していましたが、1870(明治03)年に現在の東京都港区三田へ移転しました。

この学校でのベースボールのはじまりは、**新橋倶楽部**の**平岡凞**から直接に教えをうけた**村尾次郎**(慶応野球部の創設メンバー)などが中心でした。

また、1886(明治19)年頃には、アメリカ人教師の**E・ギルマン・ストラー**(Eliphalet Gilman Storer, 1857-1911)も指導しています。

この学校で初期の野球選手として知られているのは、**石川澤吉**（元横浜船渠会社社長）、**岡田平太郎**（元宮内省式部官）、**松山陽太郎**(元慈恵医科大学教授)などの人たちです。

立教大学校（今の立教大学）

この学校は、1874(明治07)年にアメリカ人宣教師の**チャンニング・ムーア・ウィリアムス**（Channing Moore Williams,1829-1910）が、東京で開設した英語学校にはじまります。

初期の頃は、**立教学校**という名称でした。その後、1882(明治15)年に築地の新校舎が完成し、**立教大学校**という校名になりました。

この学校では、**クラレンス・ルドロー・ブラウネル**（Clarence Ludlow Brownell,1864-1927)が兵式体操を教え、体育上の利益になりました。

野球も、その頃（1882年から 1889年）には、おこなわれていたとされています。しかし、詳しいことはわかっていません。

この学校で、初期の頃に野球を経験した人たちは、**小林彦五郎**（元立教女学校長）、**木村重治**（元長崎高商校長）、**山縣雄杜三**（元聖公会神学院長)などが知られています。

各地のベースボール

次に、東京以外の各地の状況もみておきましょう。

北海道の**札幌農学校**(今の**北海道大学**の前身校)では、アメリカ人教師**デイヴィッド・パース・ペンハロー**(David Pearce Penhallow, 1854-1910)が中心となりベースボールがおこなわれていました。

青森県では、1878(明治11)年に**東奥義塾**（今の**東奥義塾高校**）で宣教師のアメリカ人教師**ウィリアム･クラレンス･デイビッドソン**(William Clarence Davidson,1848-1903)が、体操の授業のなかで野球を教えたと伝えられています。

岐阜県では、1884(明治17)年頃に**岐阜県尋常中学**(今の**岐阜高校**)で、教師の**平瀬作五郎**(1856-1925)が学生たちに指導していました。

平瀬が、どこで野球を習得したかは不明ですが、彼が以前につとめていた学校では、1878(明治11)年から**高須録郎**も赴任しています。

高須は**開成学校**の学生の頃、熱心に野球をやっていた人なので、**平瀬**が**高須**の教えをうけたとも考えられます。

さらに、海外では**樺山愛輔**(のちに貴族院議員)がアメリカの学校でベースボールを身につけていました。

彼は、1880(明治13)年に 15歳で渡米して現地の中学校を卒業後、**アーモスト大学**で正式な野球部員としても活動しています。

当時の学生野球

1880年代中頃(明治10年代後半)のベースボールは、悪球出塁制度(今は四球で出塁)のめまぐるしい変更や投手のオーバースローが認められるなどルールが大きくかわる過渡期でした。

けれども、その頃の日本で正式なルールを取り入れていたのは、**平岡凞**がひきいる**新橋倶楽部**だけです。

学生たちは、自己流の規則で練習や試合をおこなっていました。

そして、ルールの移りかわりと同様、学生たちのベースボールへの考えも変化しています。

たとえば、1870年代に野球を経験した人たちの回想では、健全な楽しみとして、ベースボールが語られていました。

それに対して、約10年後の 1880年代中頃の人たちの思い出には、血のにじんだ指の痛みに耐えて、ボールを追いかけていたことを誇らしいと語る人もあらわれます。

それは、彼らが、ベースボールを単なる娯楽ではなく、競技的なスポーツと考えるようになっていた証でした。

外国人教師や**平岡 凞**から指導をうけた学生たちは、やがて本格的な対校試合をおこなうようになっていきます。

現在からみれば、その頃の欧米の発展には、奴隷制度や人種差別・植民地問題など様々な矛盾がありました。

けれども、外国人教師たちは、日本の若者たちの心を豊かにしようとこころみました。

そして、学生たちにとっては、外国人教師たちが教えてくれたベースボールとの出合いこそが、西洋の新しい歓びをもたらしたのです。

◎主な参考資料

『東奥義塾一覧』（本多庸一／1878年）

『ＯＵＴＤＯＯＲ　ＧＡＭＥＳ』（Ｆ・Ｗ・Ｓｔｒａｎｇｅ／1883年）

『明治學院沿革略』（熊野雄七／1917年）

『六大學野球全集』上巻（庄野義信／1931年）

『青山学院五十年史』（比屋根安定〔編〕／1932年）

『立教学院設立沿革誌』（立教学院八十年史編纂委員会〔編〕／1954年）

『日本プロテスタント・キリスト教史』（土肥昭夫／1980年）

『東京大学百年史』通史一（東京大学百年史編集委員会〔編〕／1984年）

『来日メソジスト宣教師事典　1873-1993年』（ジャン・Ｗ・クランメル／1996年）

『岐阜県教育史』史料編　近代一（岐阜県教育委員会〔編〕／1998年）

＊「慶應義塾體育會の沿革及現況」（慶應義塾學報　第弐號・1898年）

＊「あの日あの時」県高校野球５０年の歩み〈１〉〔創成期〕
（朝日新聞青森版・1968年05月14 日付）

今回は **明治10年代の学生野球** について 少し調べてみました

Did not a "still small voice" often tell him in the silence of cryptomeria forest, that he was sent to this earth with a mission, the fulfillment of which was to be of great consequence to his country and the world?

「静かなる細き聲」は、しばしば杉林の静寂のなかにて彼に語り、彼は此の地上に一つの使命をもつて遣されたること、それを完遂するは彼の祖國と世界とに重大な結果を及ぼすものであることを、彼に告げなかったであろうか。

"Representative Japanese" by Kanzo Uchimura (1908), p. 13

『代表的日本人』内村鑑三著 鈴木俊郎訳（岩波文庫・1941）25頁より

【参考資料 01】

A Japanese Baseball Player.

The national game has crossed the wild waste of waters and gained a very promising foothold in Japan, and the "Japs" can now steal the second bag, line one out into center field, abuse the umpire and cut third



TOMOZO SEKI.

base when he is looking in the opposite direction in true American style. The colleges have taken up the sport, and it is rapidly becoming popular throughout the kingdom.

The picture that appears in this article is of Tomozo Seki, manager of the Meiji Gakuin baseball club, and one of the best players in Japan. He is said to be a hard hitter and to be able to pitch a curve or catch one with an airy oriental grace.

日本の野球選手

このナショナルゲームは、荒涼とした海を越え日本で非常に有望な足場を獲得しました。「日本人たち」は、今や二塁に盗塁し、ひとつをセンターフィールドに並べて、審判をののしり、真のアメリカンスタイルで反対方向を見ているときに三塁を切ることができます。 大学は、このスポーツを取り上げており、王国全体で急速に人気が高まっています。

この記事に登場する写真は、明治学院の野球部監督で、日本屈指の選手である関友三さんです。 彼は、強打者であり、カーブを投げたり、さっそうとしたオリエンタルな優雅さでキャッチしたりできると言われています。

「ニューズジャーナル」紙（オハイオ州マンスフィールド）
1891 年 06 月 07 日·03 頁より

※関友三（1872-1905）については
並木張（ナミキ ミハル） 著
『「破戒」執筆の哀歌 : 藤村と佐久・佐久と文学』(千曲川文庫; 7) 1984.12
島崎藤村の学友関友三 p.83-88 なども参照してください



「島崎藤村の学友 関友三」（その二）並木張
「白金通信」147 号 1981 年 03 月 01 日 より

【参考資料 02】

Baseball in Japan.

Sokitaro Murayama is one of two Japanese pupils at the Western Pennsylvania university of Pittsburgh. His father is a nobleman with enough titles to fill a Saratoga trunk. Sokitaro takes great interest in athletics. He was captain of the baseball club of the American college at Tokio, which for a time held the championship of the league of eleven Japanese colleges. He tells the Pittsburgh Dispatch that baseball was introduced in Japan fifteen years ago by Prof. Strange, an American professor in the Japanese high academy at Tokio. Murayama was with the Western university football team on Thanksgiving day at Wilkinsburg, playing right tackle. He is also interested in wrestling. He is taking a course in electrical engineering, which he expects to apply in the coal mines of his benefactor, Hiraoka.

日本での野球

村山崎太郎はピッツバーグのウェスタン・ペンシルバニア大学に通うふたりの 日本人のうちのひとりです。彼の父親はサラトガのトランクを埋め尽くすほどの爵位を持つ貴族です。崎太郎は陸上競技に大変興味を持っています。彼は東京にあるアメリカン・カレッジ（明治学院）の野球部でキャプテンをつとめ、一時は日本の 11 大学のリーグ戦で優勝したこともあります。 彼は「ピッツバーグ・ディスパッチ」紙に、野球は 15 年前に東京にある日本の高等学院のアメリカ人教授ストレンジ教授によって日本に紹介されたと語っています。村山は感謝祭の日、ウィルキンスバーグで行われた西部の大学のフットボール・チームに参加して、右タックルとしてプレーしました。レスリングにも興味があります。

彼は電気工学のコースを受講しており、恩人である平岡（浩太郎）氏の炭鉱で応用することを期待しています。

「ウィチタ・デイリー・イーグル」紙（カンザス州ウィチタ）1893 年 02 月 12 日 04 頁より

※村山崎太郎（1872-1921）については
『東亜先覚志士記伝』 下（明治百年史叢書） 黒竜会 編 1966.06
「列傳」村山崎太郎 p.385 なども参照してください

【参考資料 03】

A JAPANESE BALL-TOSSER.

Chohei Shirasu, Catcher of the Meiji Gakuin Baseball Club.

It will be a matter of interest to know about Japanese first-class ball-players, whose batting and fielding records perhaps rank equally well with the outside ball-players of the United States, writes a Tokio (Japan) correspondent of the Sporting Times. As the first paper of this series, I must introduce to your readers Mr. Chohei Shirasu, the catcher of the Meiji Gakuin team.

Mr. C. Shirasu was born at Kobe, and is a well built young man of about seventeen years of age; is a member of the junior class ('92) in the Meiji Gakuin, where he is an active member of the Y. M. C. A. and of the Adelphic and Philo mathean literary society.

His first acquaintance with the game of baseball is said to have been made about four years ago, just after he entered the preparatory department of the Meiji Gakuin. He is well-known among both foreign and Japanese friends for his great ability in stopping very hot grounders, sure catching of swift and "heavy" balls delivered by the pitcher, smart and quick understanding of the pitcher's sign (for which one of the local newspapers at Yokohama port termed him one of the smartest catchers they have ever met) and for his famous one-hand catches on the fly. He caught always Mr. Macnair's pitched ball, and they made themselves an inseparable pair, which struck terror into every opposing team. His style of play had improved very rapidly compared with any other ball-player in Japan. Not only is he excellent in fielding, but his occasional display of two or three baggers made him known as the best experienced ball-player that was ever produced in this land. He is the catcher,

〔次頁につづく〕

日本の野球選手

白洲長平 明治学院野球部 捕手

日本の一流球児について知ることは、興味深いことです。その打撃やフィールディングの記録は、おそらくアメリカの外人選手に匹敵する、と「スポーティングタイムズ」の東京(日本)特派員は書いています。この連載の第 1 弾として、明治学院のキャッチャー白洲長平氏（1873 年 08 月 05 日生まれ）を読者の皆様にご紹介します。

白洲氏は神戸の生まれで、17 歳の好青年です。明治学院の 3 年生（92 年）で YMCA およびアデルフィーとフィロマティアン文学協会の活発なメンバーです。

野球との出会いは、4 年前、明治学院の予科に入学した直後と言われています。彼は非常に強烈なグラウンダーを止める能力に優れ、ピッチャーが投げる素早くて「重い」ボールを確実にキャッチし、ピッチャーのサインを賢く素早く理解し（横浜のある地方紙は、彼をこれまでにであった最も賢い捕手と呼びました)、有名なワンハンドキャッチで外国人にも日本人にもよく知られています。彼はマクネア氏の投げるボールを常にキャッチし、ふたりは切っても切れないコンビとなり、相手チームを恐怖におとしいれました。彼のプレースタイルは、日本のどの球児と比べても、非常に急速に向上しました。フィールディングに優れているだけでなく、しばしば打つ二塁打や三塁打により、この土地で生まれた最高の経験豊富な野球選手として知られるようになりました。正式には捕手ですが……明治学院には信頼できるショートがいないために、そのポジションは、しばしばこの若者によって占められました。彼にはふたりの兄がいます。長兄の白洲（文平 1869 年生まれ）は 1 、 2 年前にはハーバード大学にいましたが、今はドイツにいます。次兄（純平 1871 年生まれ）も野球選手で、二塁手としての名声は大学リーグで広く知られています。

添付の写真は「スポーティングタイムズ」のために撮影されたもので、もちろん彼の最新のものです。彼のユニフォームは、明治学院クラブが新たに採用したユニフォームで、白いフランネルパンツ、胸に黒い頭文字 M がついた白いリネンシャツ、ニュージャージー州のプリンストン大学への共感の気持ちを表すために最近採用されたオレンジと黒のストッキングで構成されています。

「アーガスリーダ」紙　（サウスダコタ州スーフォールズ）

1891 年 03 月 05 日-03 頁より

※「フィロマティアン」はギリシャ語の哲学に由来し、
「学習の愛好家」を意味します。
フィロマティアン協会のモットーは Sic itur ad astra
(ラテン語で「このように私たちは星に進む」という意味です)

※白洲長平（1873-1930）については
中嶋久萬吉（ナカジマ クマキチ）著
『政界財界五十年』1951.04
第三章 明治學院在學時代 二 我國野球界の祖白洲長平　p. 23-24 なども
参照してください



CHOHEI SHIRASU.

officially, but because the Meiji Gakuin team has no reliable short stop, this position was often occupied by this young man. He has two elder brothers, the eldest, Shirasu, was at Harvard one or two years ago, and is in Germany now. The second eldest is a ball-player also, whose reputation as a second baseman is widely known among the college league men,

The accompanying photograph was taken for the Sporting Times, and is, of course, his latest. His uniform is one newly adopted by the Meiji Gakuin club, consisting of white flannel pants, white linen shirt with a black initial letter M on the breast and stockings of the orange and black, which colors have been adopted recently to express our sympathy with the Princeton university, of New Jersey.

A JAPANSE BALL-TOSSER.

Chohei Shirasu, Catcher of the Meiji Gakuin Baseball Clab.

It will be a matter of interest to know about Japanes first-class ball-players, whose batting and fielding records perhaps rank equally well with the outside ball-players of the United States, writes a Tokio (Japan) Correspondent of the Sporting Times. As the first paper of this series, I must introduce to your readers Mr. Chohei Shirasu, the catcher of the Meiji Gakuin team.

Mr. C. Shirasu was born at Kobe, and is a wellbuiit young man of about seven-teen years of age; is a member of the junior class ('92) in the Meiji Gakuin, where he is an active member of the Y. M. C. A. and of the Adelphie and Philomathean literary Society.

His first acquaintance with the game of baseball is said to have been made about four years ago, just after he entered the preparatory department of the Meiji Gakuin. He is well-known among both foreign and Japanese friends for his great ability in stopping very hot grounders, sure catching of swift and "heavy" balls delivered by the pitcher, smart and quick understanding of the pitcher's sign (for which one of the local newspapers at Yokohama port termed him one of the smartest catchers they have ever met) and for his famous one-hand catches on the fly. He caught always Mr. Macnair's pitched ball, and they made themselves an inseparable pair, which struck terror into every opposing team. His style of play had improved very rapidly compared with any other ball-player in Japan. Not only is he excellent in fielding, but his occasional display of two or three baggers made him known as the best experienced ball-player that was ever produced in this land. He is the catcher, officially, but because the Meiji Gakuin team has no reliable short stop, this position was often occupied by this young man. He has two elder brothers, the eldest, Shirasu, was at Harvard one or two years ago, and is in Germany now. The second eldest is a ball-player also, whose reputation as a second baseman is widely known among the college league men,

The accompanying photograph was taken for the Sporting times, and is, of course, his latest. His uniform is one newly adopted by the Meiji Gakuin club, consisting of white flannel pants, white linen shirt with a black initial letter M on the breast and stockings of the orange and black, which colors have been adopted recently to express our sympathy with the Princeton university, of New Jersey.

Argus-Leader（Sioux Falls, South Dakota）

05 Mar 1891, Thu・Page 3

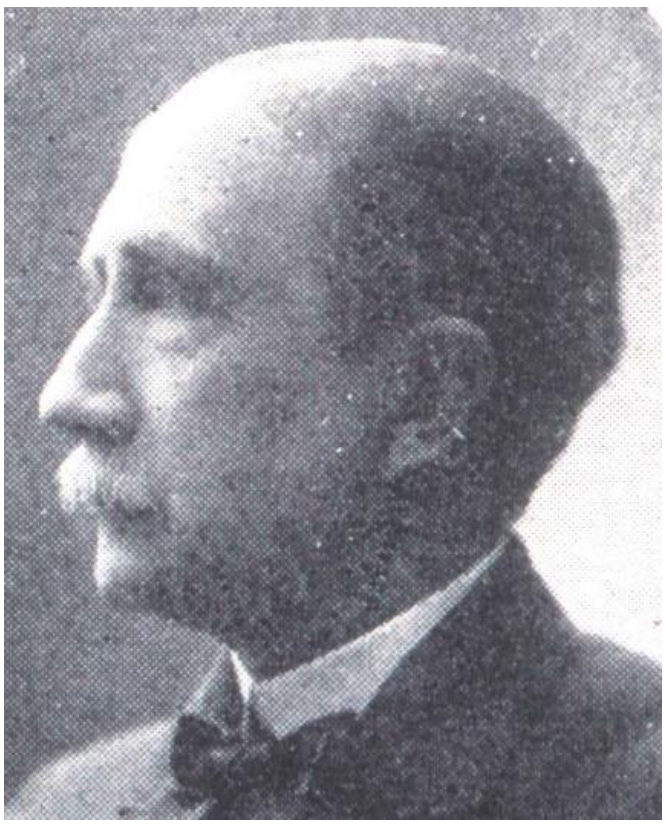
【参考資料 04】

BASEBALL has been introduced in Japan, and is now rapidly becoming a popular outdoor sport. The Japs, however, have not got the game down to quite such a scientific point as the Americans. Some time since a game was played between a Japanese club and a team of American clerks, in which considerable amusement was afforded those who witnessed it by one of the Yankees running out of the line of base and the entire Japanese nine joining in hot pursuit and chasing him into a rice field, where they triumphantly put him out.

野球は日本にも導入され、今ではアウトドアスポーツとして急速に普及している。しかし、日本人はアメリカ人ほど科学的なところまでゲームを理解していない。しばらく前に、日本のクラブとアメリカの事務員チームの間で試合がおこなわれたが、ヤンキースの 1 人がベースラインから飛び出すと、日本の 9 人全員が猛追して　彼を田んぼまで追いかけ、そこで見事に彼をアウトにした。　「エセックス カントリー ヘラルド」紙（ヴァージニア州ギルドホール）
1886（明治 19）年 09 月 24 日, 01 頁より

インブリー事件の幻影

1890(明治23)年の一高野球



ウイリアム・M・インブリー
(1845-1928)



1890(明治 23)年頃の第一高等中学校(のちの一高)チームの選手たち

平岡凞の**新橋倶楽部**が解散したのち、明治20年代(1887-1896)に入ると、日本のベースボールは新たな時代をむかえます。

この時期のはじめ頃、東京では様々な学校の野球好きがあつまり、ゆるやかな同好会をつくっていました。

代表的なのは、**鍋島直映**(当時、**学習院**に在学中)たちが結成した**溜池倶楽部**です。

また、**明治学院**の**白金倶楽部**や**農科大学**(今の**東京大学**[**農学部**])など、学校ごとに選手がまとまって試合をおこなうこともさかんになりました。

そのなかで**第一高等中学校**チーム(元の**東京大学予備門**。のちの**第一高等学校**。以下は、**一高**と略記)は、「**インブリー事件**」という不祥事から奮起して、日本の野球界へ長年にわたって大きな影響をおよぼすようになります。

今回は、その事件がおこったゲームの経過もまじえ、「**一高時代**」といわれた頃の初期の様子を調べてみました。

インブリー事件とは

この事件は、1890(明治23)年05月17日におこった**ウイリアム・M・インブリー**(その頃の**明治学院**の教師。当時46歳)への暴行傷害事件です。

加害者は、20歳前後の学生たち。

現場は、東京・本郷にあった**一高**の校庭でした。

その日、**一高**では**明治学院**との野球の試合がおこなわれています。ゲームは、**平岡寅之助**が審判をつとめ、午後一時にはじまりました。**一高**は、投手の**岩岡保作**が右ヒジを痛めていたことや守備の乱れから、三回までに３対０と負けていました。

一高は、四回にも一点を追加され、塁上には、ふたりのランナーがいました。

そして、次の打者の打球をショート・**平佐邦彦**がひろい、一塁へ送球します。しかし、それが悪送球となり、一塁の**塩屋益次郎**が後逸しました。

三回にも同様なことがあったため、**塩屋**は**平佐**を非難し、そらしたボールを追いかけません。

「しっかり投げろ」とか「指を痛めているんだぞ」などと、叫んだのかもしれません。その間に、ふたりの　走者が本塁をかけぬけました。

明治学院は、合計６点となり、無得点の**一高**は、大きなリードを奪われました。

まわりで応援していた多くの**一高生**たちも、自校の劣勢で次第に不穏な雰囲気となります。

愛校心の塊である彼らは、**平佐**や**塩屋**をやめさせろなどと声を荒げ、場内は騒然とした空気につつまれました。

そして、**平佐**は、ライトの選手と守備位置を交代させられます。

そのようなとき、ひとりの背の高い外国人が裏門脇の垣をこえて校内へ入ってきました。それが、**明治学院**の教師**インブリー**でした。

この日、彼は野球の試合をみるために築地の自宅をでて、午後一時すぎに同僚教師**Ｊ・Ｍ・アメルマン**、**Ｇ・Ｗ・ノックス**の三人で、本郷までやってきました(そのうち**ノックス**は自転車を使用)。

彼らは、周辺の事情がよくわからなかったので、**一高**の生け垣にそって進んでいました。

他のふたりは、そのまま門の方へとむかいましたが、**インブリー**だけは、そわそわと垣の間からグラウンドの様子をうかがいながら歩いていきます。

そして、彼はアメリカでの習慣にしたがい、悪意もなく垣を乗りこえて校内へ入っていきました。

もちろん、そこには今の整備された球場のような客席もフェンスもありません。

インブリーは、知らず知らずのうちに、外野手の守備位置の近くにまで足を踏み入れてしまったようです。

自校の敗色が濃厚なところへ、見知らぬ外国人が許可もないのに試合中のグラウンドに侵入してきました。

その不満から十数人の**一高生**たちが、彼を激しくとがめようとかけよります。

そのなかのひとりは、ひどく興奮した調子で**インブリー**を問いつめ平手でなぐり、さらに両手首をつかんで腹をけろうとしました。

また、別の誰かは、**インブリー**にむかって石のようなものを投げつけます。

インブリーは、数十人の学生たちが入り乱れる騒ぎのなかで顔面を傷つけられ流血までしたようです。

インブリーは、同僚や**一高**の教師たちに助けられました。

そして、この混乱とゲーム中にも負傷者がでたため、試合は午後の四時前に中止となりました。これが、**インブリー事件**の概要です。

事件の背景

この騒動は、翌日から新聞でも取りあげられ、人々の関心をあつめました。

とくに横浜のいくつかの英字新聞は、日本のエリート青年たちの乱暴な行為を厳しい論調で報じました。

というのは、**インブリー事件**のおこる一ヵ月半ほど前から日本人による外国人殺傷事件が二件も発生していたからです。

そのひとつは、04月04日に発生した「**ラージ事件**」です。

それは、あるキリスト教系の女学校の女性校長宅へ二人組の強盗が押し入り、夫の**Ｔ・Ａ・ラージ**氏を殺し、彼女にも重傷をおわせるという事件でした。犯人は、10数年後に時効をすぎてから発見されています。

もうひとつは、05月07日の「**サマーズ事件**」です。

これは、築地居留地に住むイギリス人**ジェームス・サマーズ**が、皇太后（先代の天皇の正妻[皇后]のこと）に不敬であったとして、警備の者に鎗で傷つけられた事件です。

当局が調べた結果、それは過剰すぎる警護にも問題がありました。

けれども、**サマーズ**氏の自宅へは、その後も不敬を非難する脅迫がつづき、彼は05月16日に日本を離れています。

もちろん、**インブリー事件**もふくめて、これらの事件が相互に関連していたわけではありません。

一高での騒動にしても、たまたま野球の試合中におきたトラブルとも言えるでしょう。

しかし、**インブリー事件**は、西洋に対する日本の態度が「模倣」から「対立」へ変わっていく象徴的な出来事であったとも思われます。

そのことについて、少し考えてみましょう。

「和魂洋才」

明治20年代(1887-1896)頃の日本では、「和魂洋才」という言葉がよく用いられていました。

大和魂(日本の精神)で西洋の科学・技術をつかうという意味です。

西洋の科学・技術とは、進んだ学問や圧倒的な軍事力などのことです。

それは、蒸気機関のように多くが目に見える形のあるものでした。

それでは、日本の精神とは何でしょうか。

そもそも「大和魂」という言葉は、今から約千年も昔、平安時代に書かれた『**源氏物語**』のなかに初めてあらわれています。

その当時は、良識のある判断という意味でつかわれていました。

それが、江戸時代の末頃から中国(当時の国名では清)の「儒教的な道徳」と結びついた日本人の心の状態をさして「大和魂」と言うようになっていきます。

また、「和魂洋才」は、「和魂漢才」をもとにした言葉でした。

「漢才」とは、中国文化のことです。日本にとって江戸時代までは、中国こそ学ぶべき先進国でした。

それが、明治時代となって、欧米の科学・技術にかわったのです。

そして、**インブリー事件**が発生した1890年頃の「大和魂」には、『論語』を中心とする儒教など「和魂漢才」の「漢才」も含まれていました。

すなわち、外来の文化であることを意識させないほど日本に受け入れられた精神は、すべて「大和魂」となり得たのです。

たとえて言えば、「コップ」の中身が水でも、それに酒を加えても、「コップ」は「コップ」と呼ぶように、その中身が何であれ「大和魂」は、「大和魂」と呼ばれるものでした。

このように「大和魂」とは、時代によっても移り変る日本人の心の働きのことです。

それでは、その当時、なぜ日本の精神ということが強調されたのでしょうか。

その頃の日本は、文明開化の期待と共に強い欧米との関係だけを追い続けていました。

けれども、また一方では、西洋文明の圧迫から少しでも逃れたいという弱い気持ちもありました。

それらが、安易に東洋の精神性に価値を求め「大和魂」という心地よい叫びとなり、日本中にひろがっていたのです。

明治時代の文豪・**夏目漱石**は、西洋への強い劣等感の裏返しの表現こそ当時の「大和魂」であったと述べています。

インブリー事件をおこした**一高生**たちも、無意識のうちに、その頃の「大和魂」を身につけていたと思われます。

事件の終止符

さて、**インブリー事件**は、新聞でも報道され世間の注目をあつめました。

一部の学生たちは、「大和魂」を発揮したのだと得意揚々でしたが、事態は予想外に悪化します。

横浜の英字新聞などが、その当時の不平等な条約を改正する議論に関連して報じたこともあって、外交上の問題にも発展しそうになりました。

そのため、政府は**一高**に対し**インブリー事件**への善処を求めます。

そこで、**一高**では数回の下交渉を経て、その試合の投手・**岩岡**やファーストの**塩屋**などが、舎監(寄宿舎の監督)の**松田為常**につれられて**インブリー**へ謝罪するため彼の自宅を訪ねました。

一高生たちをむかえた**インブリー**は、温厚で誠実な紳士でした。

自国との習慣の違いを知らなかった自分の非も認めて、学生たちを許したのです。こうして、事件は一応の終止符をうちました。

事件の原因をめぐって

ところで、その頃の**一高**の規則では、垣からの出入りは、禁止されていました。

そのため、**インブリー事件**の原因について「当時の**一高生**たちは、一般社会と校内とを分ける神聖な生け垣が、不当に乗りこえられたこと自体を問題にした」とも言われています。

しかし、**一高**側が優勢に試合を進めていたとしても、この事件は発生したのでしょうか。

調べてみると、そのゲームに出場した**平佐**でさえも、当時の**一高生**たちが普段は平気で生け垣から入っていた、と回想しています。

規則上は、禁止されていましたが、垣からの出入りは黙認されていたようです。

つまり、この事件は、劣勢となったチームへのいらだちが、試合中のグラウンドに侵入した見知らぬ外国人への暴行をまねいたのだと考えられます。

もしも、ゲームの流れが**一高**側に有利であったなら、この事件はおこらなかった可能性が強いと思われます。

なお、**インブリー**を傷つけた直接の人物については、今でも様々な憶測があります。

現場にいた人たちの間でも、投手の**岩岡**が瓦のかけらでなぐったとか、**塩屋**が石を投げた、など様々な話がのこされています。

けれども、今では誰にも本当のことはわかりません。

ただ、この試合に出場した**一高**の選手たちは、事件をかなり深刻にうけとめていたようです。

たとえば、のちに**九州帝国大学**の教授をつとめた**岩岡**は、**一高**の同窓会の席などでも、決して昔の野球の話をしませんでした。

それは、**インブリー事件**について深い自責の念をもっていたからではないか、と言われています。（**君島一郎**『日本野球創生記』より）

猛練習と三大試合

さて、事件の当日にゲームを観ていた**正岡子規**（**一高**に在学中）は、その試合を「其まけ方見苦しき至り也」と評しています。

チームワークが、乱れた様子を指摘する率直な感想でしょう。

事実上の大敗をした**ベースボール部**（その頃は、まだ**野球部**と言いません）のメンバーは、自分たちの技術や精神の未熟さを思い知らされました。

明治学院への雪辱を誓った選手たちは、**岩岡**や**平佐**などを送りだし、新学年（当時は欧米式に九月）となっても練習にはげみます。

けれども、彼らのめざしたベースボールは、もはや単なる娯楽ではありません。

わきでる気持ちをボールにたくし、どんな相手にも一致団結して挑むための精神的な鍛練。

それが、**一高**の伝統的な猛練習のはじまりでした。

個人の技術より、チームワークを重視する一高野球の原点は、**インブリー事件**の反省から生まれたのです。

のちに一高の練習は、上野の杜にカラスの鳴かない日はあるが、校庭に選手の姿のみえない日はない、と言われるようになります。

そして、**インブリー事件**から約半年がすぎた11月08日、**一高**は**明治学院**と、自校の校庭で再び試合をおこないます。

これが、いわゆる**一高**の初期の三大試合の最初のゲームです。

そして、この試合の選手たちが、**一高**の初期の黄金時代を築いていきます。

(投手) 福　島　金　馬 (ふくしま・きんま　18歳　佐賀県)
(捕手) 伊　木　常　誠 (いき・つねなか　18歳　鹿児島県)
(一塁) 山　本　松　雄 (やまもと・まつお　16歳　東京府)
(二塁) 中　馬　庚　 (ちゅうまん・かなえ　20歳　鹿児島県)
(三塁) 恩　田　銅　吉 (おんだ・どうきち　17歳　大分県)
(遊撃) 伴　　宣　 (ばん・よろし　18歳　福井県)
(左翼) 高　田　源五郎 (たかだ・げんごろう　22歳　福井県)
(中堅) 小　林　政　吉 (こばやし・まさきち　22歳　広島県)
(右翼) 塩　屋　益次郎 (えんや・ますじろう　21歳　石川県)

試合は、26対２で**一高**の大勝利。それは、誰もが驚く結果でした。
選手たちは、喜びのあまり思わず泣きだしてしまったそうです。

そして、**一高**の勝利は、東京周辺の学生たちにも意外でした。
すぐに各学校の精鋭たちがあつまる**溜池倶楽部**から、**一高**へ試合の申し込みがきます。

ゲームは、およそ二週間後の 11月23日に、**一高**の校庭でおこなわれています。

当時の**溜池倶楽部**には、**町田一平**（**農科大学**）や**黒田八郎**（**慶応義塾**）、**志岐三次**（**高等商業**、今の**一橋大学**。氏名の読み方は推定）などの強者たちがいました。

誰もが**溜池倶楽部**の勝利を信じていましたが、結果は、32対５で**一高**の勝ちとなります。

そこで、**明治学院**と**溜池倶楽部**は、**一高**に勝つために協力して、冬のあいだも練習に取りくみました。
農科大学の**町田**は**明治学院**の**白洲長平**とコンビをくみ、**マクネア**（**明治学院**の教師）にカーブの投げ方などのコーチをうけています。

そして、年があけた 1891(明治24)年の 04月04日、**一高**は**駒場**のグラウンドで**明治学院**と**溜池倶楽部**の連合チームと試合をします。

一高は左翼・**高田源五郎**が病気のために、**山口金太郎**とかわったほかは、前回と同じメンバーです。

連合チームでは、**町田**と**白洲**のバッテリーに加えて、**大久保駿熊**（**農科大学**）、**久保榮吉**（**慶応義塾**）、**濱島福二**（**明治学院**）などの名手たちが出場していました。

しかし、ゲームは10対４。またもや、一高が凱歌をあげました。

一高は、いずれの試合でも、優れたチームワークによって相手を圧倒したのです。

そして、この三試合の勝利が、10数年にもおよぶ「**一高時代**」の幕開けとなったのです。

その頃の新聞などにも報道され、日本の野球史に永く記憶されるインブリー事件も元はといえば、小さな出来事に端を発しています。

そして、当時の日本は遥かなる西洋への憧れと共に、その幻影におびえてもいました。

恐れは、次第に大きくなって、やがて怒りへとかわっていきます。

影は、物の形をうつします。

しかも、光が遠ざかるほどに、その影は大きくなっていきます。

◎主な参考資料

『第一高等中學校一覧』自明治23年至明治24年（第一高等中學校〔編纂〕／1891年）

『現代人名辞典』第二版（古林亀治郎〔編〕／1912年）

『鹽屋工學士追懐録』（岡本桂次郎〔編輯〕／1929年）

『野球史』（浦岡偉太郎〔編集〕・中沢不二雄〔監修〕／1957年）

『源氏物語』（二）岩波文庫（紫式部［著］山岸徳平〔校注〕／1965年）

『和魂洋才の系譜』— 内と外からの明治日本 —（平川祐弘／1971年）

『明治学院百年史資料集』【第１集】（徳永清〔編集代表〕／1975年）

『和魂漢才説』増補版（加藤仁平／1987年）

『漱石全集』第25巻（夏目金之助／岩波書店 1996年）

『鍋島直映公傳』（財団法人鍋島報效会〔発行〕／2000年）

＊「外國人負傷事件」（朝野新聞・1890年05月22日付）

＊「〇インブリー教師の負傷」（きりすとけうしんぶん・1890年05月23日付）

＊「今昔球界座談の夕」（鹿児島新聞・1940年01月11日から 07回連載）

今回は **インブリー事件** について少し調べてみました

Violence like water, when it has an outlet, rushes forward furiously with an overwhelming force.

暴力は水に似ていて、はけ口があれば、そこから大変な勢いで流れ出ていきます。

ガンディー(1869-1948)の言葉　「ハリジャン」紙 1939(昭和14)年03月21日付

『ガンディーの言葉』マハートマ・ガンディー著　鳥居千代香 訳（2011年）より

【参考資料01】

○外國人負傷事件　先頃高等中學校構内に於て同校生徒は明治學院の生徒と組合にてベース、ボールを催ふしたる節明治學院の外國教師とかゞ同校の牆を越へて闖入せしを其場に居合せたる多數の生徒は見咎め彼是問答中何者にや右外國人の面部に石片を投付たる者ありて之が爲め微傷を負へるも元と自分の仕落より斯る騒を惹起したる事なりとて當人も更に意に介せざる趣なり然るに右の事件は愈〻公けの沙汰となり公使館より我が外務大臣に向ひ掛合ありし如く噂する者もあれど外務省にては從前ならば知らず當今は斯かる些末の事には一切干渉せず假令外國人若しくは公使館より照會あるもツマらぬ事をば餘り熱心に引受けざるを以て外國人等も其意を了し昨今は成るべく外務省迄持出さずして事を濟す方なれば今回の事柄に於ても今に何等の申出なき由尤も學校にては生徒を取調べたる上何分の處置を爲すべしと云へば是れにて何の面倒もなく落着するならんか

「朝野新聞」１８９０（明治23）年05月22日03面より

【参考資料02】

○インブリー教師の負傷　已に世上の新聞にも登載せられたる事なるが明治學院神學部教師インブリー氏が高等中學校生徒のために亂打せられしとの事に付き逐一其の事情を問ひ糺せしに去十七日午後一時過 高等中學校構内に於て同校生徒と明治學院生徒とベイスボールの競爭をなせし時インブリー氏もアメルマン、ノツクスの二氏と共に其競爭を觀覽せんとて其門に近きけるか時やゝ遲れて場内は早や競爭最中と見受けしかば同行のノツクス氏は獨り乘用する所の自轉車を馳せて正門に向ひ去りアメルマン、インブリー二氏は徒行してありけるり心少しくあせりを生せしに折りしも傍への門墻に人の足跡存するを見て定めて往來を許せる所あらんと早計して何の思慮も無く馳せ入りしを同校の學生等は之を見て其不法を憤り之を亂打せしにぞ同氏は決してさる怪しかるものにあらずとの事情を辨解し明治學院の教師なることを屢々告げて漸く事止みたる譯なりと云ふ其結局如何は未だ聞くことを得ざれども其始末の次第は如此と聞くがまくに記しおけり

「基督教新聞」１８９０(明治23)年05月23日04頁より

【参考資料 03】

When the Oceanic sailed for Japan it was twelve days after the outrage committed by the students of the Koto School upon Dr. Imbrie, yet the authorities had not taken any steps to find out the parties nor to punish any one. The Japan Gazette says: "There are two things foreigners will have to avoid for the future--imperial processions and base-ball matches played by educated (save the word) Japanese such as the students of the Koto Chiu-gakko, for, if our information is correct, they are not only in danger of violence but of violence which may go unpunished, and that means unchecked. If it be true that the Imbrie affair is ended without the infliction of chastisement, the authorities are guilty of an exceedingly culpable failure of duty which will not pass unnoted; and if that failure has been aided by merciful but misplaced intervention, those who have interceded have also failed in their duty to their fellows, and we do not hesitate to tell them so."

The excitement following the depredations of the students of Tokio has decreased a little since they apologized to Rev. W. Imbriey, the New Jersey missionary, who was cut and bruised by them two weeks ago. That gentleman has entirely recovered and it seems that nothing more is to be heard of the matter. The foreigners feel outraged that the culprits were not severely punished. As a result of their escape from anything more than a simple apology, the Soshi are becoming more hold day by day, and the insults offered to foreigners are increasing. Settlers coming from Yokohama are armed with revolvers fearing that there may be some show of violence. The Government seems to be doing all in its power to deal with the students as a class, but no incivility can be offered them as individuals, because of their desperate character.

THE MORNING CALL, SAN FRANCISCO, SUNDAY, JUNE 15. 1890　p.02

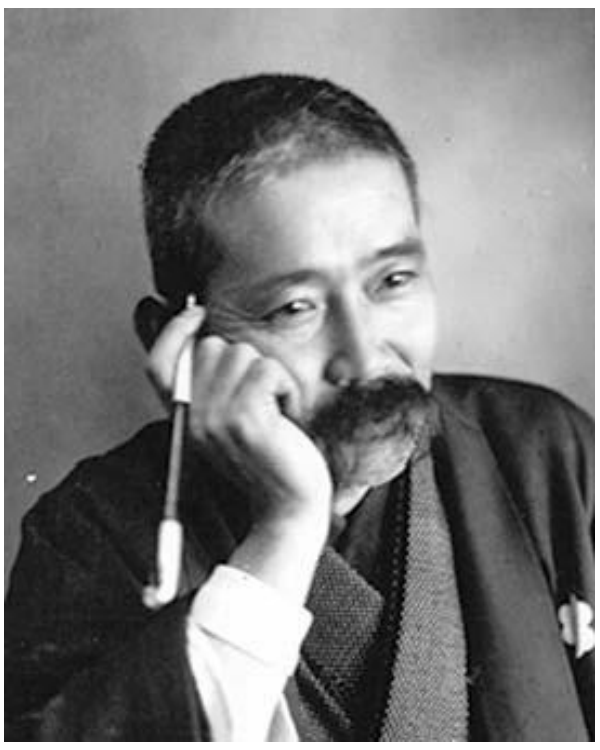
オーシャニック号が日本に向けて出航したのは、高等学校の生徒たちがインブリー博士に対して怒りを爆発させてから 12 日後のことであったが、当局は当事者を見つけるための措置も誰かを罰するための措置も何も講じていなかった。「ジャパン・ガゼット」紙は次のように述べている。「外国人が今後避けるべきことは 2 つある。帝国の行進と、高等中学校の生徒のような教育を受けた(言葉を除いて)日本人が行う野球の試合である。我々の情報が正しければ、彼らは暴力の危険にさらされているだけでなく、罰せられないかもしれない暴力の危険にさらされており、それはチェックされないことを意味する。もしインブリー事件が懲罰を受けることなく終結したことが事実であれば、当局は無視できない極めて過失のある義務の不履行の罪を犯している。もしその不履行が慈悲深いが見当違いの介入によって助長されたのであれば、仲裁した者たちも仲間に対する義務を怠ったのであり、我々は彼らにそう伝えることをためらわない。」

東京の学生たちが略奪した後の興奮は、二週間前に彼らに切られて打撲傷を負ったニュージャージー州の宣教師 W・インブリー牧師に謝罪してから少し減った。その紳士は完全に回復しており、この件についてはこれ以上何も聞くことがないようだ。外国人たちは、犯人たちが厳しく罰せられなかったことに憤慨している。彼らが単なる謝罪以上のものから逃れた結果、壮士たちは日増しに強くなり、外国人に与えられる侮辱が増えている。横浜からやってくる入植者たちは、暴力の兆候があるのではないかと恐れてリボルバーで武装している。政府は学生たちをクラスとして扱うために全力を尽くしているようだが、彼らの絶望的な性格のために、個人として無礼を提供することはできない。

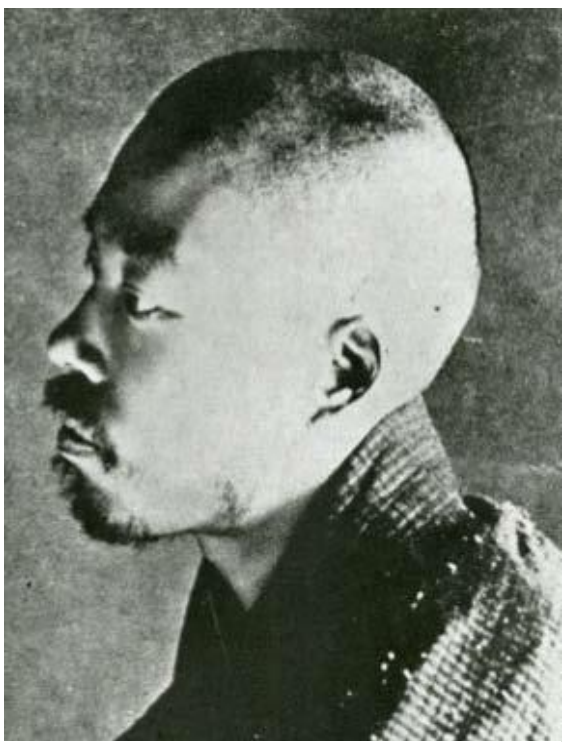
「モーニングコール」紙　（サンフランシスコ　1890 年 06 月 15 日　日曜日　02 頁）より

正岡子規と中馬庚

1894(明治27)年の「野球」命名



中馬庚（1870-1932）



正岡子規（1867-1902）

1890(明治23)年の**インブリー事件**は、**一高**の**ベースボール部**だけでなく、日本の野球史にも残る大きなトラブルでした。

けれども、その後の**一高**は、不祥事の反省から再出発し、十数年におよぶ全盛期を築いていきます。

「**野球**」というベースボールの訳語がつくられたのも、その時代の1894(明治27)年でした。

考案者は、**一高**の元選手で、教育者としても知られる**中馬庚**です。

しかし、**中馬**が思いつく数年前に「**野球**(ノボール・のぼると読む)」という雅号(ペンネームのようなもの)で、友人へ手紙を書いていた人がいます。

明治時代の俳句や短歌に大きな功績をのこす**正岡子規**です。

子規は、1890(明治23)年に彼の幼名・**升**をもじって「**野球**」という文字の組み合わせをつくっていました。

今回は、「**野球**」という言葉にも、おおきくかかわっていた**正岡子規**と**中馬庚**が、ベースボールと共に歩んだ人生の道程を調べてみました。

「野球」という言葉

「青井、よい訳をみつけたぞ。

Ball-Play in the field―野球はどうだ」

1894(明治27)年の秋、ある晩のことです。

その当時、**一高**の選手だった**青井鉞男**(通称。本名は、よきお)が、寄宿舎の片すみで素振りの練習をしていると、**中馬庚**が息をはずませながらやってきて、前記のような話をしました。

「野球」という言葉が、生まれたときの有名なエピソードです。

その頃、**中馬**は 24歳。**東京帝国大学**(今の**東京大学**)で、歴史を専攻する学生でした。

その年(1894年)、**中馬**は後輩に頼まれて、**一高ベースボール部**の移りかわりをまとめる「部史」を書いていました。

そのなかで、彼は野球用語の翻訳にも様々な工夫をしています。

しかし、何よりも「ベースボール」自体の訳語には、よい言葉がみつからず苦労していました。

そのようなとき、思いついたのが「野球」という言葉です。

それは、**中馬**が「広い野外での球技」という意味で考えた「ベースボール」の訳語でした。

素朴な響きの語感のなかに、開放的なゲームの雰囲気があらわされています。

なお、**中馬**が「ベースボール」の訳語を考えた 1894(明治27)年の秋頃、日本は中国との戦争(**日清戦争**)の真っ最中でした。

「野球」という言葉は、そんな時代に誕生しています。

＊　＊　＊

一方、その頃の**正岡子規**(27歳)は、「**日本新聞社**」の社員でした。

中国の激戦地から送られてくる原稿を読みながら、自分も従軍記者になりたいと強く思っていました。

もちろん、**中馬**が「ベースボール」の訳語のことで頭を痛めていたとは、知るはずもありません。

けれども、**子規**は無類の野球好きでした。

それは、彼が学生時代から

―春風やまりを投げたき草の原

などの句をつくっていることからもうかがわれます。

不思議なことに**子規**と**中馬**は、それぞれの発想で「野球」ということを考えていました。

ふたりの生い立ち

正岡子規は、1867（慶応03）年の 10月08日（旧暦の 09月17日）に、今の**愛媛県松山市**で生まれました。

本名は、**常規**。彼は、04歳で父を亡くしたため、母と母方の親戚の援助をうけ成長します。そして、15歳で上京。

一年あまりの受験勉強を経て、1884年（17歳の年）に**東京大学予備門**（のちの**一高**）の学生となります。

子規は、親戚のひとりが**新橋倶楽部**の**平岡**家と親しかったことから野球を覚えました。

そして、1888年（21歳の年）頃は「ベースボールのみに耽りバット一本球一個を生命の如く」思っていたと後年の回想で述べています。

けれども、彼の健康は少しずつ蝕まれ、不治の病（結核）を発病していました。

子規は、1889（明治22）年05月09 日、まだ 21歳のときに初めて大量の血を吐きました。

そして、次の日の夜、「ほととぎす」を題材にして 50近くの俳句をつくります。

―卯の花の散るまで鳴くか子規

彼は、自分が長くは生きられないと実感し、それでも文学に生きようと決意しました。

その後、幸いにも病状は悪化せず、上級の**東京帝国大学**へすすむことができます。

けれども、彼のめざす文学は、権威的な大学のなかでは実現することが難しかったようです。

そして、周囲の反対にもかかわらず、25歳のときに退学を決意して「**日本新聞社**」へ入社します。

「**日本新聞社**」での**子規**は、俳句や短歌の選者となり、自作の句や随筆も発表するなど文学者として認められていきます。

しかし、1894(明治27)年に日清戦争が勃発すると、彼は従軍記者になりたいと考えはじめていました。

それは、限りある自分の命をみつめた**子規**の、やむにやまれぬ切実な思いでした。

＊　＊　＊

中馬庚は、1870年の 03 月 10 日(旧暦・02 月 09 日)に、**今藤惟宏**の次男として、今の**鹿児島県鹿児島市**で生まれました。

そして、四歳のとき、**中馬諸英**の養子となり、**中馬**家をつぎます。彼の生家と養家は、どちらも代々続く地元の著名な家柄でした。

しかし、**中馬**は、豪快で親しみやすい、庶民的な人です。

誰とでも気軽に会話して、つつみこむような愛情で人に接する―彼は、そういう人物でした。

そんな**中馬**の人柄には、**西郷隆盛**（明治維新の功労者）が大きく影響しています。

彼は、13歳から勇敢さと思いやりをかねそなえた**西郷隆盛**を理想とする学校（**三州義塾**）で学んでいました。

そして、17歳で**三州義塾**を卒業した**中馬庚**は、1888(明治21)年に**第一高等中学校**（のちの**一高**）へ入学します。

一高での**中馬**は、テニスや陸上競技・射撃など、様々なスポーツでも注目されました。

とくに**ベースボール部**では、主力選手(二塁手・一番打者)として、初期の全盛時代を築いていきます。

また、**中馬**は、校友会の雑誌に**ベースボール部**の活動を報告する文章も書いています。

彼は、スポーツだけでなく、文筆でもリーダー的な存在でした。

彼の書いた記事で、野球が好きになる学生も多かったようです。

中馬は、1893(明治26)年に**一高**を卒業、**東京帝国大学**へ進学して、翌年01月から「**ベースボール部史**」を書きはじめていました。

訳語の移りかわり

ここで、**中馬**が「野球」という言葉を思いつく以前の訳語について調べてみましょう。

玉遊ビ　これまでに知られている最も古い訳語です。1871(明治04)年に発行された辞書（『**大正増補　和譯英辞林**』別名『**薩摩辞書**』再版)のなかで「Base’-ball」を「玉遊ビ」と訳しました。

打球おにごっこ　1885(明治18)年に出版されたスポーツの解説書（『**西洋戸外遊戯法**』）で用いられた訳語です。

球投げ　ヘボン式ローマ字で有名な**Ｊ・Ｃ・ヘップバーン**の辞書（『**改正増補　和英英和　語林集成**』1886年）では、「Tamanage」と訳されています。

また、明治20年代(1887-1896)の初期には、「Base」を直訳した「**底球**」や「**基球**」・「**塁球**」なども考えられていました。

そして、**正岡子規**は、1890(明治23)年に友人へあてた手紙のなかで、自分のことを「**弄球家**（ろうきゅうか＝球を弄ぶ人という意味)」と書いています。

さらに、変わった訳語としては、「**自由郷ありの毬**」と紹介した本（『**學校家庭 西洋遊戯全書**』1889年）もあります。

ベースを鬼ごっこの「島」に見立て、「**自由郷**」と訳したのだと思われます。

これらの言葉のひとつひとつは、先人たちの苦心の跡です。

もし、**中馬**がいなければ、ベースボールは「**打球鬼**」とか「**塁球**」などと呼ばれていたのかもしれません。

病弱な従軍記者とエリート志願兵

さて、「野球」という言葉は、**中馬**が思いついた翌年1895(明治28)年　02月、**一高**の校友会雑誌の号外『**野球部史**』として初めて活字となりました。

同じ頃、**正岡子規**は、ジャーナリストとして従軍する望みをようやく果たそうとしていました。

そして、文学者としての彼は、戦場での人間をみつめる使命感をもち、1895(明治28)年03月03日に東京をたちます。

しかし、**子規**が中国へ上陸した 04月の中旬、すでに戦闘はおわっていました。

彼は、一発の銃声も聞かず、ただ戦いの跡をみるしかありません。

―なき人のむくろを隠せ春の草

そこには、現実の死者が敵も味方もなく横たわっていました。

そして、まもなく戦争はおわり、**子規**も 05月中旬に中国を離れます。

ところが、彼は帰りの船中で喀血し神戸の病院に運びこまれます。

子規が東京へ戻ったのは、その年の 10月です。

しかも、翌年(1896年)からは、長く辛い病床生活を余儀なくされていきます。

＊　＊　＊

子規が病床についた頃、**中馬**は野球人として最も充実した時期をむかえていました。

1896(明治29)年の05月、彼がコーチをした**一高**は、横浜の外国人チームとの初の国際試合で勝利します。

また、その翌年(1897年)には『野球』という本も出版し、**中馬庚**の名前は全国に知られました。

しかし、彼は名声を求める人ではありません。

むしろ過去の成功にこだわらず、失敗を恐れず人々の模範となる道をつき進む人でした。

中馬が選んだのは、軍隊と教育です。

彼は、1897(明治30)年(27 歳のとき)に大学を卒業すると、その年の11月に志願して陸軍へ入り、一年を天皇側近の兵士としてすごします。

その後、**中馬**は鹿児島に帰り、地元の中学や母校（**三州義塾**）の教師となりますが、そのかたわらで軍隊経験もかさねていきます。

彼は、1905(明治38)年(35歳のとき)にロシアとの戦争(**日露戦争**)にも出征し、中尉にまで昇進しています。

ふたりの野球論

『遊戯を観る者は球を観るべし』

これは、1896(明治29)年に闘病中の**正岡子規**が書いた随筆(「**松蘿玉液**」)の一節です。

すでに歩くことも困難となった**子規**が、経験者ならではの文章で、誰よりも自在にベースボールの面白さを綴っています。

少し長くなりますが、その一部を紹介しましょう。

「○ベースボールの球　ベースボールには只一個の球あるのみ。而して球は常に防者の手にあり。此球こそ此遊戯の中心となる者にして球の行く處即ち遊戯の中心なり。球は常に動く故に遊戯の中心も常に動く。されば防者九人の目は瞬も球を離るゝを許さず。打者走者も球を見ざるべからず。傍観者も亦球に注目せざれば終に其要領を得ざるべし。』

＊　＊　＊

一方の**中馬**は、1897(明治30)年07月に『野球』と題するはじめての本を出版しています。

この本は、ベースボールの現実的な発展をめざした**中馬**が、全国から**一高**へよせられる多くの問いあわせ（ルールや試合方法など）にこたえて書いたものです。そして、**中馬**の**一高野球部**での 10年近い活動の集大成でもありました。

内容は、総論・略史・練習など八章から構成され、当時の日本のスポーツ指導書として最も優れた一冊です。

彼は、この本のなかで審判へのアピールを全面的に禁止するなど、随所に教育者的な配慮をしています。

そのため、当時のアメリカの公式ルールとは異なる点もあります。けれども、それは、学生たちを中心とする当時の日本野球の実状を考えた**中馬**の知恵でもありました。

その結果、野球は教育の一環として広くうけ入れられて、さらに普及していきます。

その後のふたり

1898(明治31)年、**子規**は悪化する病状のなか

―今やかの三つのベースに人満ちてそゞろに胸の打ち騒ぐかな

など「**ベースボールの歌**」九首を発表します。

当時の**子規**は、作品の明るさとは逆に、もう立つこともできず、穴のあいた体で号泣していました。

しかし、**子規**の生きることへのこだわりは、病床さえ自らの球場にかえ、最期までベースボールの歓声を聞いていました。

彼が、かけぬけた畳一枚ほどのグラウンドには、「無窮大」のひろがりと「命の重さ」そのものがあります。

正岡子規は、1902(明治32)年09月19日の深夜に永眠します。

まだ34歳、日本がロシアとの戦争（**日露戦争**）をはじめる二年前でした。

＊　＊　＊

日露戦争へ出征した**中馬庚**は、1909(明治 42)年(39歳)から約07年半にわたり、新潟県をはじめとして秋田県・徳島県で中学(今の高校)の校長をつとめました。

彼の熱心な教育態度は、個性の強い各地の学生たちからも、全面的な信頼と尊敬をあつめています。

けれども、教育者としての**中馬**を悩ませたのは、不幸にも野球にまつわる出来事でした。

新潟では、試合後の暴動をとめようとした彼が、誤って学生に負傷させる騒ぎがありました。そのため、彼は転勤を命じられています。

また、最後の任地となる徳島県の脇町中学校(今の脇町高校)では、1916(大正05)年に、野球部員たちが大きな乱闘事件をおこします。

そのとき**中馬**は、騒動の中心となった不良学生を数ヵ月にわたって自宅で預かり世話をします。

もちろん、警察は事件に関係した者を取り調べようとしましたが、**中馬**は学生たちの将来を思い、それを許しませんでした。

さらに、事情を知った県の当局者も**中馬**を県庁に呼び、学生たちに対して退学を含めた重い処罰をせまりました。

けれども、**中馬**は、その要求にも断固として応じませんでした。
そして、**中馬**は事件の責任をとり辞職します。

こうして、若者たちを守りとおした彼は、一切の弁解をすることなく教壇からさりました。
築きあげた地位も名誉もすて、悔いはなかったのでしょうか。

なお、**中馬庚**が自宅で監督をした不良学生は、学校に戻ることができ、のちには地元の町長や県会議員となり地域の発展につくしています。

その後、**中馬**は関西へ移り住みます。
晩年には、連日のように球場へ足を運ぶ姿がありました。
若き日に情熱をかたむけた野球への、絶ちがたい記憶をたどっていたのかもしれません。

中馬庚は、1932(昭和07)年03月21日に萎縮腎のため亡くなりました。
享年62歳。

正岡子規と**中馬庚**。　ふたりは、それぞれの分野で大きな業績をのこしましたが、その人生は、それぞれに過酷でした。
けれども、**子規**は病床にありながらもベースボールの真髄を語り、**中馬**も野球への愛着を生涯にわたり持ち続けました。

彼らにとってベースボールとは、闇を照らす一筋の灯りであったに違いありません。**子規**は、死の二年前に次の短歌を遺しています。

―真砂なす数なき星の其中に吾に向ひて光る星あり

◎主な参考資料

『大正増補 和譯英辞林』（前田正穀・高橋良昭〔編〕／1871年）

『野球』（中馬庚／1897年）

『子規全集』全25巻（正岡子規／講談社 1975年～1978年）

『正岡子規・その文学』（久保田正文／1979年）

『ああボッケモン』〝野球〟の名付け親・中馬庚脇中校長伝（後藤善猛／1983年）

『〝野球〟の名付け親・中馬庚伝』（城井睦夫／1988年）

『子規とベースボール』（神田順治／1992年）

『日清戦争従軍写真帖：伯爵亀井玆明の日記』（亀井茲明／1992年）

『病者の文学―正岡子規』（黒沢勉／1998年）

『朝鮮韓国近現代史事典：1860-2001』（韓国史事典編纂会・金容権／2002年）

＊「校友會雑誌」號外 野球部史 附規則（第一高等學校校友會・1895年02月22日発行）

＊「松蘿玉液」（升／日本新聞・1896年07月19・23・27日付）

＊「野球訳名談義」①～⑤（幸田昌三／徳島新聞・1975年11月27・28・29・30・12月02 日付）

今回は **正岡子規と中馬庚** について 少し調べてみました

世ニ好奇心アラスンバ何ソ新地ヲ擴クヲ得ンヤ　　（中馬庚の言葉）

［この世に好奇心がなかったら、どうして新天地をひらくことができるだろうか］

「校友會雑誌 号外 野球部史 附規則」［1895（明治28）年02月22日］41頁より

【参考資料01】

山吹の一枝　第七回　投球會　　花ぬす人（＝子規）稿より

又こゝに事あたらしく説き出すは鐵面居士紀尾井三郎が人となりなり。彼れ怜悧なり、人に負けるを嫌ふ。隋て人に秀づること多し。見かけには不器用らしけれども、其萬事にわたつて多能多藝なるは人の驚く處なり。藤八の手を以て竹刀を水車の如くにふりまはし、相撲の四十八手より外に能く洒落者を　倒すの秘密を心得、耆婆扁鵲の流れを汲みながら小説俳諧の門に遊ぶ。しやれもやれば假聲もやる。人を笑はすこともすれば人をいぢめることもする。見た處もおうやうなるが、中々に愛嬌者なり。されど議論の際、あるはふとした時には存外たやすく激昂するだけがその落度なりとある人はいへり。又其すます處とうぬぼれとがそのきずなりと他の人はいへり。兎に角得難き青年なることは記者も保證すべし。

三郎が住居せる下宿屋といふは同國人のみなれば、下宿せし人たちは皆互に相知りていとむつまじく、晩餐の前後などは遊戯を共にするの風ありて、眞に和氣洋々の中に日を送る者なり。其遊戯は鐵棒、高飛、棹飛、幅飛等にて中にも山咲などゝ呼ぶ一少年は輕捷猿の如く、輕業師も三舎を避くべき程の技を演ずるを以て、よき見物なりとて、宿中の書生皆集りて、縁側に笑ひどよめき拍手喝采の聲にぎやかなり。然るに山尾、篁、章他などの人々盡力してベースボールといふ遊戯を教へしより、宿生いつしか此遊びにのみ耽り、他の遊戯は隨てすたるともなく衰へけり。此ベースボールといふはいと活潑なる遊びにて、殊に熟練を要するものから初めのうちは面白く思はねども、少し手に入る様になりてボールを受けることが十中七八はできるといふに至ては、急に熱心の度を増し、それより上手になればなる程、いよく寢食を忘れてこれに耽ること、實にわき目より見れば不思議とやいはん。奇妙とやいはん。熱心なる人を見て初め笑ひしともがらも、やうくに誘はれて自ら其域に至る。而して其時にはたゞ面白味といふ外は何事も知らざる也。紀尾井は醫學校に生長せしゆゑ、運動的遊戯にはうとく、鐵棒、棹飛抔は試みし事もあらざりしが、ボールの始まりし頃には少し之を試みけり。然るに此遊びは多少の怪我をなすは通常の事故、三郎はこれに辟易し、我若し小指一本なりとも不具になさば、我本職に差支を生ずべければ、まづボールはやめとすべしとて一時はやみぬ。されど時々之をいぢつて見るにつけ、多少の巧者もでき、又朋友が日々上手になるを見ては少しもやつて見たき氣になり、再びこれをはじめてベースボール會員に入りしが、もと腕力のある故にや、ノツクなどは實に上手にて直ちに先輩を壓する程に至りしかば、今は面白くてくたまらなくなり、何もかもすてとけほつとけで夢中に此遊戯にのみ精神をこらしける、傍人が笑ふて、君指をいためたら不都合ぢやないかといへば、三郎答へて「ナニ大丈夫さ、もう大分上手になつたから、ひどい怪我はせんといふわい」といへり。ある夜、三郎の室へ二三人のボール仲間來りて、明日は上野の廣場にてベースボール　興行せんとて其役割を定む。

山尾「こいつはどうしてもファルストベースへやらにやなるまい。」

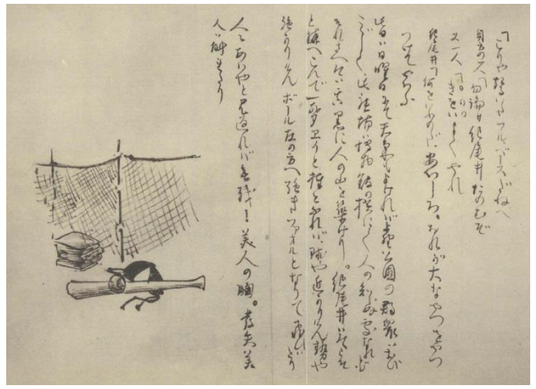
紀尾井「そりやいかんさ、元來元老がいばるからいけない。」

絲井「さういふなや國會開設までは元老院でもやくにたつから。」

紀尾井「しかし勝負になつて用捨もいらん事さ。あれがファルストベースやる位ならおれがやるよ。」

山尾「まづお株はお株でないとどうしてもいかんよ。政府でも維新の元勳を取扱ふには實に困つてるだらう。」

翌日になると同じ宿の書生二十人餘りは威勢よく上野迄くり出したり。紀尾井は此時ピツチヤアと第二ベースとの交代なりしが、殊に愉快さうにかけまはりゐたり。フアオル、アウトと叫ぶ聲、バツトにて高くボールを打ちあげたる音、木だまにひゞきていさましゝ。勝負もはや終らんとする頃、紀尾井はストライカー(打ち手)となりてベースに出でしが、驚きたる調子にて



「こりや驚いた、フル、ベースだねへ。」

身方の一人「勿論サ、紀尾井たのむぞ。」

又一人「きをゐよくやれ。」

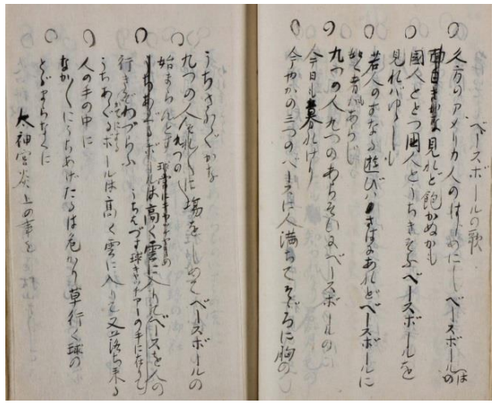
紀尾井「何をいふのだ、安心しろ、おれが大なやつをやつつけてやらう。」

此日は日曜日にて天氣もよければ、上野公園の群衆はおびたゞしく、此廣場は博物館の横にて人の知らぬ處なれども、それさへ今は眞黒に人の山を築けり。

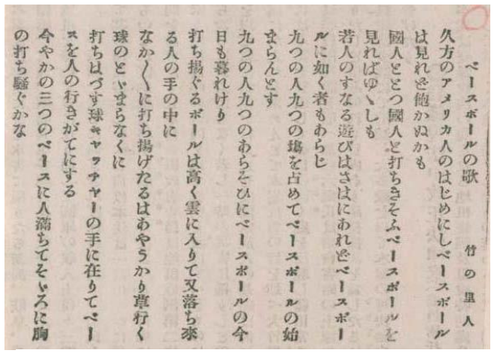
紀尾井は今こそと構へこんで一聲エイと棒をふれば球や近かりけん、勢や強かりけん、ボール左の方へ強きフアオルとなりて飛びたり。人々あはやと見返れば無殘！美人の胸。發矢、美人は倒れたり。

1890(明治23)年頃

【参考資料02】



「竹乃里歌」松山市立子規記念博物館所蔵より



「竹の里歌」国立国会図書館所蔵より

ベースボールの歌　　竹の里人

久方のアメリカ人のはじめにしベースボールは見れど飽かぬかも

國人ととつ國人と打ちきそふベースボールを見ればゆゝしも

若人のすなる遊びはさはにあれどベースボールに如く者もあらじ

九つの人九つの塲を占めてベースボールの始まらんとす

九つの人九つのあらそひにベースボールの今日も暮れけり

打ち揚ぐるボールは高く雲に入りて又落ち來る人の手の中に

なかくに打ち揚げたるはあやうかり草行く球のとゞまらなくに

打ちはづす球キャッチャーの手に在りてベースを人の行きがてにする

今やかの三つのベースに人満ちてそゞろに胸の打ち騒ぐかな

新聞「日本」紙　1898(明治31)年05月24日　発表

雑誌「運動界」第02巻第08号　1898(明治31)年08月05日　再掲載

【参考資料03】

小石川まで〔抜粋〕　〔1899(明治32)年12月25日〕

本郷に麓を訪ひし次の日の朝、秀眞を原町に訪ふ約成りて、午後三時頃車して出づ。谷中の墓地を行くにこゝかしこ山茶花紅に咲きて低き銀杏の黄葉と照りあへる、夕日のさまもいとはなやかに心ありげなり。

よき人を埋めし跡の墓の石に山茶花散りて掃く人もなし

きのふみまかりし玉山の事しきりに思ひつゝ行くに悲しき事ども多かり。去年わが病牀をおとづれて、しかじかの句書けと畫絹など置きて去にし其時の顔、今もわがまぼろしに殘りてうつし世には無かりけるも、あらはかなや。

亡き友の亡きをかなしみ思ひをれば車の上に涙落ちけり

大きなる者に驚かされて仰ぎ見れば芝居塲の前に來つるなり。根津權現のうしろより登り白山權現の前に下り原町を迷ひありきて復板橋街道に出づ。尋ねあぐみて腰の痛みに堪へざる折から、ゆくりなく安民に逢ふ。安民指さしてこゝなりといふ。我は恰も尋ぬる家の前に車止め居たるなり。小き嶮しき坂を押されて上れば一町にも餘る廣塲あり。若き人そこゝにつどひて體操　野球　などすめり。其傍にかなめ垣ありてかたばかりの門をつくりたるは秀眞の住居なり。（後略）

国際試合のはじまり

1896(明治29)年の日米野球



1896(明治29)年の一高の選手たち

1894(明治27)年の秋頃、**一高**の元選手・**中馬庚**(当時、24歳)は、ベースボールの訳語として「**野球**」という言葉を思いつきました。

それから約一年半後の 1896(明治29)年 05月から 07月にかけて、**一高**の**ベースボール部**は、全国の注目をあつめることになります。

横浜の外国人やアメリカ海軍のチームなどと４試合をおこない、３勝１敗の好成績をあげたのです。

開成学校の学生たちが、８名の外国人を相手に大敗して 20 年。

平岡 凞(**新橋 倶楽部**)が、「互角にゲームが出来る相手ではない」と嘆いた 10数年後の快挙でした。

そして、当時の日本は中国との戦争(**日清戦争**)を経て、ロシアやドイツなど西洋列強との激しい国際競争の時代に突入していました。

今回は、そのような社会情勢をふまえ、いわゆる「国際試合のはじまり」とよばれる一連の試合について調べてみました。

ベースボールの普及

ところで、野球は、今でこそ多くのファンに親しまれています。

けれども、1895(明治28)年頃までは、一部の学生たちをのぞいたほとんどの日本人にとって、ベースボールは、まだまったくなじみのない西洋の娯楽でした。

野球は、どのようにして人々のなかに根づいていったのでしょう。

まず、1890年代までには、**一高**をはじめとする東京の学校や全国の**旧制高等学校**、各地の**師範学校**(今の教育系大学)・**札幌農学校**(今の**北海道大学**)などで、ベースボールがおこなわれていました。

また、それらの学校で野球を経験した人たちや外国人が、各地の**中学校**(今の**普通高校**)や**実業学校**(今の**商業・工業・農業高校**など)の教師となって、赴任した学校でベースボールを教えるようになっていきます。

これが、今の高校野球へ発展する最初の段階でした。

そして、**一高**が外国人たちと試合をおこなう前年(1895年)までに、全国で60以上の**中学・実業学校**でベースボールが紹介されています。

いくつか実例をみておきましょう。

兵庫県の**姫路中学**(今の**姫路西高校**)では、1888(明治21)年に着任した**熊本謙次郎**(当時21歳)などによって、野球がはじまっています。

彼は、校内にふたつのチーム(**通学生軍・寄宿舎生軍**)をつくって、ベースボールの基礎を教えました。

熊本は、1891(明治24)年に**大阪中学**(今の**北野高校**)へ転出しますが、大阪の高校野球史でも初めて本格的にベースボールを指導した人とされています。

また、高知の**高知県尋常中学**(今の**高知追手前高校**)では、**内村達三郎**(**札幌農学校**出身。1889年から赴任)や**石川一**(1893年に着任)がベースボールを教えています。

石川は、その後にも愛知県の尋常中学時習館（今の時習館高校）などでも野球を指導しました。

さらに、外国人教師もベースボールの普及に貢献しています。

三重県の津中学（今の津高校）では、1886（明治19）年頃にギルマン・ストラー（Eliphalet Gilman Storer, 1857-1911 慶応義塾でも野球を教えた人）により野球がはじまっていました。

大分県では、1888（明治21）年、大分中学（今の大分上野丘高校）にバジル・W・ウォーターズ（Basil Worthing Waters, 1859-1936）が、バットとボールをたずさえて赴任してきたと伝えられています。

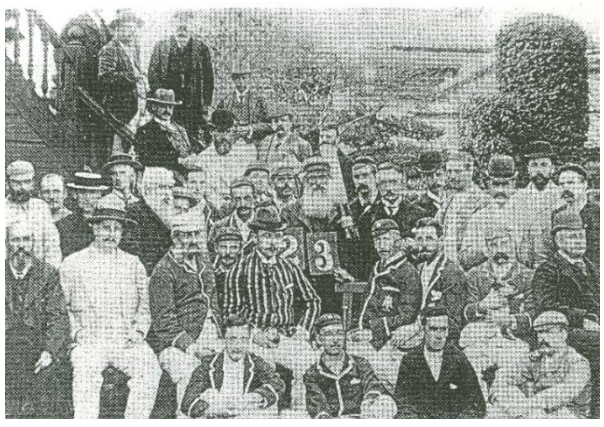
さらに、愛知県の名古屋商業学校（今の市立名古屋商業高校）では、1891（明治24）年頃にイギリス人教師W・H・スミス（W・H・Smith）が校庭で野球を教えていました。

しかし、それらの学校でも現在のクラブ・同好会のように組織的な活動をはじめていたのは、東京の学習院（1889年に創部）や福島県の安積中学（今の安積高校。1890年にベースボール会を結成）など、20校あまりにすぎませんでした。

そのなかで、沖縄県の首里中学（今の首里高校）では、1894年に修学旅行で訪れた京都の第三高等学校（今の京都大学）との交流から野球部（当初は基球部と呼ばれた）が誕生しています。

どの学校でも、用具はバットとボールだけという時代でした。

横浜の外国人スポーツクラブと一高の野球



YC&AC のメンバーたち（1894.11.03）

さて、はじめて一高の相手となった外国人のチームは、ヨコハマ・クリケット･アンド・アスレチック･クラブ（以下は、ＹＣ＆ＡＣと略記）。

今のヨコハマ・カントリー・アンド・アスレチック・クラブの前身です。

ＹＣ＆ＡＣは、クリケットクラブを中心にベースボールやフットボールなど四つのスポーツ団体が合併して、1884(明治17)年に設立されました。

1896(明治29)年（一高とはじめて野球の試合をおこなった年）頃の会員数は、200人あまり。

陸上競技や水泳、テニス、自転車など様々なスポーツを楽しんでいました。

しかし、ＹＣ＆ＡＣの活動は、その名が示すようにクリケットが中心です。早くから専用のグラウンドをもち、毎年05月から 11月のシーズン中に 10数試合以上がおこなわれていました。

一方、ベースボールは、年に数ゲームを横浜に寄港するアメリカ海軍のチームや仲間たちと楽しむ程度でした。

＊　＊　＊

次に、当時の**一高**の様子もみておきましょう。

1890年代の**一高生**の多くは、篭城主義とも呼ばれた厳しい寄宿舎生活をおくっています。

そのなかで彼らは、やや粗野な独特の生活態度（バンカラ）で団結して時代を謳歌していました。

そんな**一高**でのベースボールは、1890(明治23)年の大きな不祥事（**インブリー事件**）以来、チームワークが最も重視されています。

そして、部員たちは独自に工夫した練習で、高い技術を身につけていました。

その結果、1890年代の後半には、日本中の学生たちで**一高**と対等に試合ができる相手は、みあたらなくなりました。

そこで、**一高**は、実力のある外国人チームとの試合を強く望むようになります。

外国人チームとの試合

何度かの交渉の末に、一高とＹＣ＆ＡＣとの最初のゲームは、1896(明治29)年の 05月23日に横浜公園(今の横浜スタジアム付近)でおこなわれました。

先攻のＹＣ＆ＡＣチームは、

一番（三塁）スミス　　Smith
二番（右翼）ギン　　Ginn
三番（捕手）エリス　　Ellis
四番（遊撃）アーベル　　Abel
五番（一塁）チルデン　　Tilden
六番（投手）シュワイヤー　Schweyer
七番（左翼）クロフォード　Crawford
八番（中堅）ハント　　Hunt
九番（二塁）ライアン　　Lyons

後攻の一高チームは、

一番（遊撃）井原外助(23歳 山口県) 主将
二番（三塁）村田素一郎(22歳 長野県)
三番（一塁）宮口竹雄(20歳 東京府)
四番（左翼）富永敏麿(21歳 東京府)
五番（投手）青井鉞男(23歳 栃木県)
六番（捕手）藤野修吉(21歳 広島県)
七番（二塁）井上匡四郎(20歳 東京府)
八番（右翼）上村行榮(20歳 鹿児島県)
九番（中堅）森脇幾茂(23歳 山口県)

というメンバーです。

一高の選手たちにすれば、たとえ負けても一度は外国人チームを相手に試合がしたいという決意で挑んだゲームです。

けれども、結果は４対29。意外にも一高の勝利でした。

次の試合は、約二週間後の06月05日におこなわれました。

ＹＣ＆ＡＣは、ちょうど横浜へ寄港していたアメリカ海軍の軍艦（「**デトロイト号**」と「**チャールストン号**」）から五人の乗組員を選手に加えています。けれども、**一高**の勢いは止まりません。28対９。

またも**一高**に凱歌があがりました。

三回目の試合は、**一高**の校庭へ「**デトロイト号**」チームを招き、06月27日におこなわれました。

このゲームは、東京での初の国際試合として「一万人」の観衆があつまったと伝えられています。

結果は、またもや**一高**の勝利。　22対６という大差に野球のことなど何も知らない人たちまでが、思わず喜びの声をあげました。

そして、四試合目は、07月04日に横浜で催されました。

ＹＣ＆ＡＣにとりアメリカの独立記念日という特別な日の試合は、自分たちの名誉を取り戻す絶好の機会です。

彼らは練習にはげみ、アメリカ海軍の旗艦「**オリンピア号**」からも**チャーチ**、**モナハン**、**エックハルド**、**スタンリー**など優秀な選手を補強して、試合にのぞみました。

なかでも、**チャーチ**(Ernest Fisher Church,1877-1941)は、アメリカの「プロフェッショナル」倶楽部の一員とも噂された名手でした。

ゲームは**チャーチ**の指導をうけたＹＣ＆ＡＣが、いきなり５点を先取します。しかし、**一高**は、相手投手の変化球に苦しみながらも、少ないチャンスをいかして着実に挽回していきました。

試合は、両チームが点を取りあう一進一退の緊迫した展開のなか、後半には**一高**がやや優勢となりました。

そして、一高は２点のリードで最終回をむかえます。

ところが、その後に思わぬエラーから逆転され、ＹＣ＆ＡＣの 14点に対し、**一高**は 12点。**一高**は全勝の栄冠を逃がしました。

野球とジャーナリズム

この一連の試合は、当時の新聞や雑誌などでも次々と大きく取りあげられ反響をよびます。

たとえば、いくつかの新聞は、選手たちの似顔絵入りで、**一高**の活躍を紹介しました。

また、試合の記事は、東京だけでなく、北海道や九州など各地の新聞にも掲載されました。

少年むけの雑誌では、ゲームの様子を物語風の読み物にして詳しく書いたものもあります。

そして、07月には、日本初の野球専門書（『**ベースボール術**』**高橋慶太郎**[編]）が出版されました。

このように、**一高**の目覚ましい成績がその頃の普通の人々にまで、野球を身近にしたことは言うまでもありません。

けれども、それは、当時の民衆の気持ちをつかもうとする新聞や雑誌などの力でもありました。

ここで、ジャーナリズムを代表する新聞のあゆみについて、少し調べてみましょう。

そもそも、日本人による新聞は、1864(元治元)年に**ジョセフ＝ヒコ**（**浜田彦蔵** アメリカに帰化した最初の日本人）が初めて発行しました。

また、明治時代のはじめ(1871年)になると、本格的な日刊新聞が横浜で創刊されます。

さらに、1880年代に入り自由民権運動がさかんになると、新聞は政党の考えを表明する重要な役割も果たしました。

そして、1894(明治27)年に外国との戦争(**日清戦争**)が勃発すると、新聞記者たちは、海をこえた戦場の生々しい様子も報道するようになっていました。

当時の社会・時代の壁

そんなジャーナリズムの発展は、その頃の社会とどのように関係するのでしょう。

まず、明治の新しい政権は「どんなことも人々の意見をもとに決定しよう(**万機公論ニ決スベシ**)」という理想をかかげていました。

しかし、実際は、1868(慶応04)年に出版や新聞を政府の許可制として以降、言論を尊重したことなど一度もありません。

それどころか、政府に批判的な者たちは徹底して取り締まって、言論界をふるえあがらせていました。

それは、1875(明治08)年につくられた「新聞紙条例」が何回もあらためられ、そのたびに大勢の新聞記者などが次々と処分された事実からも推測されます。

一方、普通の人たちは、文明開化の時代がきても日々の暮らしに追われています。

1896(明治29)年頃でも、大多数の農家は生きるために収穫の半分以上という重い負担(小作料など)に耐えていました。

また、東京のような都市では不景気で職を失う人が続出し、深刻な社会問題となっています。

このような事情などから、全国で約六割の子供たちは、いまだに小学校へもかよえていませんでした。

さらに、二万人以上もの戦没者をだしたと言われる**日清戦争**は、人々に見知らぬ異国で息子たちや自分自身が「死ぬ」かもしれないという現実をつきつけました。

その恐ろしさは、それまで村から一歩も出たことのない人たちにさえ、外国との関係を実感させ、「日本の国民」として生きる自覚を迫っています。

けれども、それは人々が幸福になるための自覚ではありません。

むしろ、権力者たちにとって従順で都合のよい人間となることを知らず知らずのうちに強制されていました。

そんな世の中で、当時のジャーナリズムは一連の「国際試合」について人々へ何を伝えたのでしょう。

たとえば、**一高**の勝利を伝える新聞は、それが西洋に対する日本の優位を示す実例であるかのように賞賛していました。

けれども、ＹＣ＆ＡＣは選手たちの仕事の関係で普段からあまり練習もできないチームです。若くて日頃からよく訓練をつんだ**一高**とは、あきらかに実力の差がありました。

また、三回目の試合後に両チームの親睦会が、**一高**の主催で開かれたことを書いた新聞は、ほとんどありません。

もし、わずか一行でも外国人たちとのなごやかな雰囲気を伝える記事があれば、読者の印象も少しは変わっていたでしょう。

このような事情も知らずに新聞を読んだ人たちは、「日本人は優秀」という感想しか持てなかったに違いありません。

もちろん、表向きは新聞が政府の命令で発行されていたわけではありません。

また、時代も強大な西洋諸国との対決へむけて、急速に動きはじめていました。

しかし、あえて言えば当時のジャーナリズムは、政府の圧倒的な管理の下で、人々を都合よく誘導するための権力者の道具でした。

そして、一高の「国際試合」での活躍を報道した新聞や雑誌は、無意識のうちに欧米への根拠のない自信を民衆に与える役を演じていたのです。

それが、制約された表現しか許されなかった頃のジャーナリズムの限界でした。

なお、この時代にはスポーツに対する取り組み方も大きく変わりつつありました。

楽しむためのスポーツが「勝敗」を重視するようになったのは、この頃からです。

それは、戦争という激しい国際競争の影響で勝利だけを追求する息苦しい時代の産物でした。

けれども、やがて人々は「勝ち負け」のみにこだわる考え方が、スポーツ本来の喜びから最も遠いことを学んでいきます。

民衆がベースボールを知ったとき、人々は「時代」という見えない雲におおわれていました。

その雲は、田畑を耕す手にも銃を取らせ、死ねば英雄ともてはやします。

ジャーナリズムが野球と出合ったとき、民衆は「時代」の凍りついた風に踊らされていました。

その風はペンの力も奪い取り、人々へ偽りの勇気をあたえていきます。

そして、ベースボールは、二十世紀を目前に「時代」という大きな波にまきこまれていました。

◎主な参考資料

『ベースボール術』（高橋慶太郎〔編〕／1896年）
『全國公立尋常中學校統計書』明治31年（三井原仙之助〔編〕／1899年）
『日本新聞発達史』（小野秀雄／1922年）
『ジョセフ＝ヒコ』人物叢書;第114（近盛晴嘉／1963年）
『姫中･姫路西高百年史』（「姫中･姫路西高百年史」編集委員会〔編〕／1978年）
『近代日本の新聞読者層』叢書・現代の社会科学（山本武利／1981年）
『戦争とジャーナリズム』（茶本繁正／1984年）
『日清戦争の社会史』「文明戦争」と民衆（大谷正・原田敬一〔編〕／1994年）
『学習院野球部百年史』（学習院野球部百年史編集委員会〔編〕／1995年）
『近代日本の形成と日清戦争』戦争の社会史（檜山幸夫〔編著〕／2001年）
＊「小樽新聞」（1896年06月11日付　01面）
＊「國民新聞」（1896年06月28日付　04面）
＊「日本における体育･スポーツ雑誌の歴史」（伊東明／「上智大学体育」第２号・1968年）

今回は 1896(明治29)年の「国際試合」について少し調べてみました

只看る、一方は筋骨逞しき偉大の壮漢にして、他は短矮殆んど共にするに足らざるの小丈夫のみ。体格の点より観察し来れば、較せずして勝敗の数、既に明かなり。然るに実際其技を闘はすに至つては全く予想に反し、小丈夫の敏活趫捷なる、遂に能く数倍の大勝を贏し得たり。之を外人と我第一高等学校選手との間に於けるベースボール仕合ひの結果とす。而して前後三回、皆其揆を一にせり。

鬼哭子[杉浦重剛(1855-1924)]「東京朝日新聞」1896(明治29)年07月 01 日（02）

社説「●ベースボール仕合を観て感ずる所を記す」より

【参考資料01】

草分け時代を語る①

バット一本十五錢

野球　宮口竹雄氏

明治二十三年　一高が初めて東京中の野球團を破つて覇を唱へた時代の僕の兄、或は伊木氏、恩田氏の方が古い話は知つてゐるかも知れないが、僕は明治二十八、九年の一高の一壘をやつてゐた

一高　は無敵の勢ひで横濱の外人團に試合を申し込み二十九年五月二十三日に行ひ二十九對四といふ成績で大勝して一高の強味を誇つたものだつたが、この時横濱停泊中の米艦チャーレストン號及びデトロイド號の聯合軍と再度手合せをして對外人戰　四回目に十四對十二で敗けた事があつた

その時の外人軍の投手は二人居て初めに出て來たのがエツカートと云ふ投手だつたが頗るドロツプを上手に投げ目の高さから　本壘上に叩き附けると云ふ大きなブレークを見せてゐた、次の投手はチヤンスと云ひ、これは又速球投手、此の球速は投げてから捕手のミツトに入るまで一、二、三、と三つの數が數へられない程だつた、僕は常にこの方法で測つてゐるが日本の投手は大抵三から四で數へられるが、先年來朝したスモーク・ボールのグローブ投手、あれも三までは數へさせなかつたが、それ程速い球を投げてゐた

打つ　にしてもバツトを引いてゐる隙がないので、肩先にバツトを附けて置いて肩の廻轉と共にバツトを振り出す事によつて　プレース・ヒツト氣味の打撃法で打つたものだつた、九回の表まで勝つて居り九回裏二死後に三壘に走者がゐて三壘にゴロが轉がつたのをちよつと取り損ねた上、三壘走者を牽制した爲に一壘送球が間に合はず、惜しい所で勝利を逸し續く四人に見事な安打を連發されて負けて終つた

實に殘念であつたが、この時からにはかに野球熱が昂り、それ　まで一本十五錢で買つたバツトが、一躍卅八錢になつた

當時は外人選手連は皆グローヴを使つてゐたが我々は捕手がミツトを持つのみで後は全部素手だつた

（投）青井　鉞男
（捕）藤野　修吉
（一）宮口　竹雄
（二）井上匡四郎
（三）村田素一郎
（遊）井原　外助
（左）富永　敏麿
（中）森脇　幾茂
（右）上村　行榮



の諸氏が當時の選手でこの對外人戰以來グローヴを作らせたり、僕と井上、富永氏とで外國にグローヴを注文して取り寄せたら

無料　で送つて來て呉れた、そのグローヴはいまだ僕の分が家に藏つてあるが、これが日本におけるグローヴ第一世といへるだらう

グローヴを使はなかつた時代は掌が裂けて來てこれに萬金膏を温めては塗り込んだものだつた　今から考へると良くあんな事　が出來たものだと思はれるが當時としてはそれこそ戰爭に出た積りで居り、普通の事と考へてゐた

冬の寒い日など雪の中でこの素手の野球を行ると、手の甲から球を受ける度に血が吹き出したものだつた、それに僕は一壘をやつてゐたから、球の勢ひを殺す爲に兩手を手前に引く事が非常に損なので終ひには素手を前方に突き出す様にして止めた、球が掌に入つてピシリと音がすると走者との差が半歩位あつても審判員は「アウト」を宣告して呉た事があつた

從つてグローヴを手に附けるとどうも邪魔になつて工合が悪かつた、グローヴが氣にかゝつて上手に球が掴めなかつたものだ　指先とグローヴの指先との間にブラブラした部分が出來、球が地面に接觸した瞬間にこれを捕へようとするとグローヴの指先を彈いて球は逃げて行く、だから現在でも僕はグローヴの指先を切れと云つてゐるのだ

先年　東大の球場開きに招ばれて長與總長の始球を素手で受けて皆を驚かせたが自分が驚いた事は近年のボールが素晴らしく良く飛ぶ事だ

これも久し振りで東電の連中と野球を行つてボールを打つて見たが我々當時とは比較にならぬ彈力を持つてゐた

僕等の時代は芯に毛糸を捲いて牛の上皮を縫ひ合せて潤光堂とか云つた運動具屋に作らせたものだ、この工場に上り込んで自分で苦心しながらボールを作つた事もあつた、それが店に出て商品として賣れて行つた時代だからアメリカンボールを使ふとまるで珠を手にする滑らかさを感じたものだつた

そしてプレイの根本精神は何でも「向つて行く」と云ふ強氣だつた、打者線の後ろの線の近くに立ち、本壘上に來るボールへ踏み込んで打つてかゝつたものだつた

匍球　を捕へるにしても當時の二壘手井上匡四郎子の如きは兩脛を揃へて之にボールを打ち當てそれを拾つて投げると云ふ風で今から考へるとどうかは知らないが確に潑剌とした元氣一杯の野球であり、試合は卽ち戰爭だと心血を注いだ一本氣な處があつた、僕の右手の小指は土に擦られて中の方へくつついて居り左小指も一度甚く痛めて軟骨が壞れてゐるらしい、然しこれは若い日の懷しい野球の思ひ出として良い記念となつてゐる

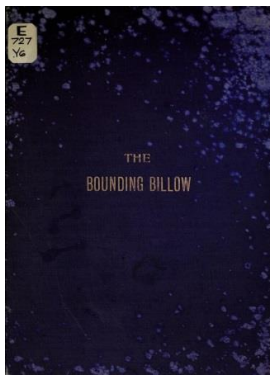
【宮口氏は東電監査役】

「東京朝日新聞」１９３８(昭和13)年03月31日　朝刊　より

【参考資料02】



Ernest Fisher Church
(1877-1941)



The Bounding Billow"

Our Base Ball nine gave a native team who thought they knew all about it, a few pointers on playing the game. They were a crack team, however and put up a game that would have made some of our professionals open their eyes.
The youthful (?) " Pop" Church put a twirl on the ball that made their hair stand on end and won the day. He was carried around the diamond by the ladies and has continued a decided favorite among the fair sex ever since.

" The Bounding Billow " part one, p.22

我々のベースボール・ナインは、このゲームのすべてを知っていると思っていたネイティブ・チーム（一高）に、ゲームをプレイする上でのいくつかのポイントを教えました。しかし、彼らは優秀なチームであり、我々の専門家たちが目を見張るようなゲームを展開しました。
若々しい(?)「ポップ」チャーチは、彼らの髪の毛が逆立つような好投で勝利に導きました。彼は、女性たちによってダイヤモンドの周りを運ばれ、それ以来、淑女たちの間で決定的な人気を得ています。

「バウンディング・ビロー」パートワン　22 頁より

https://archive.org/details/theboundingbillo00whitrich/page/22/mode/2up?view=theater

早慶時代と武士の心

明治30年代の野球界



1903(明治 36)年　第 01 回 早慶戦に出場した両チームの選手たち

ベースボールが、日本へ伝えられたのは、1872（明治05）年です。

初期の明治10年代(1877-1886)には、**新橋倶楽部**の**平岡凞**が中心となり、彼のもとへ熱心な学生たちがあつまりました。

次の明治20年代(1887-1896)は、**一高**の全盛期です。

当時の**一高**は、外国人チームとも試合をおこない、その活躍が人々の野球への関心を高めました。

そして、明治30年代(1897-1906)には、**一高**にかわり、**慶応**と**早稲田**というふたつの学校が実力を伸ばします。

また、その頃には、日本中の子供たちまでもが、ベースボールを楽しむようになっていました。

その様子は、あたかも木々の若葉が太陽の光をうけ、いっせいに芽をふきだしたかのようです。

今回は、**早稲田**と**慶応**が野球界の頂点にたち、全国の少年少女たちまで夢中になった明治30年代(1897-1906)のベースボールのひろがりについて調べてみました。

落日の一高

さて、明治20年代後半の日本では、**一高**が抜群の実力で野球界をリードしていました。

とくに、1896(明治29)年のＹＣ＆ＡＣなど外国人チームとの一連の試合は、野球が多くの人に知られるきっかけとなりました。

そして、1898(明治31)年の春頃には、**白洲長平**(当時24歳。**明治学院・同志社、神戸森村組**などを経て、1896年から**エール大学**に留学中)をつうじアメリカの大学との交流も検討されました。

しかし、明治30年代になると、**一高**にもかげりがみえはじめます。

たとえば、1897(明治30)年には、練習試合とはいえ中学生(今の**郁文館高校**)チームに連敗しました。

また、1899(明治32)年の仙台への遠征では、**第二高等学校**(今の**東北大学**)との正式な対校試合で敗れています。

そして、一時的には**守山恒太郎**(1902年、卒業。1912年に病死。享年32歳)のような優れた選手もあらわれ、もりかえしますが、その後、**一高**の影響力は次第に失われていきました。

この時期に**一高**が弱くなった理由は、いくつか考えられます。

まず、1894(明治27)年からの新しい学校制度の影響で選手を養成する期間が５年から３年に短縮されたこと。

あるいは、野球が普及するにつれて有望な選手が他校へ入学するようになったことなどです。

野球の普及

一高の実力が少しずつ落ちていった明治30年代(1897-1906)には、ベースボールが学校の課外活動(部活動)として急速に普及しました。

現在の高校にあたる全国の中学・実業学校では、1901(明治34)年までに、およそ150校が野球部の活動をはじめています。

その数は、**一高**が外国人たちと初めてゲームをした前年(1895年)までとくらべ、五年ほどで約７倍近くも増加しました。

また、明治30年代の中頃には、対校試合が発展して、地域ごとの大会も開催されるようになります。

たとえば、1901(明治34)年からは、**第三高等学校**（今の**京都大学**）の校庭で関西の二府十三県の**連合野球試合**が挙行されます。

そして、その翌年(1902年)には、第01回の**東海連合中等野球大会**が催され、1903(明治36)年からは、九州でも**第五高等学校**(今の**熊本大学**)が主催する**中等野球大会**もひらかれました。

さらに、出版の分野にも新しい動きがあります。

まず、1897(明治30)年に日本初のスポーツ専門雑誌「**運動界**」（主に**一高**の関係者が編集にかかわった月刊誌）が創刊されました。

また、1902(明治35)年からは『**野球年報**』（各地の大会や試合の記録などをまとめた年鑑）が発行されるようになります。

しかし、この頃には試合の勝敗をめぐる乱闘など、一部で問題もめだつようになりました。

1904(明治37)年のある新聞によると、ゲームに負けた恨みから、相手選手を刃物で斬りつける事件をおこす学生(17歳)もいました。

慶応と早稲田の躍進

そんな状況のなか、とくに目覚ましく野球を発達させたふたつの学校がありました。

今の**慶応義塾大学**と**早稲田大学**です。

慶応義塾大学(以下、**慶応**と略記)の野球は、日本でも有数の古い伝統をもっています。

そもそもは、1885(明治18)年頃に**平岡凞**（**新橋倶楽部**）に指導をうけた学生たちがはじめていました。

その後、1888(明治21)年には、アメリカ帰りの**立田伸太郎**なども参加して「**三田ベースボール倶楽部**」という同好会ができます。

そして、1892(明治25)年に体育会が組織されたとき、「野球部」として正式に部活動が認められました。

しかし、その頃は、まだ**一高**をおびやかすほどのチームではありません。


村尾次郎（1872-1921）

慶応の野球部では、創設メンバー**村尾次郎**（1892年に卒業）が、明治期の末まで事実上の監督をつとめて、発展に貢献しています。

村尾は、早くからアメリカの野球専門書などを参考にして、技術や用具の改良に取りくんでいました。

たとえば、まだ走者のすべりこみが卑怯だと思われていた初期の頃から、**慶応**は彼の発案でスライディングを練習し、実際のゲームでもこころみています。

また、1901(明治34)年には、**村尾**（当時29歳）が引率した関西への遠征で四勝一敗の好成績をおさめました。

さらに、その頃の**慶応**は、横浜の外国人チームの主将**アール・C・スワン**（郵便電信学校の教師などをつとめて、1902年に日本で死去。享年26歳）の指導もうけています。

スワンは、アウト数を考えた効率的な守備の方法（ダブルプレーなど）を厳しく教えました。

こうして、技術を向上させた**慶応**は、1903(明治36)年の**一高**との試合では惜しくも敗れましたが、その実力に注目があつまりました。

＊　＊　＊

早稲田大学（以下、**早稲田**と略記）の前身は、1882(明治15)年に創立された**東京専門学校**です。

早稲田での本格的な野球は、**慶応**にくらべると新しいものです。

1895(明治28)年に当時の学生たちが、体育をさかんにする目的で「**早稲田倶楽部**」を結成して、ベースボールをおこないました。

また、その少し後には、**押川春浪**(1899年に卒業。日本でのＳＦ作家の元祖)なども校内に別のクラブをつくっています。

しかし、正式な野球部の活動は、**大橋武太郎**を中心とする同好会「**チーヤフルクラブ**」が、1901(明治34)年に学校から公認されたときからになります。

早稲田の発展には、進歩的な考え方をもつ体育部長**安部磯雄**（1901年に36歳）の尽力がありました。


安部磯雄（1865-1949）

彼は、自費で合宿練習の面倒をみて、学校側と交渉し、野球部専用のグラウンドも確保しました。

また、当時の強豪チーム（**一高**や**慶応**・**学習院**など）に**早稲田**が一年で全勝すれば、選手たちをアメリカにまで遠征させるとも約束しています。

それは、全盛期の**一高**にも果たせなかった前例のない計画でした。

そして、その後の**早稲田**は、わずか数年間で**慶応**や**一高**にせまるチームとなっていきます。

早慶時代

慶応と**早稲田**との記念すべき最初の試合は、1903(明治36)年11月21日におこなわれました。

結果は、**慶応**が 11対09 で勝利をおさめています。

その当時の**慶応**の実力は、すでに**一高**をしのぐと言われ、関西への二度目の遠征でも六試合すべてに勝ち自信を深めていました。

一方の**早稲田**は、前年(1902年)に大学となって、素質のある選手が全国から次々とあつまってきます。

しかも、その年の10月には、横浜の外国人チームにも勝利しています。けれども、**慶応**の実力には、まだ少し及びませんでした。

そして、1904(明治37)年06月、**早稲田**と**慶応**が、あいついで**一高**に勝ち「**早慶時代**」の幕をひらきます。

とくに、**慶応**は、**一高**のリードでむかえた九回の裏に**櫻井彌一郎**(当時20歳)が、あざやかな逆転打をはなって、野球界の主役交代をはっきりと示しました。

また、この年の**早稲田**は**フレッド・メリーフィールド**(**シカゴ大学**の元投手、当時30歳。宣教師として来日中)のコーチをうけ、**一高**や**慶応**・**学習院**・**横浜の外国人チーム**などを相手にして、一度も負けず七連勝を達成しました。

早稲田は、翌年に**安部**が約束したアメリカ遠征を実現します。

遠征メンバーは、部長の**安部磯雄**(投手)**河野安通志**(捕手)**山脇正治**(一塁)**泉谷祐勝**(二塁)**押川清**(三塁)**陶山素一**(主将・遊撃)**橋戸信**(左翼)**鈴木豊**(中堅)**小原益遠**(右翼)**獅子内謹一郎**(予備)**森本繁雄**・**立原秀輔**・**細川健彦**の13名でした。

彼らは、1905(明治38)年04月にロシアとの戦争(**日露戦争**)がつづくなか、さっそうと横浜港から出発します。

そして、約二ヵ月の滞在中に、アメリカ西海岸の高校生や大学生、社会人チームなどと26試合(07勝19敗)をおこない、06月に帰国しました。

この遠征は、試合結果だけをみれば成功とは言えないでしょう。

けれども、彼らが体験した本場のベースボールは、日本の野球を大きく前進させます。

たとえば、二塁手と遊撃手が交互に塁から離れて走者を牽制する技術も、彼らが持ち帰ってきました。

また、この年の秋から**慶応**と**早稲田**とのゲームは、三試合制(先に二勝したチームがシリーズの優勝者)となりますが、これも**早稲田**がアメリカで学んだ試合方式です。

なお、この制度を採用した最初の三試合は、**早稲田**の二勝一敗でした。

しかし、**慶応**も遠征帰りの**早稲田**に５対０で勝利するなど実力的には、互角でした。

こうして、**慶応**と**早稲田**は、よきライバルとなっていきます。

ところが、1906(明治39)年の秋に両校の試合をめぐって、大きなトラブルがおこります。有名な「**早慶戦中止事件**」です。

原因は、双方の過熱した応援にありました。

一説では、一勝一敗でむかえた決勝の日を前に、**早稲田**の一部の学生は、腕力に訴えてでも応援の場所を占領しようと意気ごみ暴動ともなりかねませんでした。

そのため、責任者の**安部磯雄**が警察にまでよばれ、厳重な注意をうける事態となります。

そして、決勝の試合は代表者たちによる話し合いの結果、混乱をさけるために中止されました。

また、この後、両校のゲームは二十年近くもおこなわれません。様々な確執をのりこえ、**慶応**と**早稲田**の対校試合が復活したのは、1925(大正14)年のことです。

「武士道」とベースボール

このような時代のなかで、ベースボールを「武士道」と結びつけて、心の成長に役だてる考え方もあらわれました。

それは、「武士的野球」とも呼ばれて、今も日本のベースボールの特徴として、よく耳にします。

「武士的野球」を最初に強調したのは、1903(明治36)年頃の**一高**でした。

一高は、野球を精神修養の手段と考えて、真冬にも上衣を脱いでおこなうような苦しい練習にあけくれています。

選手たちは、それを侍の修行にたとえ、「武士的野球」と称していました。

けれども、ベースボールと「武士道」は、もともと生まれた時代も場所もまったく異なっています。

当時の人たちは、なぜ野球と「武士道」を結びつけたのでしょうか。その背景から調べてみましょう。

明治30年代の日本は、アジアへの侵略をねらう「帝国主義」の時代に突入していました。

しかも、1904(明治37)年には朝鮮半島の支配権などをめぐって、ついに**日露戦争**がおこります。

そんな軍事優先の世の中で、人々は精神面もふくめて常に力強く生きることを求められました。

その結果、昔の侍たちの心構えが「帝国主義」の方針にあうよう見直され、やがて「明治武士道」とも呼ばれる新しい道徳となっていきます。

それは、あたかも「武士道」という古びた城が、近代的な技術で再生したかのように、当時の日本社会にうけいれられました。

そして、この新しい道徳は、国家の利益を導くために利用されていきます。

たとえば、1904(明治37)年に戦場での弟の無事を願う詩(「君死にたまふこと勿れ」)を発表した**与謝野晶子**は、多くの人から臆病者で、国益に反するとまで非難されました。

当時の日本では、国の利益ために死ぬことが「武士道」の大前提だったのです。

そんな息苦しい世相のなか、**早稲田**の**安部磯雄**は、昔の侍たちがもつ「誠実さ」や「公正さ」に注目して、国の方針とは別の「武士道」をめざしていました。

そして、彼は、「スポーツ」という言葉さえあまり知られていない頃から「スポーツマンシップ」が、自分の考えている「武士道」と深く結びつくものだと確信しています。

安部は、1905(明治38)年に書いた文章で普段の心がけ次第により「野球は精神修養に非常なる効力がある」と述べて、運動選手こそ「武士道」を学ぶべきだと説いていました。

また、彼は**早稲田**の選手たちに「(試合に)負けることが泣くほど辛いものならば野球を止めた方が宜いではないか」と日頃から教えています。

このように、**安部**の主張する「武士道」精神には、勝つことだけにこだわって、スポーツの本当の歓びを知らない未熟な若者たちへの「人間としての成長を願う」大きな真心がこめられていました。

少年・少女たち

ところで、この明治30年代には、大人の男たちだけでなく小学生や今の中学校にあたる高等小学校・女子大学生にも「ベースボール」が流行しました。その様子もみておきましょう。

各地の小学校へ野球が普及しはじめたのは、明治20年代からです。1894(明治27)年の調査によると、青森・山形・岩手・茨城・東京・徳島の六校の師範学校(今の国公立の教育系大学)の付属小学校でベースボールが指導されていました。

明治30年代に入ると、男の子たちは、学校での活動だけでなく、放課後の遊びや地域のクラブチームでも野球に没頭していきます。

また、この頃には女性たちも「ベースボール」を楽しむようになります。

1902(明治35)年には、**日本女子大学校**(今の**日本女子大学**)で、五個の塁とテニスボールやラケットをつかう「**女子用ベースボール**」が流行しました。

それは、同校の体育教師・**白井規矩郎**（当時32歳）が、イギリスの**ラウンダース**(野球の原形のひとつ)をヒントに考えたゲームです。

その年の運動会でも披露され、多くの女子大学生が参加しました。

さらに、1902(明治35)年の**京都市第一高等小学校**（今の**京都市立上京中学校**）では、女子用に改良された「ベースボール」が人気をあつめます。

それは、ゴムのボールをつかって、バウンドさせた投球をテニスのラケットで打つというルールでした。

1904(明治37)年には、**京都市第二高等小学校**(今の**京都市立成徳中学校**)との対校試合もおこなわれています。

こうして、球音は日本中に響いていきます。

侍の精神は、元来が人を殺傷する技から発達しました。

けれども、**安部磯雄**など明治30年代の野球人たちは「武士道」に「スポーツによる人間形成」という新しい内容をつけ加えます。

そして、彼らは、良心の大切さに光をあて、厳しい戦争の時代をのりこえていきました。

このように「**武士道野球**」とは、古い道徳にとらわれず、ベースボールによって人々の「魂」を目覚めさせる画期的なこころみでした。

◎主な参考資料

『各府縣師範學校附属小學校 遊戯法』（白濱重敬・志々目清眞／1894年）
『女子適用ベースボール法』（京都市第一高等小學校〔編〕／1903年）
『最近野球術』（橋戸信／1905年）
『日本武士道史研究』（橋本實／1938年）
『早稲田大学野球部五十年史』（飛田穂洲／1950年）
『武士道の思想とその周辺』日本倫理思想史研究 第2（古川哲史／1957年）
『慶応義塾野球部史』（慶応義塾体育会野球部史編纂委員会〔編纂〕／1960年）
『野球の父　安部磯雄先生』（伊丹安廣／1965年）
『日露戦争の時代』（井口和起／1998年）
『にっぽん野球の系譜学』（坂上康博／2001年）
＊「◎野球闘技申込」（「静岡民友新聞」・1898年04月30日付 02面）
＊「村尾次郎氏の事ども」（吉田興山／「ファン」・1922年02月01 日発行）
＊「日本女子大学の体育発展に貢献した人々（５）」―初代体育教師，白井規矩郎について その４―（馬場哲雄・石川悦子／「日本女子大学紀要 家政学部」第37号 1989年02月20 日発行）

今回は **明治30年代の野球界** について少し調べてみました

一 武者は犬ともいへ、畜生ともいへ、勝事が本にて候 事、
「朝倉宗滴話記」宗滴様御雑談共はしぐ萩原覺

『日本教育文庫 訓誡篇』 中　同文館編輯局 編纂／1910（明治43）年06月25日 127頁より

【参考資料01】

そも、早慶戰は…斯うして始つた

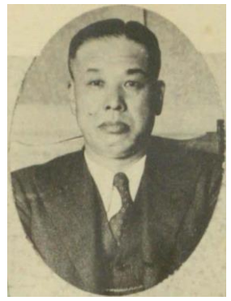
貴重な文献

高濱氏から泉谷氏への手紙發見

一枚の切符に血眼になりそれが手に入るなら徹夜位なんのそのといふほど全日本野球ファンの血を沸きたゝせる早慶戰だが－そのそもそもの始まりは一體どんなことで出來たのかといふことになると、日本野球史の編者もたゞ「早稲田から申込んで」といふ一言で片づけてゐるだけで詳しいいきさつは少しも分からない、ところがヒヨンなことから〝どうして早慶戰が始まつたのか〟を語る興味ある文献が發見された、そして日本野球史大半の頁を埋める早慶戰史の發端を物語るこの貴重な文献は廿八日から體協主催で開かれる商工奨勵館の運動具愛護展覧會に参考品として出品されることになつた

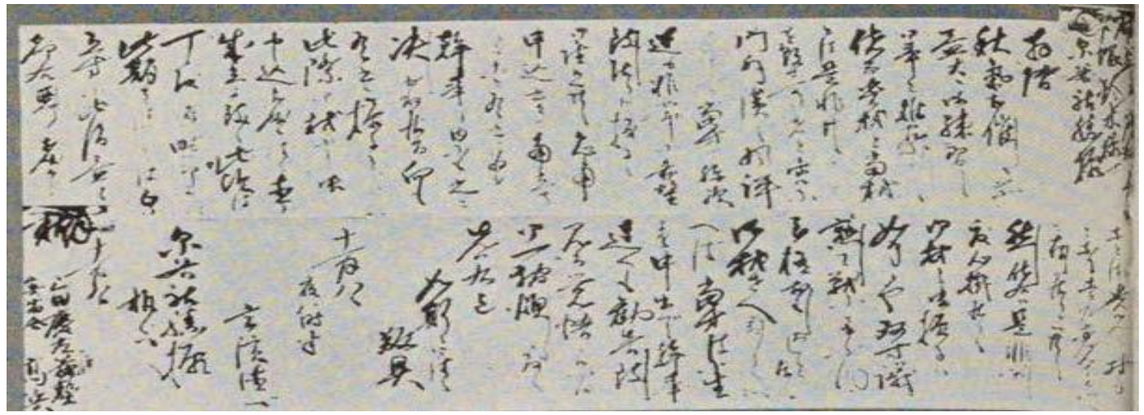


泉谷祐勝氏



高濱徳一氏

いま東京大學野球聯盟常務理事をやつてゐる早慶第一回當時の古強者泉谷祐勝氏がこの間荻窪の自宅で古い書類を整理してゐると古めかしい一通の手紙が出てきた、宛名は泉谷氏で差出人は慶應野球部高濱徳一氏、明治卅六年十一月八日の消印である、ハテなんだらうと思つて開けてみると端なくもこれが早慶戰の發端を語る貴重な文献であつたのだ、その原文は次の通りである



拝啓
秋氣相催し候所益大に御練習之御事と推察いたし候
偖　貴校と当校とは是非ともマッチを致す可き者と啻に門外漢之風評のみならず當方の彌次連も非常に希望致し居り候様子に御座候へ共兎角申込云々の角立ちたること有之候爲幹事乃内にも之を決しかね居る向も有之候様にてされば此際御校にて御申込相成候はば直に成立可致候　此頃は丁度よき時節に候へば此期をはずしては正に互方に此後益々都合悪しく相成申可く候と存ぜられ候　小生などは貴兄乃對手となること乃變んな者と存し居り候へ共然し仕合は是非いたし度心掛居候　御校之御様子は如何にや双方議熟して戰ふと云ふ風　至極おもしろしと存候御校さへよろしく候へば　當方は小生より申出幹事連へも勧告致し見る覚悟に候間御一報煩し度候　先は右迄如斯に御座候　　敬具
十一月八日夜八時半　　高浜徳一
泉谷祐勝様　机下へ

手紙を讀んでゆくうちに泉谷氏の頭の中には既に忘れてゐた當時の記憶が走馬燈の如く浮んできた－
明治卅六年の夏八月早稲田は安部先生の肝煎りで當時庭球部にゐた故橋戸信氏を引張つて來て主將に祭上げ押川、泉谷、鈴木等のメンバーを揃へて野球部を結成、暑中休暇を利用し、濱松中學のグラウンドを借用して合宿練習をやつた、一ケ月の練習で選手の自信は素晴らしく向上したが、さて自分達がどれ位の實力を有してゐるか試してみたくて堪らない
ところが當時は一高と慶應が二大強豪として斯界に君臨してをり、殊に一高などは新らしい出來たてのチームなどが辭を低うして　行つてもおいそれとやつてくれないやうな狀態であつた
そこで早稲田は一つ慶應へ申込まうといふことになつたが、果して慶應だつてやつてくれるかどうかは分らない、面と向つていつてお断りを喰つたのでは恥だ、一つその前に瀬踏みをしようと　なつた、そこで選ばれたのが泉谷氏である
「君は慶應の高濱とは同郷でよく知つてゐるから慶應がやるかどうか探つてくれ給へ」
といふ橋戸主將の頼みだ
泉谷氏は神戸一中、高濱氏は慶應普通部出身で中學は異るが共に神戸の生れ、町も隣り合せで夏休みともなれば泉谷氏を主將にして神戸クラブを組織し試合して廻る程の仲である
早速泉谷氏は戸塚からテクテク三田まで歩いて行つて（電車などまだない時分だ）高濱氏に逢ひ聲を潜めて慶應が試合して呉れるかどうかさぐつて欲しいと頼み込んだのである、そしてその返事が前掲　高濱氏の手紙となつて泉谷氏の許へ届き早稲田は公式に試合を申込んで大丈夫慶應が試合してくれるといふ自信をもつことになり改めて文書を以て挑戰狀を慶應に出しここに日本野球界に特筆大書される第一回の早慶戰が同年十一月廿日（廿一日ともいふ）三田球場行はれることになつた譯である
往時茫々夢の如し、手紙を書いた高濱氏も、受取つた泉谷氏も共にこの手紙が發見されるけふが日まで當時の事實を記憶してゐないといふから面白い

【寫眞はその手紙の一部】

偶然の發見

泉谷祐勝氏談

僕は古い物を大切にする性質をもつてゐるので大概の書類は残つてゐるとは思つたがこの間の書類整理の際あの手紙を發見した時はビツクリした、とにかく全然記憶にないことだつたからな、然し手紙を讀んでゆくうちにいろくと當時のことが思ひ出されて回舊の念に堪へなかつた、だがそんなことよりも當時十九か廿の高濱君の手紙が實に達筆で堂々たるものであるのには感心してしまつた、丁度それを見つけたところへ展覧會に何か出品してくれとの話があつたので早慶戰の發端を語るエピソードとして高濱君の諒解を求めて出すことにした

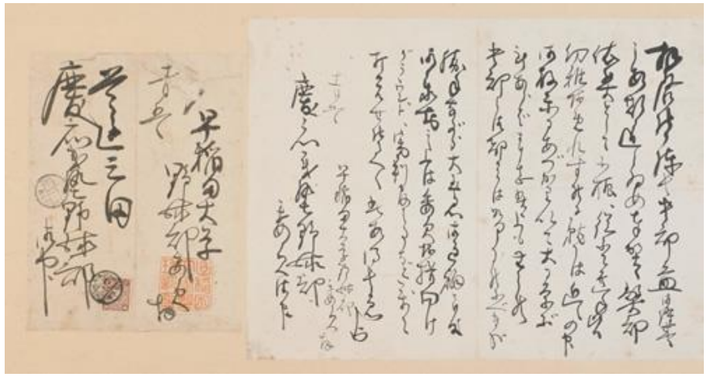
朧げに記憶

高濱徳一氏談

泉谷君から電話でその話を聞いたが突然でそんな手紙を私が書いたかどうか全然憶えてゐない然しあの頃泉谷君からせぶみしてくれといふ話のあつたことだけはいまでも記憶してゐる、當時の慶應は一高ほど氣位は高くなかつたが宮原さん、時任さんなどの時代で選手だといつてもまだ新參者の私が恐るく泉谷君からの話をすると、一體早稲田の野球つてのは學校で認めた部かどうか、なんでも橋戸などがやつてゐるさうだがメンバーがあるのかーなどといまの早稲田にいつたら殴られさうな話をしてゐたものです、泉谷君はその手紙は今の君より字がうまいぞなどとひやかしてゐたが、どうも展覧會などに出されるととんだ恥かきみたいなものです

「讀売新聞」１９３９(昭和14)年04月27日　朝刊より

【参考資料02】



早慶戦開始の挑戦状（慶應義塾福澤研究センター蔵）

拝啓仕候陳者貴部 益御隆盛之段斯道之為め奉賀候 弊部依然として不振、従ふて選手皆幼稚を免れず候に就ては近日之中御教示にあづかり以て大に学ぶ所あらば素志此上も無之候
貴部之御都合は如何に候ふべき哉
勝手ながら大至急御返翰被下度 御承知之上は委員を指向けグラウンド、審判官之事など万々打合せ仕るべく
此段得貴意候也

早稲田大学野球部
委員拝

十一月 五日
慶応義塾野球部

【参考資料03】

○シエツフハー及トムソン氏

破笠生

讀者諸君は口繪に於てシエツフハー及トムソンの容貌を知つたであらう、諸君は斯くして人物及其人の感想を聞きたいであらう、口繪に對して簡単に之を紹介して見やう。

已に知らるゝ通り兩氏共に大學卒業生である、共に財産家の子弟であるシエ氏は親もあり兄弟もある、トム氏は兩親はある けれども兄弟姉妹なく非常に可愛がらるゝ一人息子である、兩氏共にベースボールに依て研き上げたスポーツマンライクの紳士である、立派なる紳士として吾人が尊敬する處である、兩氏共に情の人であつて愛情に富んで居る、横濱へ着くと直に國元の兩親へ安着の電報を打た、兩親や兄弟に贈る土産として縮緬の婦人着物や寶玉の類を澤山買て嘸や兩親は喜ぶだらうなど笑をくづして語る處中々に愛嬌がある、口數は少いが時あつて實によく喋べる。

兩氏共現にニューヨークジヤイアントの選手である、殊に竹馬の友であつて無二の親友である、先年布哇で一番上手であつた サンタクラゝの捕手はシエ氏の從弟であつたが昨年の九月二十歳で死んでしまつたとて非常に殘念がつて居る、當地へ來ても寫眞立に從弟の姿を入れて毎日會て居る。

シエツフハー、トムソン二人とも日本來遊を望で居たのは久しい前からであつたそうぢや、彼等は非常な注意力を以て萬事を視察して居る在京一日にして主なる名所は皆見てしまつた、彼等が横濱へ上陸して人力車に乘た味が忘れられず一寸出るにも始終人力を擇ぶ、彼等の感想を聞くに第一に感じたのは萬事悉くスモールスケールの事である、身長までも此範に入ると云ふた之は外國人すべての必ず云ふ處である。

更に日本は東洋の一大ガードンであると聞たが實に然りだが惜しいことには季節が冬であると自ら云ふ居る、然し未だ雪を見ない、是非今度見たいと云て居る。

東海道の汽車中で日本語の研究に熱中して居た「アリガトウ」「コレイクラデスカ」「オハヨ」「サヨナラ」「コンバンハ」等は能く覺えた、富士の景色、濱名湖の景色はサスガに稱へて居た。

但し日本歴史に有名の所などは何等趣味を有たぬ、あれは名古屋城とて戰國時代に建てたカツスルだなぞと云ても少しも注意を引かない、而して今彼等は毎日練習時の外は市内見物であつて何處に大佛があり何處に何の宮ありなぞ實に委しく知て居る彼等が研究的態度である事は著しい事實である、二人が寫眞機を所持して毎日何枚となく色々のものを寫して居る、殊に日本の婦人振袖の處女に深くインテレストを有て居て頻りに寫して居る。

終に臨んで彼等は一滴の酒、一本の煙草も喫することなく衛生に對しては深きく注意と決心を持て居る事は大いに學ぶべき處である、而してコーチに非常な熱心と親切を有する事を紹介して置きませう。

「月刊ベースボール」第04巻第01号 1911（明治44）年01月10日より

【参考資料04】

早慶野球戦（第一回	明治36年11月20日	三田球場）											
慶應	0	2	1	2	0	0	2	4	0	11			
早大	0	5	1	0	0	0	2	0	1	9			
早慶野球戦（第二回	明治37年06月04日	三田球場）											
早大	2	0	2	1	0	3	3	0	2	13			
慶應	4	0	1	2	0	0	0	0	0	7			
早慶野球戦（第三回	明治37年10月30日	戸塚球場）											
慶應	3	0	0	0	1	1	0	3	0	8			
早大	0	2	1	5	3	0	1	0	A	12			
早慶野球戦（第四回	明治38年03月27日	三田球場）											
早大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
慶應	0	0	0	0	0	0	0	0	A	1			
早慶野球戦（第五回	明治38年10月28日	三田球場）											
早大	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
慶應	3	0	0	0	1	1	0	A	5				
早慶野球戦（第六回	明治38年11月09日	三田球場）											
早大	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1			
慶應	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
早慶野球戦（第七回	明治38年11月12日	早大球場）											
早大	0	0	1	0	0	0	0	0	2	3			
慶應	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2			
早慶野球戦（第八回	明治39年10月28日	早大球場）											
早大	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1			
慶應	0	0	0	2	0	0	0	0	A	2			
早慶野球戦（第九回	明治39年11月03日	三田球場）											
早大	0	0	0	1	0	0	0	2	0	3			
慶應	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
早慶野球戦（第十回	明治39年11月20日	中止）											

【参考資料05】

○エール大學と第一高等學校 此程來米國のエール大學より東京の第一高等學校へ對しベースボールの競技を申込み來りたりとの風説ありしが今聞く所に依れば先月中旬頃の事なりとかエール大學の學生なる日本人白洲某氏より其友人なる高等學校生徒某氏への私信の端に若し貴校生徒諸子に於てエール大學の學生とベースボールの競技をなすことを辭せざらんには小生及ばずながら周旋の勞をとるべしと言越したるより同校生徒中の有志者は目下其回答に付き内相談中なりといふ又前記白洲某氏は嘗て京都の同志社に在りてベースボールには有名の人なりとか

「時事新報」１８９８（明治31）年04月20日（06）より

◎野球闘技申込 曩に第一高等學校生は東京及横濱に於ける外人との野球闘技に勝利を獨占せしかばその勇名は忽ち海外にも轟く所となり今回ピツチヤー、キヤツチアーに強の者ありと知られ勇者中の勇者と稱讃せらるゝ米國エール大學遊技部より第一高等學校野球部へ書を寄せて闘技を挑み貴校野球部の人々米國に渡來するか我れ貴國に到らんか旅費その他の費用は敗者の負擔に歸せしめんとの條件を以て申込み來りしと云ふ

「静岡民友新聞」１８９８（明治31）年04月30日（02）より

害毒論争とデモクラシー

明治40年代の野球問題



押川春浪（1876-1914）



「野球と其害毒」（第 01 回の冒頭部分）

ベースボールが伝来して 30年。20世紀のはじめには、日本中で大人から子供まで、野球に親しむようになっていました。

当時の男の子たちは、バットとボールだけで、日暮れまで無邪気に遊んでいます。

また、女子大学生たちも、テニスのラケットをつかった「ベースボール」に歓声をあげていました。

そして、1904(明治37)年になると、**早稲田**と**慶応**が、あいついで**一高**に勝ち、野球界に華々しい「**早慶時代**」がおとずれます。

けれども、その頃から各地で試合の結果をめぐる暴力事件などが、めだつようになりました。

さらに、一部の若い選手たちの生活態度にも問題がありました。そんな状況のなか、ベースボールを罪悪視する人たちもでてきます。

今回は、明治時代のおわりにまきおこった「**野球害毒論争**」とは何であったのか、その歴史的な意味をあらためて調べてみました。

慶応・早稲田の海外交流

さて、よく知られているように明治40年代（1907年から 1912年）の日本では、**早稲田**と**慶応**が野球界をリードしています。

しかし、その交流は、1906(明治39)年の応援をめぐるトラブルで中断されていました。

そこで、両校は海外との関係をふかめて技をみがいていきます。

まず、1907(明治40)年には、**慶応**がハワイから「**セントルイス・カレッジ**」という球団をまねきます。

このチームは、ホノルルにある今の**セントルイス高校**を卒業した社会人のあつまりでした。

また、翌年(1908年)には**慶応**がハワイへ遠征し、**早稲田**が招いた「**ワシントン大学**」や野球を職業とする「**リーチ・オール・アメリカン**」が来日します。

その後にも、1909(明治42)年に**慶応**が「**ウィスコンシン大学**」を1910(明治43)年には**早稲田**が「**シカゴ大学**」をまねくなど、外国の強豪チームが続々と日本へやってきました。


Fuller Thompson


Arthur J Shafer

さらに、**慶応**は 1910(明治43)年の 12月下旬からおよそ三週間にわたって、**アーサー・Ｊ・シェーファー**(当時、現役の大リーグ選手21歳)と**フューラー・Ｗ・トンプソン**（**ロサンゼルス高校**の投手として 1905年に遠征中の**早稲田**との試合にも出場21歳）のふたりから神戸で最新の「科学的ベースボール」の指導をうけます。

そして、1911(明治44)年の春から夏までの間に、**早稲田**は二度目、**慶応**は初めてのアメリカ本土への遠征を別々に実行しています。

なお、当時は一部の例外をのぞき来日した外国チームとのゲームにかぎって有料で試合がおこなわれていました。

「野球害毒論争」のおこり

そんな状況のなか、1910(明治43)年秋から翌年にかけ、野球界の現状を批判する新聞がありました。

今の「**朝日新聞**」の前身のひとつ「**東京朝日新聞**」（以下、「**朝日**」と略記）です。

「**朝日**」は、海外からまねいたチームと入場料をとってまで試合をすることの是非や選手たちの私生活の乱れなど、ときに実名をあげて指摘する厳しい記事を折々に書いていました。

そして、1911(明治44)年08月29日から「**野球と其害毒**」と題し、主に教育関係者への取材と独自の事前調査にもとづいた連載を開始します。

これが、「**野球害毒論争**」の直接のはじまりでした。

連載の初日に登場したのは、当時の**一高**の校長・**新渡戸稲造**です。彼は、野球は悪く言えば「巾着切（スリのこと）の遊戯（スポーツ）」で「對手を常にペテンに掛けよう、計略に陥れよう、壘を盗まうなどゝ眼を四方八面に配り神経を鋭くしてやる遊びである」と主張し、「何處の學校の野球選手でも剣道柔道の選手の様に試合をする時に禮を盡さぬ」などと述べています。（冒頭の図版）

新渡戸の発言は、彼にとって不本意な形で書かれてしまったのかもしれません。

けれども、社会的にも信頼されていた大新聞が、ベースボールは「**スリのスポーツ**」で、野球選手は「**不作法な礼儀知らず**」と決めつけました。その波紋は、大きくひろがります。

大きな波紋

「**朝日**」に対し、いち早く反論したのは「**東京日日新聞**」（今の「**毎日新聞**」の前身）でした。

09月01日からの連載「**學生と野球**」で、人気作家の**押川春浪**は、問題の記事を

「将に大発展を爲さんとする我が野球界の前途を呪ひ、天下幾百萬の學生に對して、極度の侮辱を加へたる而已ならず、之を天下に廣告して、新聞販賣の一手段と爲しつゝあり。」と痛烈に反論します。

また、その他の新聞も、この問題を「**朝日**」に反対の立場で次々ととりあげました。

たとえば、「**読売新聞**」（今の「**読売新聞**」**東京本社**）では、「**問題となれる野球**」という連載を09月の03日から開始します。

そこでは、**永井道明**（**東京高等師範教授**）・**鎌田榮吉**（**慶応義塾長**）・**高田早苗**（**早稲田大学長**）などが、野球の長所や短所について意見を述べています。

さらに、「**国民新聞**」（今の「**東京新聞**」の前身のひとつ）では、09月06日から五日間連続で「**野球の利害**」。

「**中外商業新報**」（今の「**日本経済新聞**」）は、09月07日から18日まで「**野球界春秋戦國**」などの記事を掲載しています。

こうして、「**野球と其害毒**」をめぐる問題は、短期間で多くの人が注目する大論争へと発展していきました。

そのなかで「**朝日**」は、その頃の日本の野球界への批判を22回にわたりくりひろげます。

しかも、この連載記事には**乃木希典**（**学習院長**）や有名中学の校長などが次々に登場しました。

けれども、彼らの談話には、今からみると根拠のない珍妙な意見もふくまれています。

たとえば、「野球に熱中すると粗暴になる」とか「脳に悪い影響がある」と真面目に主張する人もいました。

また、この「**朝日**」の連載では、明らかに取材をうけた人の意思に反する不誠実な内容もふくまれていました。

そのため、談話者のひとり**河野安通志**（早稲田の元投手）は、「**朝日**」に対する抗議文を「**東京日日新聞**」に寄稿して、記事の訂正を二度も求めています。

そして、「**東京日日新聞**」は、**押川**につづき、09月 09 日から 7 回にわたり**安部磯雄**の「**野球の爲に辨ず**」という文章を掲載しました。

安部は、「**朝日**」の記事が「野球そのものへの批判」と「選手への非難」を混同していると分析します。

そのうえで、**安部**は何人もの談話を間違って伝えている事実から、その他の意見も信用できないと指摘しました。

さらに、「**読売新聞**」の反論は紙上だけにとどまりません。

「**野球問題大演説会**」を何日も前から準備して、09月16日に開催しました。

この演説会では、**押川春浪**や**安部磯雄**・**河野安通志**などがベースボールの利益を説き、満場の聴衆から喝采をうけます。

また、同様の演説会は、**天狗倶楽部**（押川を中心とするスポーツ社交団体）の主催で、09月23日にも開かれています。

「**朝日**」は、追いこまれた不利な情勢のなかで、事前のアンケート調査の結果として「全国の大多数の中学は、野球を有害と認めた」と発表し、09月19日に予告もなく突然に連載をおえました。

それは、記事への批判が社内からもふきだしたためとも言われています。

こうして、日本で最初の本格的な「スポーツ論争」をまきおこした「**野球と其害毒**」は、あっけなく幕をとじました。

他の新聞も 09月24 日までに関連する記事の掲載を終了します。

「一等国」の現実

では、この白熱した論争には、どんな背景があったのでしょうか。

明治40年代の日本は、ロシアとの戦争（**日露戦争**1904-1905）を経て、欧米にせまるアジアで唯一の帝国主義国になっていきます。

当時の流行語は、「**一等国**」でした。

そのなかで、軍部は、ますます勢力を拡大していきます。

1907（明治40）年には、早くもアメリカを敵とみなした「**帝国国防方針**」がつくられ、次の戦争の準備にとりかかっています。

けれども、その頃の人々の生活は、世界的な不景気の影響もあり、都市には失業者、農村では土地を手放す人が絶えませんでした。

そして、指導者たちへの不信から民衆を主役とする考え方がめばえていました。

きっかけは、1905（明治38）年に東京でおきた民衆の暴動（**日比谷焼き打ち事件**）にさかのぼります。

日露戦争（1904-1905）では、およそ12万人の死傷者をだしたのにロシアから少しの代償しか得られませんでした（**ポーツマス条約**）。

それは、戦争に耐えていた民衆にとって、ますます生活が苦しくなることを意味していました。

そこで、人々は、条約に猛反対して戦争の続行を求める大集会をひらきます。そして、政府への不満と将来への不安とが、いっきに爆発し、取り締まりの警察と激しく衝突したのです。

この暴動は、見方によれば民衆が平和よりも国の利益を追求するという「帝国主義の毒」におかされて、過激な行動をしたとも考えられます。

しかし、思想家でもない普通の人々が公然と政府へ反抗したのは、この事件が最初でした。

それ以来、人々は「自分の思いを誰に対しても、はっきり伝える権利がある」と自覚します。

それは、新しい「民衆の時代」を予感させる画期的な考え方でした。

また、軍隊でも**日露戦争**の後には、規律の乱れが問題化しました。

たとえば、軍法会議での処罰者は年ごとにふえて、1908(明治41)年には、一年で2000人をこえました。

ある新聞は、「軍人の逃走は近來の流行物」とまで書いています。

さらに、軍の施設や大企業で働く人たちのストライキも、さかんにおこっていました。

これらは、たとえ国家や軍隊の方針であっても忠誠心などを強要するだけでは、民衆が従わなくなったことを示しています。

しかし、他方では多くの人たちが、実質のない「**一等国**」意識にうかれていた面もあります。

たとえば、株や軍に関係する仕事でかせいだ一部の「**成金**」たちは、高価な輸入品を買いあさり、派手な浪費生活におぼれていきました。

戊辰詔書・大逆事件

このような世情のなかで、国の指導者たちは、1908(明治41)年に天皇の言葉として「**戊辰詔書**」という文書を発表します。

そこには、「すべての国民が心をひとつにし、仕事にはげみ、節約にもつとめ、日本をさらに発展させよ」と書かれていました。

指導者たちは、天皇の名において、国民の気持ちをひきしめて、政府への反発をおさえつけようとします。

そして、「**戊辰詔書**」の発表後には、各地で国に協力する青年団や婦人会がつくられて、帝国主義の支配体制が整えられました。

また、学校では、スポーツが規則・命令に従う「国家的精神」や

秩序・礼節をおもんじる「社会的感情」を養成するための「手段」としてつかわれるようになっていきます。

さらに、その頃から一部の人たち(社会主義者)への取り締まりが、過酷さを増しました。

その結果、1911(明治44)年には、事実無根の天皇への反逆の罪で、**幸徳秋水**など12名が処刑されています（**大逆事件**)。

害毒論争の意義

このように明治40年代は、社会の矛盾が噴出した時期です。

押川春浪は、そんな状況を「警戒すべき日本」とみて、野球などのスポーツによって若者たちの奮起をうながしていました。

また、若き詩人の**石川啄木**は、「強権の勢力は普く國内に行亘ってゐる」と嘆いています。

そして、学校教育でも剣道や柔道がもてはやされ、外来スポーツのベースボールは、日本人にふさわしくない「華美な娯楽」とされる傾向が一段と強まりました。

「**野球害毒論争**」は、そんな時代に突如としてまきおこっています。

そもそも「**朝日**」の主張は、「**戊辰詔書**」にもとづく時流にそっていました。けれども、野球を「スリのスポーツ」ときめつけるなどベースボールの基本的な理解にも欠けています。

それが、**押川春浪**などから強く反発された原因でした。しかし、**押川**をはじめ野球関係者たちも少し感情的になっていました。

そのため、この論争には、すっきりとした結末がなく、新聞各社の販売競争に利用された、とも言われています。

けれども、この論争では、スポーツが国家によって歪められようとしていた時期に、ベースボールを支持する人も、否定する人も、

様々な意見を自由に述べあっていました。

それは、「次の時代へのさきがけとなる議論であった」と考えられないでしょうか。

「**大阪朝日新聞**」（今の「**朝日新聞**」**大阪本社**）は、この論争を教訓として、1915（大正04）年に、第01回**全国中等学校優勝野球大会**（今の**夏の甲子園大会**の前身）を開催しています。

新しい時代へ

ところで、明治40年代には今の**社会人野球**につづく新しい活動もはじまっていました。

たとえば、1907（明治40）年には、北海道で**函館太洋倶楽部**（通称、**函館オーシャン**）が結成されます。

また、1909（明治42）年になると、**札幌鉄道管理局**（今のＪＲ北海道）でも野球部ができました。

そして、1911（明治44）年には、**水野商店**（今の**美津濃株式会社**）が創業者・**水野利八**の発案で、**大阪実業団野球大会**（今の**都市対抗野球大会**の母体）を開催します。

しかし、当時の学生野球界では**早稲田**と**慶応**の関係が悪化していました。そこで、その交流を復活させようと様々な工夫がされます。

たとえば、1907（明治40）年には、横浜のＹＣ＆ＡＣが中心となり、「**京浜リーグ**」という**慶応**と**早稲田**をふくむ組織をつくりました。

けれども、**早稲田**と**慶応**のゲームは実現せず、活動も短期間しかつづきません。

ようやく、**慶応**と**早稲田**の先輩たちによる試合（**三田・稲門戦**）がおこなわれたのは、1911（明治44）年の10月でした。

また、この頃になると旧制の高等学校などが主催する各地の大会も多くなります。

たとえば、1907(明治40)年からは岡山の**六高(旧制第六高等学校)**が**近県連合野球大会**を開催しました。

1910(明治43)年には、**押川春浪**が中心となり東京の**中学野球大会**も、はじまっています。

そして、1911(明治44)年からは、金沢の**四高**が**北陸関西野球大会**、仙台の**二高**が東北地方の中学野球大会を開くようになっていました。

しかし、今の高校にあたる各地の中学・実業学校で、明治40年代に野球部が創設されたのは、

1908(明治41)年に創部の京都の**平安中学**(今の**龍谷大平安高校**)、1910(明治43)年につくられた徳島の**徳島商業**(今の**徳島商業高校**)などわずか30校あまりにすぎません。

なお、全国の**中等学校**(今の高校)以上の学校で、1912(明治45)年までに野球部が活動をはじめていた学校は、およそ300校でした。

たとえて言えば、明治時代の日本は、天皇制の屋根の下に軍隊という大きな柱をつくり、アジアの弱い人たちを敷石にして帝国主義の城を築いていきました。

しかし、そんな時代にも、人々はベースボールについて熱く語りあっています。

明治時代の野球人たちは、一本のバットによってデモクラシーの世界へと導かれていったのかもしれません。

「明治」は、この「**害毒論争**」のあった翌年(1912年)07月30日におわりました。

◎主な参考資料

『戊申詔書衍義』(建部遯吾／1908年)

『野球と學生』（安部磯雄・押川春浪［共著］／1911年）

『明治末期社会教育観の研究』野間教育研究所紀要 第20集（倉内史郎／1961年）

『スポーツは陸から海から大空へ』水野利八物語（美津濃株式会社［編］／1973年）

『白球太平洋を渡る』日米野球交流史　中公新書447（池井優／1976年）

『熱血児押川春浪』野球害毒論と新渡戸稲造（横田順彌／1991年）

『明治四十三年の転轍』―大逆と殉死のあいだ―（河田宏／1993年）

『ベースボールの社会史』ジミー堀尾と日米野球（永田陽一／1994年）

『日本の産業革命』日清・日露戦争から考える（石井寛治／1997年）

『帝国国防方針の研究』―陸海軍国防思想の展開と特徴―（黒野耐／2000年）

＊「戦後の軍人」（「日刊平民新聞」・1907年02月23日付　02面）

＊「いわゆる「野球害毒論」の一考察」（木村吉次／「中京大学論叢」第03号・1961年）

＊「「野球害毒論争」（１９１１年）の実相に関する実証的検討」
―新聞各紙の論調分析を通じて―（秦真人・加賀秀雄／
「総合保健体育科学」第13巻第01号・1990年）

今回は **野球害毒論争** について少し調べてみました

Universal Declaration on Democracy　民主主義に関する世界宣言

5. A state of democracy ensures that the processes by which power is acceded to, wielded and alternates allow for free political competition and are the product of open, free and non-discriminatory participation by the people, exercised in accordance with the rule of law, in both letter and spirit.

Declaration adopted without a vote* by the Inter-Parliamentary Council at its 161st session

*After the Declaration was adopted, the delegation of China expressed reservations to the text.

5. 民主主義国家は権力が譲り受けられ行使され交代する過程が自由な政治的競争を可能にするものであり、文字と精神の両面において法の支配に従って行使される国民による開かれた自由で差別のない参加の産物であることを保証する。

国際議会同盟の第161回議会において無投票*で採択された宣言（カイロ、1997 年 09 月 16 日）より

*宣言が採択された後、中国の代表団はテキストに留保を表明した

https://www.ipu.org/impact/democracy-and-strong-parliaments/ipu-standards/universal-declaration-democracy

野球史デジタル資料室 007-11

【参考資料01】

●野球と其害毒

新渡戸一高校長談

近年野球の流行盛なるに從ひて弊風百出し青年子弟を誤ること多きを以て本紙は屢々其眞相を記して父兄の參考に供する所ありたり然るに野球に狂せる一派の人々は本紙の記事が己に便ならざるを以て種々卑劣なる手段を以て本社に妨害を爲し或は擔當記者に對して迫害を加へんとす然れども本社が青年の前途に對する忠實なる憂慮は此に依つて益々切ならざるを得ず茲に數名の記者を派して教育に關係ある先達の公平なる意見を聞き以て最後の鐵案と爲さんと欲す

▲新渡戸一高校長談

▽野球は賤技なり剛勇の氣無し

▽日本選手は運動の作法に暗し

▽本場の米國既に弊害を嘆ず

▽父兄の野球を厭へる實例



私も日本の野球史以前には自分で球を縫つたり打棒を作つたりして野球をやつた事もあつた 野球と云ふ遊戲は悪く云へば

▲巾着切の遊戲　對手を常にペテンに掛けよう、計略に陷れよう、壘を盜まうなど、眼を四方八面に配り神經を鋭くしてやる遊びである、故に米人には適するが英人や獨逸人には決して出來ない、彼の英國の國技たる蹴球の様に鼻が曲つても顎骨が歪むでも球に噛付いて居る様な勇剛な遊びは米人には出來ぬ、一體日本の野球選手は作法を知らぬ、昨年早稲田であつたかと　思ふが輕井澤で外人と試合をして審判上の紛擾から虚言家と或る一選手が云つた、すると外人は非常に怒つて虚言家とは何事であると其儘試合は中止になつた、米國では虚言家と云はるゝ事は泥棒と云はるゝと同じであるのだ

▲野球選手の不作法　是はホンの一例に過ぎぬが何處の學校の野球選手でも劍道柔道の選手の様に試合をする時に禮を盡さぬ、然らば米人が野球をする時にもそんな禮が無いかと云へば決してさうでなくスポーツマンライクと云つて非常に禮義正しいものである 日本語に譯して「運動家らしい」と云ば何だか禮義も知らぬ破落漢の様に聞えるのも日本の運動家の品性下劣から來て居る、昨今大分野球の對校試合や洋行が流行の様であるが、本國の米國では其弊の極、昨年紐育州立大學總長マツクラカン氏が主唱となつて學校同志招聘したり招聘されたりする弊風の防止に努め、先づ大學に一流二流を定めて一流大學は一流大學とのみ交際すること、し、且學校の授業の妨害にならず、費用も澤山かゝらぬ範圍内に規約を定め大學同盟を組織した、日本に於ても野球試合に何等かの

▲制限を附する必要　がある 此處に最も憂ふべきことは私立は勿論の事官公立の學校と雖も選手の試驗に手加減をすることがあり得ることである、若し一選手が落第でもしさうになると他の選手が教師の處に來て、先生實は彼の人は能く出來る人でありますけれども、試合前でしたから私等が無理に運動場へ引出しましたから出來なかつたんです、先生もご承知の通り彼の人は平生出來るんですから今度の學期には勉強させますから、と懇願されると、生徒の平常を知つて居る教師はつい手加減をするに至るのである 父兄が野球の選手になることを好まぬのは非常なもので、

▲澤山の父兄の懇請　私は幾人か數を忘れた位澤山の父兄から其子弟に野球選手を止める様に忠告して下さい親兄弟では云ふ事を容きませぬから、と賴まれた云々（座に法制局參事官法學士柳田國男氏あり曰く）



野球は官私立共に色々の弊風がある様です、第一私等は選手等の未來が心配です、利口なものは大抵高等學校の中は選手をしても大學に行けば止めるか制限をするが、私 達の様に大學卒業迄も野球で騒いで居ては卒業後困りませう、私の甥は今年一高へ入りましたが體格も成績も良いから選手になれと勸誘されるかも知れませんが、若しそんな事があれば私は出掛けて行つて打壞してやる考へです

「東京朝日新聞」１９１１(明治44)年08月29日（06）

●野球と其害毒（廿二）

▲全國中學の調査

▽大多數は野球を

▽有害なりと認む

曩に本社は野球の弊害に就いて遍く公平なる識者の意見を聞いて連載すると同時に又廣く全國中學校及同程度以上の學校長諸氏に對し其の經驗せられたる教育上の利害に關して數項に別ちて其意見を糺した、是れ一に野球に對して公平且眞面目に其利害を比較せん所志に外ならぬのである、幸にして既に百四十四通（十八日迄の調査）の回答を得て其中の數者は既に紙上に發表したが更に其回答の全部に依つて統計的に研究の結果不幸にして吾人が先づ感じた如く現在に行はれつゝある野球の教育上に及ぼす弊害は、其利益よりも多大である、事を確實に證據立つるに至つたのである　卽ち回答總數の中運動場の都合、學校の方針にて野球部の設置なきもの卅八校、野球部あるも創立日尚淺くして未だ其利益の程度を知る能はざるもの九校　都合四十七校を省き殘り九十八校に就て之をみるに

利害共に在り其比較程度不明　十一

害ありて利なし　九

弊害利より更に大なり　六十四

利ある者　七

利害を認めず　三

大略左の如くに分類される

▲有利論　更に是を細別して見ると野球に利ありとする論者の重なる點は第一に團體競技として興味多きこと他の諸遊戲に勝る事、第二に野外遊戲として適當なる事、第三敏捷なる行動と團體の爲に自らを犧牲にする美點を養成する事等である

▲有害論　弊害を認むる論者の説は第一多大の時間と場所を要するの缺點ある事、第二興味ある丈熱中し易く從て學業の成績不良に赴く事　是は各自所屬の學生の成績に徵して明かなる事、第三粗暴に流れ虚榮に傾き酒食に耽り品性劣惡に傾く傾向ある事、第四少數の選手に依りて廣き運動場を占有され一般學生の運動を妨害する事、第四近時流行の應援の如きも一校の學生をして不規則不眞面目に陷らしむる事、第五身體の發育に不自然を來し往々肋膜炎、神經衰弱、不具となりたる實例多き事等で且對校試合に至つては一層其弊害が多い、要するに學生の遊戲としては多大の弊害を伴ふと同時に學生運動としては第一、第四の如き缺點ある事を以てして居る

▲有利論者も認むる害　野球に利益多しと云ふ論者も弊害の中成績品行の降下は是を十分に認知して居る人が多いので回答中

品行學業不良　四十七

成績佳良に向ふ　一

變化を認めず　七

と云ふ風に、野球を行ふ結果健全なる身體は健全なる頭腦を造ると云ふ運動の本旨と全然相反した結果を現して居る、そして「變化を認めず」との回答をした學校では其前書に選手は或制限の點以下の者は選手たらしめざる規定なれば選手は何れも成績品行共に不良の者に非ずと云ふのである、要するに利害共に程度の問題であるが其問題は此の結果に依つて略思ひ知る事が出來よう

▲禁止と制限　次で來る可き問題は既に此の如き弊害がある以上學校として何う云ふ處置を執る可きか　野球に利ありとする七校は勿論選手を作り對外試合を奬勵して居るが弊害を認めた學校では野球並に此の對校試合を絶對に廢止するか或は相當の制限を加へて生徒の嗜好を滿足させる二つに止まる　卽ち

絶對禁止せる校　廿九

制限許可せる校　二十

對校仕合の如きは絶對に禁止し一切選手を設けずと云ふ趣旨が前者に屬し野球其物には弊なくして是に恥る結果弊害が生ずるのであるから十分の監督と制限を加ふればそれで澤山だと云ふのが制限説である　是等は何れも選手の資格は平均點何點以上に非ざれば選手たるを得ず一日何時間以上は練習すべからず對校仕合は或る條件の下と云ふ樣にして野球技に伴ふ弊害を防止しようとして居る樣である　然し大體に於て何れも現在の野球が多くの青年に弊害を流しつゝある事は一點疑ふ可からざる事實である

然らば如何にして此弊害を防ぎ且芟除すべきか、幾多の問題は尚殘つて居るが、從來不眞面目なる學校經營者や彌次馬連に依つて過當に其利益を鼓吹せられたる野球の裏面に潛める弊害を直言して天下の青年と其父兄及び教育者に對し警告せんと企てた所の目的は數十日來の連載に依つて略之を達したと考へるから茲に本記事を終結せしめるのである　野球擁護の人々と雖も又旣に吾人の言の幾分は否定し難きものがあつたであらう若し虚心に其利害を察して從來の弊根を斷ち更に健全なる發達を圖つたならば獨り諸君の快を取る所以なるのみならず亦天下青年の幸である（完）

「東京朝日新聞」1911（明治44）年09月19日（06）

【参考資料02】

日付 1911年	東京朝日新聞		東京日日新聞		読売新聞		國民新聞	中外商業新報
	論者（所属・職業）	題目	論者（所属・職業）	題目	論者（所属・職業）	題目	論者（所属・職業）/ 題目	論者（所属・職業）/ 題目
08月29日	新渡戸稲造（第一高等學校長）	野球は賤技なり剛勇の氣なし 日本選手は運動の作法に暗し 本場の米国既に弊害嘆ず 父兄の野球を厭へる實例						
	柳田國男（法制局參事官・法學士/民俗学者）	野球は官私立共に色々の弊風がある						
08月30日	川田正澂（府立第一中學校長）	野球選手希望者は入學拒絶 野球の爲め品格堕落の實例						
08月31日	福原鎗二郎（専門學務局長）	疑問又疑問						
	田所美治（普通學務局長）	野球は有害　日本の學制と適せず						
09月01日	中村安太郎（静岡中學校長）	野球は多く堕落の機會を作る 父兄は子弟の野球禁止を望む	押川春浪（天狗倶楽部代表・SF作家）	學生と野球 侮辱せられたる學生界の爲に辯ず （大虚言家新渡戸博士（上））				
09月02日	廣田金吾（攻玉社講師）	地方中學に於ける弊害 衛生上極て有害の例證	押川春浪（天狗倶楽部代表・SF作家）	學生と野球 侮辱せられたる學生界の爲に辯ず （大虚言家新渡戸博士（下））	天狗倶楽部（押川春浪） （天狗倶楽部代表・SF 作家）	天狗倶楽部連の憤慨		
	早稲田大学講師某氏	早稲田大學の爲に惜む						
09月03日	米国人某氏	日米大學の相違	押川春浪（天狗倶楽部代表・SF作家）	學生と野球 侮辱せられたる學生界の爲に辯ず （更に大虚言家新渡戸博士に與ふ）	永井道明（東京高等師範校教授）	問題となれる野球(一) 野球の利害　教育と野球　國技とすべきか		
09月04日	永井道明（東京高等師範校教授）	運動の本旨を沒却せる日本の野球	押川春浪（天狗倶楽部代表・SF作家）	學生と野球 侮辱せられたる學生界の爲に辯ず （更に大虚言家新渡戸博士に與ふ）				
09月05日	河野安通志（早稲田大学講師・天狗倶楽部）	舊選手の懺悔	押川春浪（天狗倶楽部代表・SF作家）	學生と野球 侮辱せられたる學生界の爲に辯ず （果たして無用の時間歟）	高田早苗（早稲田大學長・法學博士）	問題となれる野球(二) 體育上から見た野球　娯樂としての野球 弊害は矯正すべし		
09月06日	松見文平（順天中學校長）	根本的に野球を排す	押川春浪（天狗倶楽部代表・SF作家）	學生と野球 侮辱せられたる學生界の爲に辯ず （選手の将来如何）			野球の利害(一) 大隈重信（早稲田大學總長・伯爵） 青年は盛んに運動すべし	
	寺尾熊三（山梨縣都留中學校長）	弊害百出						
09月07日	加納久宜（日本体育会長・子爵）	運動の旨意に離る	押川春浪（天狗倶楽部代表・SF作家）	學生と野球 侮辱せられたる學生界の爲に辯ず （優秀なる選手の實例）	坪井玄道（体育學者・元高等師範學校教授）	問題となれる野球(三) 體育界の貢献夥し成人に課すべし 米國に見る弊害　精神的利益多大	野球の利害(二) 鎌田榮吉（慶應義塾々長） 野球は實際的修身科なり	野球界春秋戰國(一)
	米国人某氏	日本學生と野球						
09月08日	田中道光（曹洞宗第一中學校長）	選手悉く不良少年	河野安通志（早稲田大學講師・天狗倶楽部）	學生と野球 野球に對する余の意見	鎌田榮吉（慶應義塾々長）	問題となれる野球(四) 眞價は德育上に在り　野球は利多く害多し 對外競技を可す	野球の利害(三) 鎌田榮吉（慶應義塾々長） 野球は實際的修身科なり	野球界春秋戰國(二)
	角谷源之助（静岡師範學校長）	根本的改良要す						
09月09日	菊池謙二郎（水戸中學長事務取扱）	野球の弊害と改善	安部磯雄（早稲田大學野球部部長）	學生と野球 野球の爲に辯ず（競技としての野球）	小泉又一（文部視學官）	問題となれる野球(五) 青年の體育に適せず精神の訓練主とす 在米中の面白い所感　入場料徴収は尚早	野球の利害(四) 高田早苗（早稲田大學長・法學博士） 何たる無禮の言ぞ	野球界春秋戰國(三)
09月10日	中野（早稲田中學幹事・文學士）	優等生が落第生になる	安部磯雄（早稲田大學野球部部長）	學生と野球 野球の爲に辯ず（運動家の監督）	三土忠造（代議士）	問題となれる野球(六) 遊戯極端に傾く　野球は國技に不適當 將來の國技は何物	野球の利害(五) 長與又郎（醫學博士・元一高野球部） 野球は最好の健康法なり	野球界春秋戰國(四)
	河野安通志（早稲田大学講師・天狗倶楽部）	野球に對する余の意見						
09月11日	ジョルダン博士（スタンフォード大學総長）	職業的たらしむる勿れ	安部磯雄（早稲田大學野球部部長）	學生と野球 野球の爲に辯ず（野球は廣告なりや）				野球界春秋戰國(五)
09月12日	磯部檢三（日本醫學校幹事）	百弊あって一利なし	安部磯雄（早稲田大學野球部部長）	學生と野球 野球の爲に辯ず（入場料に就て）	西山悳治（哲學博士）	問題となれる野球(七) 米國の野球熱　文明と野球　美術を助長す		野球界春秋戰國(六)
	古瀬安俊（文部省學校衛生係嘱託醫學士）	野球を廃して撃劍						
09月13日	榊保三郎（九州帝国醫科大學醫學博士）	野球に就ての教育病理学上の意見	安部磯雄（早稲田大學野球部部長）	學生と野球 野球の爲に辯ず（選手制度）	嘉納治五郎（東京高等師範校長）	問題となれる野球(八) 精神的の影響　國技に不適當　終に選手問題		野球界春秋戰國(七)
09月14日	玉利喜造（鹿兒島高等農林學校長）	善良なる運動と認めず	安部磯雄（早稲田大學野球部部長）	學生と野球 野球の爲に辯ず（選手の操行）	内ヶ崎作三郎（文學士）	問題となれる野球(九) 英國の運動 日本の學生 顔色の蒼色 遺憾なく暴露		野球界春秋戰國(八)
	大里猪熊（大阪府立富田林中學校長）	實際に顧みよ						
	服部一二（四條畷中學校長）	成績不良品行下劣						
09月15日	乃木希典（學習院長）	必要ならざる運動	安部磯雄（早稲田大學野球部部長）	學生と野球 野球の爲に辯ず（選手の學業）	谷本富（文學博士）	問題となれる野球(十) 沒常識の見解野球の效能 武士道の眞髄　大に運動す可し		野球界春秋戰國(九)
	服部他助（學習院野球部長）	全滅して損なし						
09月16日	佐久間秀雄（文部大臣秘書官）	運動隆盛に伴ふ弊害	鎌田榮吉（慶應義塾學長）	野球が與ふる偉大の教訓（上）	乙竹岩造（東京高等師範學校教授）	問題となれる野球(十一) 體育的價値 性質に伴ふ弊 青年教育に必要歐米の野外遊戯		野球界春秋戰國(十)
	三好愛吉（第二高等學校長）	青年の特色を破壊す	中澤臨川（工學士・天狗倶楽部）	野球に對する非難は滑稽である				
			河野安通志（早稲田大學講師・天狗倶楽部）	更に野球に對する余の意見				
09月17日	池原康造（新潟醫學専門學長）	運動の濫用	鎌田榮吉（慶應義塾學長）	野球が與ふる偉大の教訓（下）	川瀬元九郎（ドクトル）	問題となれる野球(十二) 何ぞ撲滅を要せん弊害の矯正策 寧ろ奨勵すべし		野球界春秋戰國(十一)
			福田子之助（元慶應大學野球部）	十年間選手としての余が感想				
			野球大演説會	野球の爲めに氣を吐く萬丈				
09月18日	江口俊博（廣島縣立忠海中學校長）	博徒の渡り者の如し						愚なる野球論
09月19日	朝日新聞社	全國中學の調査	小杉未醒（洋画家・天狗倶楽部）	學生と野球 繪かきの見た野球				
09月20日			福原鎗二郎（文部次官）	學生と野球 當年の野球黨たる	野球問題演説會講演	（六面）～（十三面）		
09月21日			平塚篤（記者・天狗倶楽部）	學生と野球 グラウンドの印象	瀧澤菊太郎（青山師範校長）	問題となれる野球(十三) 時間を過消す　野球の利益　嗜好に任せよ		
09月22日			押川春浪（天狗倶楽部代表・SF作家）	學生と野球 朝日新聞社と其害毒	江原素六（教育者・東京YMCA理事長）	問題となれる野球(十四) 墮落の眞因　精神的修養　教員皆贊成		
09月23日			押川春浪（天狗倶楽部代表・SF作家）	學生と野球 愚劣教育家と其害毒	高杉瀧藏（哲學博士）	問題となれる野球(十五) 米國野球の制限 渡米軍の清行 日米の親和愈加ふ		
09月24日			阿武天風（小説家・天狗倶楽部）	學生と野球 愚劣教育家と其害毒	潮惠之輔（内務書記官・元一高野球部）	問題となれる野球(十六) 實驗上の判斷　世論と野球界　改善の諸點		

参考：「新聞社別（朝日・日日・読売）の野球害毒論争に関する記事の掲載日及び論者と題目」八木一弥 YAGI, Kazuya（「明治期における日本野球文化構築に関する一考察 —野球害毒論争に着目して—」 コミュニティ福祉学研究科紀要 第21号・2023） p.35

ルールと用具の進化

明治時代の野球の発達



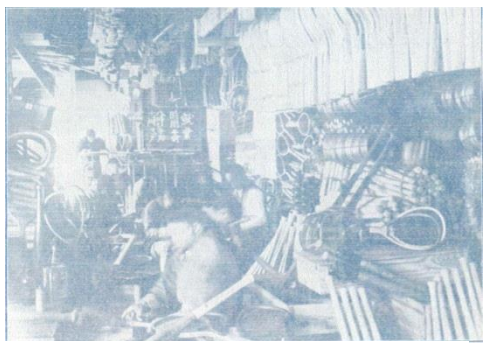
伊東卓夫（1860-1934）



『現行　野　球 規 則』1910（明 治43）　年



直木松太郎（1891-1947）



美満津商店の作業場



美満津商店の作業場

ベースボールは、1872（明治05）年に**ホーレス・Ｅ・ウイルソン**が、日本に初めて伝えました。

その頃は、まだバットとボールだけをつかう素手野球の時代です。

明治10年代には、**新橋倶楽部**の**平岡凞**がアメリカのルールブックや用具などもとりよせて、本格的なクラブチームをめざしました。

また、明治20年代に入ると、学生たちのベースボールがさかんになり**一高**が外国人チームとも試合をし、野球を全国にひろめました。

さらに、明治30年代後半からは、**早稲田**と**慶応**の時代となって、海外との交流をつうじて、技術やルール面でも進歩していきます。

そして、明治40年代になると、規則の研究もすすみ、アメリカの大リーグ公式ルールの翻訳も出版されました。

今回は、ルールと用具の移りかわりをとおし、日本のベースボール文化の源流を調べてみました。

みる人のためのルール

今の野球は、様々なスポーツのなかでも、最も膨大な規定をもつ競技のひとつです。

ルールブックには、第01章の「試合の目的、競技場、用具」から第10章の「記録に関する規則」まで500条項あまりにわたるルールが書かれています。

これは、類似する球技のクリケットとくらべても、2.5倍以上の条文数です。

けれども、1845(弘化02)年に定められた最初のルールは、わずか20条でした。当時は、21点を先取したチームが勝ちでした。

その後、アメリカでは野球が急速に職業化します。

そして、その流れのなかで、のどかな遊びの要素は失われていき、みる人を退屈させない工夫がルールの大幅な変更につながりました。

しかし、その反面でベースボールが生まれた頃の伸び伸びとした牧歌的な雰囲気とは、大きくかけ離れた娯楽になっていきます。

たとえば、初期の頃のピッチャーには、窮屈な下手投げしか認められず、バッターの要求にしたがい投球していました。

さらに、悪球出塁制度（ボール・オン・ベース。今は四球で出塁）もなかったので、試合はとてものんびりとしていました。

そこで、ゲームのスピード・アップをめざして、1879(明治12)年から本格的に悪球出塁制度が採用されます。

10年間の試行錯誤の末に、今の「四ボール三ストライク」になったのは、1889(明治22)年でした。

ところで、昔のベースボールには、今とくらべ、粗野で、どこか俗悪なイメージがつきまとっています。

それは、「職業としてのベースボール」が、早くから「賭け」の対象だったからです。

当時は「賭けごと」が人々の楽しみであったとはいえ、球場にはスリや賭博師がはびこって、ギャングたちと親密なつきあいをする野球関係者もいました。

そして、そのような不正な者たちが初期のプロリーグを内部から腐敗させていきます。

1874(明治07)年には「賭け屋」の暗躍が目にあまり、予定されていたゲーム数の三割以上（96試合）がキャンセルされました。

また、酒に酔ってゲームに出場する者も多く、選手同士のケンカも絶えません。

さらに、当時は選手の一方的な契約破棄や無秩序な引き抜きなど日常茶飯事です。

このように、初期の「職業的なベースボール」は、社会から信頼も尊敬もされず、選手たちの心もすさみ、スポーツマンとしての自覚も欠けていました。

そのうえ、悪い連中がたくらむ「**負けるための試合**」も横行していました。

1919(大正08)年におこった「ブラックソックス・スキャンダル」は、その一例です。

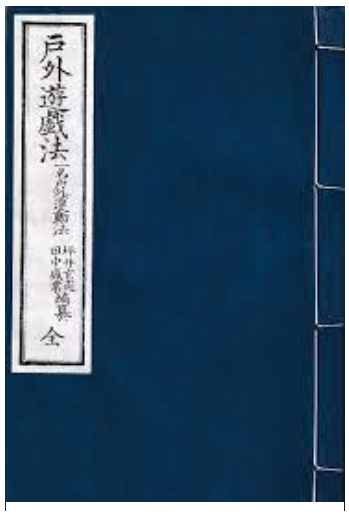
この悪名高い八百長事件では、八名の前途ある若者が野球界から永久に追放されました。

こうした数々の苦い経験を経て、1950（昭和25）年からのルールブックには、不誠実なプレーを防ぐ意味もこめて「**勝つことを(試合の)目的とする**」と明記されています。

日本での規則

さて、ベースボールは明治時代のはじめに日本へ伝えられました。

しかし、アメリカ本土の野球界と直接に交流する機会は早稲田が1905(明治38)年に遠征するまで30年以上もありませんでした。



『戸外遊戯法』

そのため、当初は技術ばかりでなくルールについても大きく遅れていました。

たとえば、1885(明治18)年の『**戸外遊戯法 一名、戸外運動法**』では、1867年頃の規則を中心に、1870年代のルールをつけ加えて解説しています。

つまり、明治10年代後半の日本ではアメリカとくらべて、10年以上も昔のベースボールがおこなわれていたのです。

当時の日本では、フォースアウト(ボールをもった守備側の選手が、ランナーよりも先に塁へタッチしてランナーをアウトする規則)の理解もまだ不十分でした。



『野球』(1897年)

そして、明治20年代からの**一高**の全盛期にはルールにも**一高**の考え方が反映されました。

1897(明治30)年に**中馬庚**(**一高**の元選手)が出版した『**野球**』は、その集大成です。

中馬は、その本のなかで、1896(明治29)年のアメリカのルールをもとにしながらも、日本の実状にあわせた規則の変更をしています。

たとえば、アメリカではボールが行方不明になった場合の具体的な規定は、すでに書かれていませんでした。

けれども、当時の日本では、打球や送球が草むらなどに入って、ボールがみえなくなることも、しばしば発生していました。

そこで、**中馬**は、そのようなときゲームを中断し、ボールが発見された時点から再開する「ロストボール」という日本独自の規則を追加しました。

また、**中馬**は守備側が簡単な内野フライをわざと落球し、ダブルプレーをねらうことを防ぐルール(インフィールドフライ)など、いくつかの条文をあえて削除しています。

彼は、それを「しっかりと打てない練習不足のバッターを保護する必要はないため」などと説明しています。

けれども、実際には意識的に落球できるほど、選手たちの野球への理解は進んでいませんでした。

投手板の逸話

たとえば、ピッチャーが投球するとき最初に軸足(右投げの場合は右足)を置く投手板(今は、横61×縦15.2センチメートルの長方形の白色ゴムの平板)について有名な逸話がのこっています。

そもそも、アメリカで投手板が採用されたのは、1893(明治26)年です。

それまでは、横が約1.68メートル、縦が約1.22メートルという小さな畳一枚分ほどの「ピッチャー・ボックス」の中から投球していました。

日本では、1897(明治30)年の**一高**とＹＣ＆ＡＣとのゲームから、投手板をつかいはじめています。

ところが、当時のＹＣ＆ＡＣは、ルールの解釈を間違って「投手板から二塁よりにさがり、ふみだした足で投手板をふんで投球する」と主張していました。

その影響で、明治30年代の日本の投手は、本塁まで約20メートルという野球史上に例のない遠距離から投球していました。

この誤った投球方法は、1905(明治38)年に早稲田が、アメリカへはじめて遠征したときまで続いています。

直木松太郎

明治40年代になると、アメリカの野球界との交流もさかんになり、日本だけで通用する規則は次第になくなります。

この時期では、**直木松太郎**がルール研究の第一人者でした。

直木は、アメリカのルールを熱心に調べて、1910(明治43)年に『**現行 野球規則**』を編纂しました。(冒頭の図版を参照)

この本は、当時の大リーグで用いられていたルールブックの翻訳で、条文ごとに原文とくわしい解説が書かれています。

その頃の**直木**は、22歳。まだ慶応の野球部員でした。

選手としての**直木**には、誰もが認めるような実績はありません。

しかし、その後もルールと記録を中心にベースボールの理論的な研究をつづけ、初期のプロ野球界の発展にも大きく貢献しました。

直木 松太郎は、1947(昭和22)年の 04月07日に心臓マヒのため、59歳で亡くなっています。

用具類の発達

次は、ボールやバットなど用具類の発達についてアメリカの場合から調べてみましょう。

1850年代までのボールは、品質も様々で今よりずいぶんと大きく重いものでした。

それが、試合をスピード・アップするため、次第に小さくて軽いものにあらためられていきます。

それは、当時のアメリカが、経済的に発展し、社会の大きな流れとして何事も効率化しスピード・アップすることを求めたからです。

そして、1871(明治04)年から今と同じ規格（周囲が22.9から23.5センチメートル、重さは141.7から148.8グラム）に定められます。

また、初期のバットは長さも太さも様々で、クリケット風の平面的なものも認められていました。

しかし、1894(明治27)年には今のサイズ(最も太い部分の直径が、7センチメートルより小さく、長さは 106.07 センチメートル以下のなめらかな円い棒)と決められました。

このような用具類の規格統一は、当時のアメリカの人々に「ベースボールは時代をこえ、世界中の誰に対しても、公平なスポーツ」という印象を強くあたえました。

そして、その近代的なイメージが、ベースボールの人気をさらに高めていきます。



なお、野手のグラブは、1870年代から使われています。

初期のグラブは、指の部分を切り取った薄い革の手袋で、両手に着用していました。

日本初のボールづくり

ベースボールが伝えられた当初、日本には外来のスポーツ用品を売っている店は、一軒もありません。

もちろん、バットやボールのつくり方を知っている日本人など、ひとりもいません。

そのため、外国人教師やアメリカへ留学していた人がもってきた野球用具は、とても大切につかわれていました。

そんな時代にベースボールが流行した**開成学校**には、日本で初めて野球のボールを製造した学生たちの興味深い逸話が残っています。

開成学校では、留学帰りの**来原彦太郎**（のちの**木戸孝正**）がもってきたボールをつくろいながらつかっていましたが、とうとう修繕もできないほど、やぶれてしまいました。

そこで、学生たちは「かわりのボールをつくろう」と相談して、まず、構造を調べるため、あたかも科学の実験でもするかのように慎重に、そのボールを解剖してみました。

すると、表面のぬいあわされた二枚の皮のすぐ下には、**ラシャ**（毛織物の一種。昔、練習用などのボールに反発力を増すため使われた）が４から５枚ほど、その下に毛糸がまかれ、中心は小さなゴム球であることがわかりました。

しかし、当時はゴムや毛糸が非常に高価でした。

学生たちは、古いゴム靴や捨てられた毛糸の靴下など、ありあわせの材料で中の形をつくりました。

そして、おそらくは最後の仕上げまで自分たちでやろうとしたのでしょうが、どうしてもうまくできません。

彼らは悩んだ末、学校の近くの靴屋に話をして、表面の皮をぬいつけさせ、ようやく一個のボールをつくりあげました。

その後、**開成学校**の近所（今の東京都千代田区神田神保町あたり）では、靴屋が内職に野球のボールをつくり、売りだすようになったといいます。

野球産業のあゆみ

バットは、学校などでつかう体操用の木工品（アレイや棍棒）をあつかっていた業者が、1880年頃から副業でつくりはじめています。

当時の材質は、ブナの木でした。それが、いつしかサクラの木へとかわり、1900年頃にはクリの木が選ばれています。

やがて、ベースボールの普及にともない、もっとバットに適した素材が求められました。

その結果、**シオジ**をつかっていた時期を経て、1906（明治39）年頃から日本の特産である**トネリコ**（ジャパニーズ・アッシュ）が用いられるようになります。

トネリコは、アメリカ製バットに使われる**ホワイト・アッシュ**にも匹敵する良質の原木です。

弾力があって粘り強く、なかなか折れない特性をもっています。

そして、**トネリコ**の発見が日本のバットの品質を飛躍的に向上させました。

ミットやグラブは、皮革製品業者によって、素手野球がさかんだった明治10年代後半からつくられていたそうです。

初期のミットは、それぞれの指を半分に切り取った皮手袋の掌の部分に綿をつめたものでした。

けれども、素手野球の時代は、それからの 10年以上も続いたので、グラブ類が普及しはじめたのは、1896(明治29)年頃からです。
当時のグラブは、硬い鹿皮でつくられていました。

その後、グラブの製作が本格化したのは、1905(明治38)年でした。
早稲田が初めてアメリカへ遠征して、よい見本となる多くの用具をもちかえってきたからです。

そして、しばらくするとアメリカから輸入したグラブ用の牛革をつかった製品もあらわれました。

伊東卓夫

ここで、明治時代を代表するスポーツ産業人のひとり**伊東卓夫**について少し紹介します。

伊東は、若い頃に学んだ横浜の**先志学校**(今の**明治学院**の前身)などでのスポーツ見聞が動機となり、1882(明治15)年に**美満津商店**を22歳で創業します。

そして、運動用具の研究と改良につとめて、優れた製品づくりで経済的にも成功します。

その結果、明治期の末頃には全国で「**美満津商店**を知らない学生はいない」とまで言われるようになります。

また、1911(明治44)年には東京商業会議所（今の東京商工会議所）の議員にも選ばれました。

さらに、晩年は、東京運動具製造販売業組合の設立時から顧問・評議員をつとめています。

けれども、彼は自分の利益だけを追求する人ではありません。



たとえば、1902(明治35)年からは『**野球年報**』を13年にわたり発行しつづけ、ベースボールの文化的な向上にも貢献します。

この事業は、当時の野球の普及状況を考えると、おそらく採算が取れなかったと思われます。

それでも、**伊東**は、有名校のゲーム結果だけでなく、普通の中学生チームの練習試合の様子や写真まで広く日本中からあつめて、後世に伝える貴重な本を出版し続けました。

伊東卓夫は、1934(昭和09)年02月12日に73歳で亡くなっています。

かつて黙々と木をけずるバット職人がいました。

また、根気よく二枚の皮をぬいあわせてボールをつくる女性たちもいました。

野球は、そういう人たちによって100年以上もささえられ、
今では華やかなゲームが連日のようにくりひろげられています。

けれども、思いおこしてほしいのです・・・。

遠い昔のベースボールが子供たちの無邪気な遊びであったことを。

そこには、高価な用具も定められたルールもありません。

それでも、誰もがグラウンドの主役となり、時を忘れて、
たった一個の白球を心のままに追いかけていました。

◎主な参考文献

『新式ベースボール術』（高橋雄次郎/1898年）

『現行野球規則』附録・試合記録法（直木松太郎/1910年）

『東京運動具製造販賣業組合史』（玉澤敬三[編纂兼発行人]/1936年）

『【假譯】メイジャー・リーグ規則』（セントラル野球連盟・パシフィック野球連盟/1950年）

『野球場建設の研究』（沢柳政義/1951年）

『明治野球史』新体育学講座 第53巻（功刀靖雄/1969年）

『アメリカ・プロ野球史』三一新書（鈴木武樹/1971年）

『ベースボールの詩学』（平出隆/1989年）

『日本スポーツ文化の源流』（日下裕弘/1996年）

『人間とスポーツの歴史』（渡部憲一/2003年）

＊「運動具の材料調べ」何んな木が**バット**に適するか（かんろ生/「運動世界」第15号・1909年06月号）

＊「ルールを通して見た明治期日本における野球理解」
—明治16年から同33年まで—（渡辺融 /「体育学紀要」通号17号・1983年）

今回は **明治時代のルールや用具の発達** について少し調べてみました

あそびをせんとや うまれけむ たはぶれせんとや むまれけん
あそぶこどものこゑきけば わがみさへこそ ゆるがるれ

後白河法皇・撰『梁塵秘抄』巻第二 359

【参考資料 01】

Below you will find all twenty of the Knickerbocker Rules as they were adopted on September 23, 1845:

The Knickerbocker Rules

1ST. Members must strictly observe the time agreed upon for exercise, and be punctual in their attendance.

2ND. When assembled for exercise, the President, of in his absence, the VicePresident, shall appoint an Umpire, who shall keep the game in a book provided for that purpose, and note all violations of the By-Laws and Rules during the time of exercise.

3RD. The presiding officer shall designate two members as Captains, who shall retire and make the match to be played, observing at the same time that the player's opposite to each other should be as nearly equal as possible, the choice of sides to be then tossed for, and the first in hand to be decided in like manner.

4TH. The bases shall be from "home" to second base, forty-two paces; from first to third base, forty-two paces, equidistant.

5TH. No stump match shall be played on a regular day of exercise.

6TH. If there should not be a sufficient number of members of the Club present at the time agreed upon to commence exercise, gentlemen not members may be chosen in to make up the match, which shall not be broken up to take in members that may afterwards appear; but in all cases, members shall have the preference, when present, at the making of the match.

7TH. If members appear after the game is commenced, they may be chosen in if mutually agreed upon.

8TH. The game to consist of twenty-one counts, or aces; but at the conclusion an equal number of hands must be played.

9TH. The ball must be pitched, not thrown, for the bat.

10TH. A ball knocked out of the field, or outside the range of the first and third base, is foul.

11TH. Three balls being struck at and missed and the last one caught, is a handout; if not caught is considered fair, and the striker bound to run.

12TH. If a ball be struck, or tipped, and caught, either flying or on the first bound, it is a hand out.

13TH. A player running the bases shall be out, if the ball is in the hands of an adversary on the base, or the runner is touched with it before he makes his base; it being understood, however, that in no instance is a ball to be thrown at him.

14TH. A player running who shall prevent an adversary from catching or getting the ball before making his base, is a hand out.

15TH. Three hands out, all out.

16TH. Players must take their strike in regular turn.

17TH. All disputes and differences relative to the game, to be decided by the Umpire, from which there is no appeal.

18TH. No ace or base can be made on a foul strike.

19TH. A runner cannot be put out in making one base, when a balk is made on the pitcher.

20TH. But one base allowed when a ball bounds out of the field when struck

Evolution or Revolution?

A Rule-By-Rule Analysis of the 1845 Knickerbocker Rules

By Jeff Kittel1　Version 1.0, April 2013

以下に、1845 年 09 月 23 日に採択されたニッカーボッカー・ルール全 20 条を掲載する：

ニッカーボッカーのルール

第 01 条 メンバーは運動のために合意された時間を厳格に遵守しなければ ならず、また、その出席には時間を守らなければならない。

第 02 条 練習のために招集された場合、会長（会長が不在の場合は副会長）は、アンパイアを指名するものとし、アンパイアは、その目的のために提供された記録簿に試合を記録し、練習期間中の規約および規則に対するすべての違反を記録するものとする。

第 03 条 会長(会長が不在の場合は副会長)は二人のメンバーをキャプテンに指名する。 二人はその場を離れて相談し、試合に参加する選手を選ぶ。その際、両方の選手の技量ができるだけ同じになるように留意する。キャプテンは率いるチームをコイン・トスで決め、次に同じ方法で先攻を決める。

第 04 条 塁間は、「ホーム」から二塁までは 42 歩、一塁から三塁までは　42 歩とし、等距離とする。

第 05 条 通常の練習日には対外試合を行ってはならない。

第 06 条 練習を開始するために合意された時間に十分な数のクラブの メンバーが出席していない場合には、メンバーではない紳士が試合を構成するために選ばれることができるが、試合は、その後に現れるメンバーを受け入れるために解散されないものとする。ただし、いかなる場合にも、メンバーは、出席しているときは、試合をおこなう際に優先権を有するものとする。

第 07 条 試合開始後にメンバーが現れた場合、相互の合意があれば、そのメンバーを補充することができる。

第 08 条 ゲームは 21 点、またはエースで構成されるが、終了時には同数の回がプレイされなければならない。

第 09 条 打者に対する投球はピッチで、スローではない。

（注：当時の投手は下手投げで打者が打ちやすいボールを投げていた）

第 10 条 打球がグラウンド外に(注：ノー・バウンドで)出た場合、あるいは一塁または三塁の線外へ出た場合はファウルである。

第 11 条 投球を三回空振りして最後の投球が捕らえられたらアウトとなる。捕らえられなければフェアとみなされ、打者は走らなければならない。

第 12 条 打球が飛球であれファーストバウンドであれ、ストライクまたはチップして捕球された場合はハンドアウトとなる。

第 13 条 ベースを走っているプレーヤーは、ボールがベース上の敵の手に ある場合、またはランナーがベースを作る前にボールに触れた場合には、アウトになるものとする。ただし、いかなる場合にも彼にボールが投げられることはないと理解される。

第 14 条 走っているプレーヤーが、塁に出る前に敵がボールを捕ること、またはボールを得ることを妨げることは、ハンドアウトである。

第 15 条 スリー・アウトで攻守交替。

第 16 条 プレーヤーは決まった順番でストライクを取らなければならない。

第 17 条 試合に関するすべての紛争および異議は、アンパイアが決定し、不服申し立てはできない。

第 18 条 打球がファウルのときは、得点も進塁もできない。

第 19 条 投手にボークがあったとき、走者はワン・ベース進塁ができる。この走者をアウトすることはできない。

第 20 条 ただし、打球がバウンドしてグラウンド外に場合はワン・ベースが認められる。

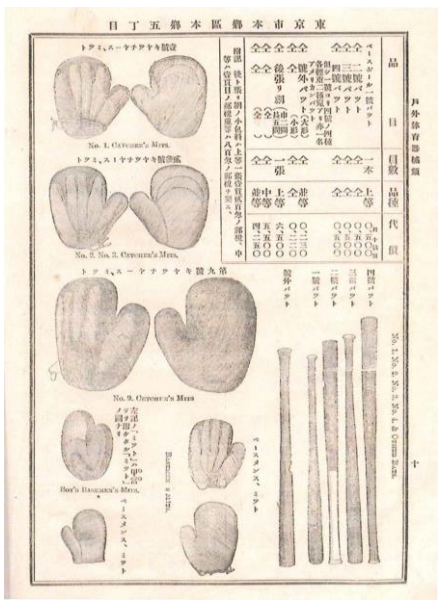
「進化か革命か？

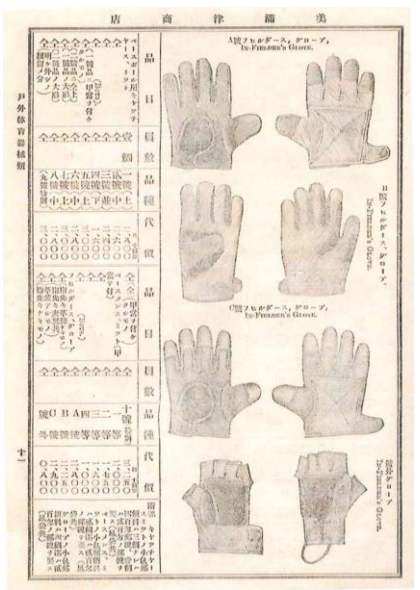
1845 年ニッカーボッカー・ルールのルール別分析」

ジェフ・キッテル著　2013 年 04 月、バージョン 1.0 より

【参考資料 02】







「美滿津商店　代価表」1895（明治 28）年 より

附録Ⅰ　知の清流――齋藤三郎



齋藤三郎（1929 年）

齋藤三郎は、1895(明治28)年 08月26日に、長野県の市川村（今の野沢温泉村） 虫生で生まれました。

義務教育を終了後は独学し、1913(大正02)年に上京。1923(大正12)年から 1929(昭和04)年まで澤田正二郎が主宰する劇団『新国劇』に在籍し、文芸部員として「早慶戦時代」の脚本などをてがけます。

その後、野球史と石川啄木の研究にこころざし、多くのすぐれた著作を発表しました。

また、『啄木全集』の編纂や文学史、映画史のほか様々な分野に業績をのこします。

そして、1959(昭和34)年からは野球体育博物館(今の野球殿堂博物館)の嘱託研究員をつとめますが、翌年の 1960(昭和35)年02月02 日に急逝します。享年65歳。

齋藤三郎の生涯は、華やかな光をあびることはありませんでしたが、確かな恵みに満ちています。

それは、人知れず流れる清流のように、探し求める者だけに姿をあらわします。

野球史研究の『日本野球文献解題』、「野球文献史話」。

あるいは、石川啄木研究の正・続『文献石川啄木』や『啄木と故郷人』『啄木文学散歩』などは、そのよい例です。

齋藤の心の原点には、少年の日にであった「ベースボール」への感激がありました。

まだ、素手野球の時代であったころ、仲間たちと掌の痛みも忘れて、硬いボールを追いかけた思い出が、彼の宝物でした。

そして、若いころには、選手としても活躍し、社会人クラブの野球大会で準優勝したこともあります。

そんな彼の性格は、素朴で無口でしたが、初対面の相手さえ親しみを感じさせる人柄で、蕎麦と和菓子が好物でした。

齋藤の研究は、綿密な調査をもとに文献による実証をめざしています。しかし、書物だけでは実感できないと、明治時代の野球選手に体験談を取材したり、戦時中でさえも研究旅行をくりかえしています。

彼は、実際に現地を訪ね、話を聞き、自分で確かめることを大切にしました。日本最古の野球書の発掘や新選組についての作品（「新選組秘話 綾瀬村の近藤勇」）なども、その成果です。

ベースボールへの「感謝と恩返し」の気持ちから野球史を志したと語る齋藤は、自分の名誉や野心から研究を続けたのではありません。

それは、無理解や無関心によって風化していく真実を市井の立場から訴えることでした。

たとえば、ベースボール伝来の時期について、今の定説となっている「明治五年説」を最初に提唱したのも、彼です。

齋藤は、1939(昭和14)年12月に新聞の連載記事で「五年説」を発表。それは、それまでのあいまいな言い伝えによる「六年説」とは違い、膨大な資料調査をもとにした確かな結果でした。

また、1943(昭和18)年にも野球専門雑誌で「五年説」を展開します。けれども、どんなに力説しても、肩書きのない彼の研究に反響は、ありませんでした。

さらに、1952(昭和27)年には代表作のひとつ「野球文献史話」を発表し、あらためて「五年説」の実証と「六年説」の誤りを論証しました。にもかかわらず、一般には根拠のない「六年説」が定着したままでした。

齋藤の主張が正当な評価をうけるのは、彼の没後12年目(1972年)に名門野球部の出身者による野球史が出版された以後です。

わずか一年の違いを書きかえるため、研究者たちは30年以上の歳月を必要としました。

しかも、「五年説」は、齋藤の功績ではないとする考えが、今もあとをたちません。

『一度定説化してしまうと、それをくつがえし、或は是正することが如何に至難であるかは一度でも経験したほどのものなら頷けると思う。』

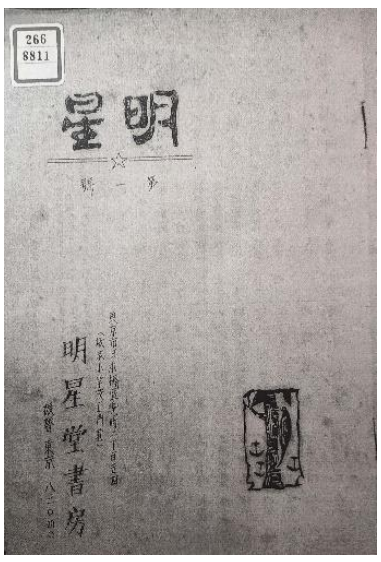
還暦をすぎた齋藤の言葉です。

いち早く「野球資料室」の構想をもっていた彼の夢は、野球体育博物館(今の野球殿堂博物館)として実現します。

そこには、様々な困難のなかで収集された彼の蔵書も寄贈され、今も探究者を待っています。

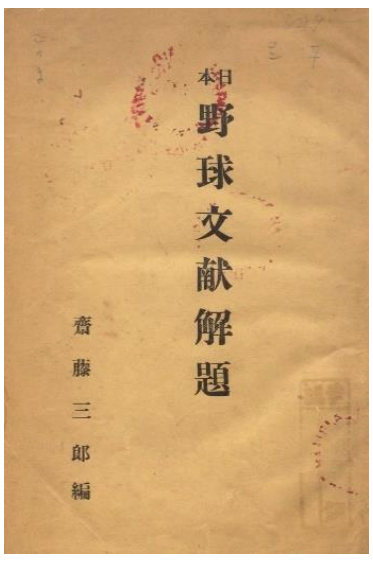
「最も良心的な研究者」とも評される齋藤は、どんな分野の研究でも、妥協せず、ひるまず、あきらめず、攻撃的でもありません。

ただ、自分自身の「良心」と徹底した実証による確信をもとに、静かに挑み続ける人でした。



通信販売用古書目録(1935)
千代田区立図書館 所蔵


新国劇時代の齋藤三郎



『日本 野球文献解題』(1939)

今回は **齋藤三郎(野球史研究者)** について 少し調べてみました

“If you build it, he will come.”

「それをつくれば、彼はやってくる」

映画 Field of Dreams(1989)より

【参考資料01】

斎藤三郎［著述業］

野球に半生を捧げた人　岡目八目四十年

戸塚の安部球場では、早慶戦を前に、早大野球部員が激しくくれ練習していた。

熱心なファンが、三塁側スタンドから選手の動きをじっと見つめている。

その熱心なファンの中に、風変りな老人が一人いた。登山帽、黒足袋、下駄履き、そしてワイシャツ姿で、膝に皮カバンを置き、双眼鏡を手にした老人。それが斎藤三郎(63歳)さんだ。

ここ数年、スタンドに斎藤さんが姿を見せない日は、数えるくらいしかない。スタンドの主という評判だ。



「大正二、三年ごろから、わたしは、ここに来るようになりましたが、当時の安部球場は、のどかでしたね。コンクリートの塀の代りに、焼ぼっくりの柵があり、からたちの白い花が、それに風情をそえてましたし、スタンドも文字通り土手でしたよ。何故練習を毎日見にくるんですかとよく問われますが、たいした理由なんかないですよ。いろいろいえばありますが、散歩がてらにきて、若い選手の練習を見るのが楽しいんですね。それだけですよ。結婚しても女房に逃げられるし、人には変人扱いされますが、それでも、わたしはスタンドに腰掛けているんです」

安部球場に通いだしたのは、こんな昔なのだ。安部球場ばかりではない。慶応、明治と方々のグラウンドを訪ねて行ったものだ。

斎藤さんは、明治二八年、長野県野沢温泉村に生れた。田舎にはめずらしく野球の盛んなところだった。素手で野球をする最後の時期に斎藤さんは野球を始めた。明治三八年ごろである。こうして野球狂時代がスタートする。

大正二年上京して沢田正二郎劇団の文芸部に籍を置くようになった。文芸部員といっても、野球部員といったほうが適当だった。サトー・バチローとバッテリーを組んで活躍し、当時の強チーム函館オーシャンと好試合を演じたこともある。

昭和四年、沢正が他界すると、それまで人気を博していた新国劇は、下火になって来た。人気挽回を目論んだ劇団幹部は、全盛の学生野球に目をつけ、斎藤さんに野球劇を書くようにいった。

一生懸命創作した。一週間かかって、「早慶戦時代」と題する上演時間二時間の劇を書上げてしまった。大胆なアイディアで、舞台で役者にスパイクを履かせ、本ボールを投げさせた。

「早慶戦時代」を書いて、困ったのが、資料の不足だ。斎藤さんは以来野球関係資料蒐集を熱心に行った。今では、野球関係の資料、とくにその歴史については日本一とも言われている。

早慶戦を主に六大学野球に夢中になったのはこのころからだ。復活早慶戦(大正十四年)以後の早慶戦は欠かしたことがない。これには大きな努力が必要だった。学生野球が盛んになると、早慶戦の入場券を入手することは、なかなか困難であった。

「昭和四年、秋の早慶戦の時でした。すごい人気でしたからね。今度は駄目だと断念していましたが、あるいはとはと早速神宮へ行くと券が買えましたよ。人間の盲点です。今日は混むからと、行く人が少なかったんですね。そして、佐藤の劇的ホーマーを見ることが出来たんです。感激しましたよ」

こうして毎シーズン、斎藤さんは外野席バック・スクリーン側に、陣取って見物を続けてきた。

新国劇をやめた昭和六年、神田のある製本屋に勤めて、そこで野球した経験の全くない小学生を指導することになった。ただプレーするのと相違して、野球を教えることは難しかった。もっと野球を学ばねばと思いたった。

「本を読んでも野球は一応、理解出来るでしょう。が、見ることにこしたことはありませんね。そんな具合で、わたしはグラウンドに繁く通うようになったのです。すると自然に選手の長、短所が分ってきますよ。こうすれば打てる、ああすればエラーをしないのではないかと考えて見ました」

野球を別な眼で見だしたのだ。かくて批判的な眼を持ってスタンド下に坐るようになって三十余年、岡目八目的存在の斎藤さんは、いまでは早稲田界隈で名物男となった。この岡目八目のアドバイスで向上した部員もいる。現在では、同郷である木次選手のバッティングは特に見守り、アドバイスをしているという。だが、

「性コリな性格から、しつっこくとやかくいったり、余りに自分勝手な解釈を人に押しつける」と批判もないことはない。

野球のフェアー・プレーの精神と、石川啄木が世の中の矛盾を悲感して、フェアーなものを熱望した精神に共通性を見出し、それに共感して今日まで過して来た。午前は資料集め、午後は野球見物、夜は資料整理の生活。戦後おそまきながら結婚したが、こんな生活のために、直ぐ離婚しなければならなかった。生活のために、貴重な文献を手離さなければならなかったこともある。でも後悔していないという。自分なりの道を歩んできたと自信を持っている。

「これからも、こんな日課を毎日送ることでしょう。こり性なわたしには、そうするより何もないですからね」

啄木関係の著書から得るわずかな収入を生活の糧に、今日も安部球場のスタンドにたたずむ斎藤さんは、こう語りながら双眼鏡を目に当てた。

斎藤さんのような方を、ご存知でしたら「週刊野球」編集部へお知らせ下さい。

「週刊野球」第01巻 第08号 19頁 １９５９年06月03日 より

附録Ⅱ　明治時代の野球文献案内

これは、1912(明治45)年までに日本国内で発行されたベースボールに関連する書籍類を調べて、確認できたものに簡単な解題をつけて、発行年代順に並べたものです。
できる限り広範囲に収録することをめざしたため「これが野球書か」と疑問に思われるものや部分的な記述しかないものなども含まれています。
しかし、それらは、日本の「ベースボール文化」を知るための基礎資料という意味もふまえて、あえて掲載しました。
また、書名などの表記は、原本に従い旧字体を用いています。
利用者のご寛恕を願う次第です。

No. 書名《解題》著者・編者／発行年・月・日〈所蔵先〉(書名をクリックするとジャンプします)

００１　大正増補 和譯英辞林(薩摩辞書 再版)

《51頁に「Base'-ball,s.」の訳として「玉遊ビ」とあります》
前田正穀・高橋良昭[編]／1871年10月〈国立国会図書館〉

００２　英和對譯辞書

《37丁目「Base'-ball,s.」の項に「玉遊ビ」、「Bat,s」の項に「太キ棒(ぼう)」とあります》
荒井郁之助[編]開拓使[発行]／1872年09月〈国立国会図書館〉

００３　英和字彙 附・音挿図

《日就社(横浜)発行。1548頁の英和辞典。「Base-ball」の項目はありませんが「BAT」の訳として「打球棒」とあります》
柴田昌吉・子安峻[編]／1873年01月〈国立国会図書館〉

００４　小學讀本

《小學校の教科書。ベースボールの説明らしき文章があります》
田中義廉[編]／1873年03月〈国立教育政策研究所 教育図書館・一橋大学〉

００５　改正増補 稟准 和譯英辞書

《790頁の英和辞書。51頁に「Base'-ball.s.玉遊ビ」とあります》
東京新製活版所[編]／1873年12月〈国立国会図書館〉

００６　文部省教育品陳列場出品目録

《体操伝習所からの出品として「第36號 戸外遊戯器具類」のなかに「〇ベースボール[球四個、打珠棒二本]一組(價壱圓四拾銭)神田美土代町一丁目　森田金兵衛製」とあります》
文部省[発行]／1881年03月〈国立国会図書館〉

００７　OUTDOOR GAMES（アウトドア　ゲームズ）

《著者は、日本の学生スポーツの普及に尽力した英国人教師。全47頁のうち、37から47頁まで「BASE BALL」の紹介》

Ｆ・Ｗ・ＳＴＲＡＮＧＥ[著]／1883年06月11日　〈国立国会図書館・野球殿堂博物館〉

００８　西洋戸外遊戯法（せいようこがいゆうぎほう）

《『OUTDOOR GAMES』（1883年刊）を中心に各種の洋書から抄訳・編集。25から44頁までを「○ベースボール（打球おにごっこ）ノ部」として解説》

下村泰大[編輯]寺尾壽[校閲]／1885年03月　〈国立国会図書館〉

００９　戸外遊戯法　一名、戸外運動法（こがいゆうぎほう　いちめい　こがいうんどうほう）

《各種の欧米書から選択・翻訳した学校遊戯の解説書。そのなかで、「２０ ベースボール(打球ノ一種)ノ部」は、66から95丁まで紹介》

坪井玄道・田中盛業[編纂]／1885年04月　〈国立国会図書館〉

０１０　實地體育法 前編 巻之三 戸外遊戯（じっちたいいくほう　ぜんぺん　かんのさん　こがいゆうぎ）

《「○打球遊戯 第四種 ベース、ボール」のなかに、七ヶ条のルールと五ヶ条の注意があります》

横井琢磨[編]／1886年07月25日　〈国立国会図書館〉

０１１　小學遊戯法　上巻（しょうがくゆうぎほう　じょうかん）

《上・下巻あわせて約140種類の遊戯法を紹介する和綴の解説書。上巻の89丁目から30丁をつかい「打球鬼(ベースボール)」として解説》

相澤英二郎・許斐氏春[著]／1886年11月　〈国立教育研究所〉

０１２　戸外遊戯法（こがいゆうぎほう）

《初歩的な解説書。「打球一名(ベースボール)」とあります。精華堂(新潟)出版》

丹羽貞次郎・室野義忠[編輯]／1887年10月30日　〈国立国会図書館〉

０１３　改正増補　和英英和　語林集成(A JAPANESE－ENGLISH DICTIONARY)（かいせいぞうほ　わえいえいわ　ごりんしゅうせい）

《『BASE-BALL, n.』の訳に『Tamanage.』とあります》

平文先生（Ｊ・Ｃ・ＨＥＰＢＵＲＮ）[訳・編]／1888年05月01日　〈国立国会図書館〉

０１４　學校家庭 西洋遊戯全書（がっこうかてい　せいようゆうぎぜんしょ）

《『童子の遊戯』の抄訳。全17章。「第６章　毬戯の部」に「ベースボール」のことを説明した「自由郷ありの毬」の項目があります》

ワクネル[著]仙郷學人・霞城山人・太華山人[合訳]／1889年04月01日　〈国立国会図書館〉

０１５　小學遊戯書（しょうがくゆうぎしょ）

《「第三十六　ベースボール」として、34から46丁まで紹介》

近藤憲夫[編]／1892年02月25日　〈国立国会図書館〉

０１６　遊戯法（ゆうぎほう）

《各府県の師範学校付属小学校（24校）で実施中の遊戯についての調査報告書。二四校のうち、青森、山形、岩手、茨城、高等師範(東京)、徳島の６校が具体的に

「ベースボール」を実施中としています》
白濱重敬・志々目清真[合著]／1894年07月２４日 〈国立国会図書館〉

０１７ 野球部史 附規則（『校友会雑誌』号外）

《Baseballの訳語として、はじめて「野球」という言葉を用いたもの。
特集形式で本文の巻頭には、「べーすぼーる部史」ともあります》
第一高等学校校友会（中馬庚）[編]／1895年02月22日 〈国立国会図書館〉

０１８ 新撰遊戯全書

《熊谷久栄堂（神戸）発行。各種の和・洋書から約60種を学校遊戯として紹介。
そのなかで「第五十一 ベース、ボール」として114から141頁まで解説》
前野関一郎[編]／1895年04月07日 〈国立国会図書館〉

０１９ ベースボール術（ART OF BASE—BALL PLAYING）

《日本で最初の野球解説の単行本。菊半截40頁。巻頭に「游技者之姿勢」や挿図として「遊技器具」》
高橋慶太郎[編]／1896年07月18日 〈国立国会図書館〉

０２０ 歐米遊戯術

《英国の遊戯書の抄訳。第一編に「ベースボール遊戯」として解説》
相田與三郎[訳・編纂]／1897年05月22日 〈国立国会図書館〉

０２１ 新編 小學遊戯全書

《「(二一)打球鬼ごつこ略式」に『(注意)此遊戯は頗る「ベースボール」に類似せり
同文館出版の「ベースボール」術を参照せば大いに得る處あるべし』とあります》
白井規矩郎 [編]／1897年07月12日 〈国立国会図書館〉

０２２ 野球

《「野球」の名称を用いた最初の単行本。序論では「青年ト運動」「校際仕合」などを論じ、
以下に日米の略史、練習、選手各論、仕合、審判官、仕合規則などを解説》
中馬庚[著]／1897年07月30日 〈国立国会図書館〉

０２３ 新式ベースボール術

《当時としては珍しく言文一致体で書かれた平易な解説書。
用球・用棒・御面・ミット・グローブなどの用具の製作工程も詳細に説明》
高橋雄次郎[著]／1898年06月20日 〈国立国会図書館〉

０２４ 内外遊戯法（日用百科全書 第三十編）

《戸外遊戯と室内遊戯に区分した遊戯解説書。
本文236頁のうち「ベースボールの部(野球)」は、19から34頁まで》
大橋又太郎[編]／1898年06月23日 〈国立国会図書館〉

０２５ ベースボール・フートボール案内

《37頁にわたる「野球之部」の巻頭に「野球遊技場圖解」。
内営(内野)、外営(外野)など翻訳に苦心した時代の解説書》
今井信之[編]／1898年08月05日 〈国立国会図書館〉

０２６　實践遊戯全書 附・身體検査法、救急療法

《約200種類の戸外遊戯を紹介。「第百四十一 べーすぼーる」として113から123頁で解説》

体育研究会[編]／1899年02月２４日 〈国立国会図書館〉

０２７　野球規則

《日本で最初の独立したルールブック。準備、綱領、伏線、真髄、付録の五項を第一〇章までの細則に分けて説明》

山口高等学校野球部:水木要輔[編]／1899年04月06日 〈国立国会図書館〉

０２８　早稲田學風

《「躰育部」及「早稲田の地形及び学風」のなかにベースボールの記事があります》

村松忠雄[著]／1899年04月15日 〈国立国会図書館〉

０２９　慶應義塾一覧　第二版

《「弓術部及野球部」とあり写真が掲載。初版は、1897年11月》

慶応義塾[出版]／1899年07月29日 〈国立国会図書館〉

０３０　最新ベースボール術

《「本塁附近之図」などの挿画をつかい演技者の分類、仕合の概略、準備などを解説。中学書院[発行]。1900年09月に第六版》

高橋忠次郎・依田直伊・小野泉太郎[合著] ／1899年08月15日 〈国立国会図書館〉

０３１　ベースボール及クリケット（内外遊戯全書 第３篇）

《初心者向きに全九項目にわたって物語風にベースボールを解説》

津田素彦[著]／1899年09月26日 〈国立国会図書館〉

０３２　野球叢談

《『新式ベースボール術』(1889年刊)を大幅に訂正し、書き加えた増補版ともいえるもの。「用球」の部分に憶測をもとにした一高の不正用球使用問題をとりあげています》

高橋雄次郎[著]三好仲雄(四海堂)[編]／1899年10月20日 〈国立国会図書館〉

０３３　實験詳説 遊戯唱歌大成

《「(一〇) 壘毬戯(BaseBall) 」として、213から228頁まで解説》

白井規矩郎[編]／1900年04月26日 〈国立国会図書館〉

０３４　最新ベースボール術（第六版 岡崎屋書店刊）

《1899年に刊行された同名書と同じ内容》

高橋忠次郎・依田直伊・小野泉太郎[合著]／1900年09月15日 〈財団法人野球殿堂博物館〉

０３５　海島冒檢奇譚　海底軍艦

《作中に「野球競技(ベースボールマッチ)」という章があります》

押川春浪[著]／1900年11月15日 〈国文学研究資料館〉

０３６　中學唱歌

《「明日は日曜」の三番の歌詞に「明日は日曜 楽しき日 野べの遊びは

オーそれよ ベースボールに 玉投げに」という一節があります》
東京音楽学校 [編]／1901年03月30日 〈東京芸術大学〉

０３７ 小學遊戯全集

《小学校の各学年ごとに各種の遊戯を解説したもの。
「第六編(高等小學校男)」のうち「第十三 ベースボール」として、
214から227頁まで紹介》
近藤直次郎・高田菊治郎[編]／1901年07月29日 〈国立国会図書館〉

０３８ 野球年報発行ノ旨意（附:明治三十四年度 野球規則）

《1902年から刊行予定の『野球年報』発行の趣意書3頁と
青井鉞男の注記入りの野球ルール82頁からなります》
伊東卓夫[編]／1901年09月25日 〈国立国会図書館〉

０３９ 増補 野球

《『野球』（1997年刊）の増補(第８版)。
青井鉞男による増補版。本文253頁だった初版本に比較し、本文317頁に増加》
中馬庚[著]青井鉞男[増補]／1901年10月01日 〈財団法人野球殿堂博物館〉

０４０ 實験遊戯全書

《季節別の戸外遊戯や室内遊戯の百科事典。春季ノ部に「野球術之編」として解説》
永島小蝶[編纂]／1901年10月05日 《国立国会図書館〉

０４１ ベースボール術秘訣

《『野球叢談』(1899年刊)と全く同じ内容の改題版》
高橋雄次郎[著]／1901年10月23日 〈国立国会図書館〉

０４２ ベースボール

《美満津商店が発行した解説書》
青井鉞男[著]美満津商店体操部[編]／1901年11月08日 〈国立国会図書館〉

０４３ 實験普通遊戯法 下巻

《外国の書籍を参考に、上・下二巻にまとめられた遊戯書。
下巻の第2章で「ベースボール」について、45から61頁までをつかい解説》
高橋忠次郎 [著]／1902年02月25日 〈国立国会図書館〉

０４４ 内外名家 體育論集

《「欧米体育の状況」（近衛篤麿）その他を収録。
ベースボールについても話題として取りあげられています。
また、美満津商店の広告なども掲載されています》
日本体育会[編]／1902年04月20日 〈国立国会図書館〉

０４５ 實験 國民新遊戯

《小学校児童を対象とした遊戯書。総論之部と実際之部。野球も含まれています》
江頭尚令・立石仙六[著]／1902年04月29日 〈国立国会図書館〉

０４６　新案遊戯法 通信教授 第４輯

《白井規矩郎らが中心となり計画した雑誌形式の遊戯紹介書。
女子用ベースボールなどを解説》
遊戯法研究会[編]／1902年06月16日 〈国立国会図書館〉

０４７　學生の寶

《「ベースボール」の項目に器具、遊戯場、勝敗、各遊戯手の職務などについて解説》
堤秋水[編]／1902年06月26日 〈国立国会図書館〉

０４８　野球年報 明治３５年(第１号)

《一高関係者の勧めでアメリカのスポルディング社の『ガイドブック』にならい発行。
以後、1906年度と1912年度をのぞき1915年まで発行》
伊東卓夫[発行]／1902年09月28日 《国立国会図書館》

０４９　ベースボール術

《「ワンバウンド・キャッチ・アウト」や「スリーボール制」など
一挙に20数年を逆行したような解説》
高見沢宗蔵・鳥飼英次郎[共著]／1902年10月04日 〈国立国会図書館〉

０５０　子規随筆 續編

《1896年に『日本新聞』に連載したベースボールの解説記事をふくむ
「松蘿玉液」を初めて収録した単行本。吉川弘文館[発行]》
正岡子規[著]小谷保太郎[編] ／1902年12月05日 〈国立国会図書館〉

０５１　實驗 團體新遊戯法

《小学生を対象とした解説書。競争遊戯、動作遊戯、行進遊戯、
ローンテニス、ベースボール術の五章からなります》
吉井榮[著]／1903年02月15日 〈国立国会図書館〉

０５２　野球部史(校友会雑誌号外)

《いわゆる「初期混沌時代」から「第二次黄金時代」(1902年)までの一高野球部の記録。
付録に「野球規則及其変遷」を収録》
第一高等学校校友会野球部[編] (平野正朝・荘田達弥・山内冬彦・大塚巖) ／
1903年02月28日 〈財団法人野球殿堂博物館〉

０５３　野球之友

《一高野球中興の礎石を築いた著者がまとめた一高式野球最盛期の解説書。
形式より内容、技術より精神を重視した一高式野球術の虎之巻とも称すべき本》
守山恒太郎[著]／1903年03月04日 〈国立国会図書館〉

０５４　日本之體育

《(下編)の「第五 ベース、ボール」として42から51頁まで解説》
日本体育会[編]／1903年04月16日 〈国立国会図書館〉

０５５　女子適用ベースボール法

《用具をゴムまり、ラケット、ベースとして、学年別に塁間を変更し
女子でも野球を楽しめるよう考えたゲームの解説書。28頁》
京都市第一高等小學校[著]／1903年04月19日〈国立国会図書館〉

０５６　新撰 遊戯法　全

《「第二章　高等遊戯」のなかに「第十 ベース、ボール（Base Ball）」があります》
日本体育会 [編纂]／1903年06月09日〈国立国会図書館〉

０５７　旧東京大學三幅對（袖珍日本叢書 第一編）

《野球伝来初期の愛好家(球玩好)として、久米祐吉、高須録郎、宇田川三郎の三名をあげ
「暇さへあれば体操場に行つて球を投げて」いたなどとあります》
小谷保太郎[編]／1903年06月10日〈国立国会図書館〉

０５８　癸卯の光　癸卯野球試合紀念

《対米艦ケンタツキー戦における一高の記録的な快勝と東京府下連合野球試合を
記念した写真帖。この種の写真帖の最初のものではないかと思われます》
伊東卓夫[編]（美満津商店）／1903年07月04日〈国立国会図書館〉

０５９　小學唱歌教材

《「野球(高濱孝一[作歌]入江好次郎[作曲])」の一番から八番までの歌詞と譜面を掲載》
高濱孝一 [編]／1903年08月04日〈国立国会図書館〉

０６０　實驗的新遊戯細目及其教授法

《「第四十、ベースボール」は175から187頁、
「第四十一、女子ベースボール」は、188から189頁まで解説》
梅林寺勝三(山形市教育会初等部会会長)[編]／1903年10月18日〈国立国会図書館〉

０６１　明治３６年度 野球仕合規則

《冒頭に「第三高等學校嶽水會野球部に於て明治三十六年十月より同三十七年九月迄
左の規則を採用する事を議決せり」とあるように、京都の三高で採用されたルール》
山本卯兵衛[編・発行]／1903年11月05日〈国立国会図書館〉

０６２　野球年報 明治３６年（第２号）

《二月にアメリカで決定したルールを翻訳して掲載》
伊東卓夫[編]／1903年11月20日〈財団法人野球殿堂博物館・秋田県立図書館〉

０６３　競技運動體育讀本

《少年むけの解説書。「第三章　ベースボール」があります》
晴光館編輯部[編]／1903年12月29日〈国立国会図書館〉

０６４　各種學校運動會競争遊戯全集

《七二種類の運動・競技・遊戯などを紹介。「第七十二　ベースボール」(199から218頁)》
高木菊治郎[編]教育資料研究会[閲]／1904四年03月16六日〈国立国会図書館〉

０６５　魔球術

《『The Art of Curve Pitching』の抄訳。「第一編 魔球術」と「第二編投手之注意」の二編。「カーヴ」ノ理論ト実行、失敗ノ原因並ニ注意、初心者ニ向ケテノ暗示などにわけて説明》

エドワード[著]長塚順次郎[訳 述]伊東卓夫(美満津商店)[編]／1904年03月26日〈財団法人野球殿堂博物館〉

０６６　小學校に於ける體育的自然の遊戯

《同名書の「尋常科之部」に対する「高等科之部」に相当。番外の「高等球戯」のなかでベースボールも紹介》

児玉猪久馬・武田文三郎・佐藤安太郎・後藤松之助・鳥居百治・中村源介・久門嘉祐・矢嶋鐘二・小山牛助・宮尾宇吉[著]／1904年03月30日〈国立国会図書館〉

０６７　AN ENGLISH—JAPANESE DICTIONARY OF THE SPOKEN LANGUAGE (THIRD EDITION)

《Baseball, n. * ; yakyu ; yakyugi(野球戯)とあります》

エー・ホバート・マムデン，ハロルド・ジー・パーレット[著・発行]／1904年05月16日〈国立国会図書館〉

０６８　寮歌集（第一高等学校校友会雑誌 第百三十八号外）

《野球部の応援歌を収録》

第一高等学校校友会 [発行]／1904年06月２４日〈国立国会図書館〉

０６９　理論實際　新式女子遊戯法

《野球は危険を招く恐れがあるので「余は少女用としては野球をも擯斥するものなり」とし、かわりに「休息所付打球」などをあげています》

高橋忠次郎・酒詰謙之助[著]／1904年07月20日〈国立国会図書館〉

０７０　野球年報　明治３７年(第３号)

《国内の試合状況、ルールなどを掲載》

美満津商店内野球年報編纂部[編]／1904年11月23日〈国立国会図書館〉

０７１　雙解 英和大辞典 A DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE THE WORDS AND DEFINITIONS BEING FOLLOWED (増訂 第21版)

《「Base-ball,(名)」の項に「毬戯ノ名」とあります》

島田豊 [纂・訳]珍田捨巳[校閲]／1904年12月18日〈国立国会図書館〉

０７２　野球便用

《質疑問答形式の野球解説書。全234項目を総論の部30項目 選手各論の部44項目 攻撃の部30項目 守勢の部37項目 試合の部43項目 規則の部19項目 追加31項目にわけ解説》

愛知県立第一中学校学友会:田島龍夫[編]／1905年01月20日〈国立国会図書館〉

０７３　北米の新日本

《巻頭に著者の献呈辞として、「謹んで此書を早稲田大學野球選手一行を歓迎し多大の援助と奨励とを与へたる在米同胞諸君に献ず」とあります》

安部磯雄[著]／1905年09月22日〈国立国会図書館〉

０７４　明治３８年度 野球仕合規則

《1903年発行のものと同様に、京都の三高で採用されたルール》

山本卯兵衛[編]／1905年11月04日 〈国立国会図書館〉

０７５　最近野球術

《日本初の米国遠征から帰国した当時の早稲田大学野球部の主将・橋戸信(頑鐵)による「科学的野球」の先駆的な著書。附録に安部磯雄の「野球ノ三徳」「渡米日記」その他を収録》

橋戸信[著]／1905年11月12日 〈国立国会図書館〉

０７６　野球年報 明治３８年(第４号)

《試合記録やルールを掲載》

野球年報編纂部[編]／1905年12月20日 〈国立国会図書館〉

０７７　最新遊戯法

《「第十　ベース、ボール（Base Ball)」として、グランドや用具類、ルールなどを解説》

日本体育会[編]／1906年02月25日 〈国立国会図書館〉

０７８　運動界之裏面

《主に野球と庭球に分け、府下各学校の体育部の消長を述べる。日本の野球・庭球の発達の側面史。著者名は吉岡信敬・窪田空穂の共同の筆名》

運動術士[著]／1906年07月01日 〈国立国会図書館〉

０７９　國定小學讀本唱歌適用遊戯法　下編(高等科用)

《各種スポーツの解説書。第三部 競走遊戯のなかに「第六グランド、ベースボール」》

東京児童遊戯研究会[編]／1906年07月22日 〈国立国会図書館〉

０８０　吾輩ハ猫デアル　中編

《「(野球は)今日中學程度以上の學校に行はるゝ運動のうちで尤も流行するものださうだ。」とあります》

夏目漱石[著]／1906年11月04日 〈国立国会図書館〉

０８１　自治寮生活(付：高等学校一覧)

《一高の寮生活を四季にわけて描写。夏の巻に1903年度の対ケンタッキー一号戦をスケッチした「ノックの響」(対外野球仕合)の項目があります》

鳩箭子（野上臼川）[著]／1907年03月01日 〈国立国会図書館〉

０８２　早稲田歌集

《「野球部米國遠征歌(巌谷小波筆)」や「野球応援歌」などが13から17頁にかけて収録》

安部磯雄[はしがき]三堀國雄[編]／1907年04月05日 〈国立国会図書館〉

０８３　ベースボール

《河野、山脇、森本、押川、獅子内、田部、西尾の七人による技術解説と安部磯雄の「統御法」。附録に「野球競技規則」(明治四拾年度)と「野球の術語」(安部磯雄)を収録》

早稲田大学野球部選手[編]／1907年06月五日 〈国立国会図書館〉

０８４　寄宿舎日記

《四月二十六日の項に「けふ午後三時から校庭で同じ小石川の〇〇中學生とベースボールの競技があった)」などの文章あります》

中村枯林(春二)[著]／1907年06月18日〈国立国会図書館〉

０８５　野球年報 明治４０年(第５号)

《安部磯雄の「余の野球観」などの小論文や野球解説も掲載。『野球年報』明治39年度は不刊》

野球年報編纂部 [編]／1907年08月12日〈国立国会図書館〉

０８６　野球案内(Ｂａｓｅ　Ｂａｌｌ)

《「はしがき」で「此書は全く野球を知らざる人の為めに著はしたるものである」と述べているように、一般大衆むけの解説書。本文66頁》

安部磯雄[著]／1907年09月05日〈国立国会図書館〉

０８７　離愁

《随筆集。野球に励む弟を思う兄の心情を書いた文章があります》

秀湖生（白柳秀湖）[著]／1907年10月01日〈国立国会図書館〉

０８８　ベースボール・ローンテニス術

《全98頁のうち「ベースボール」ノ部は、58頁にわたり紹介。「バット」の説明として「木製の棒にして長さ二尺を限度とし」などとする時代錯誤的な解説書。齋藤三郎が『日本野球文献解題』のなかで紹介しています。求光閣 [発行]》

体育倶楽部[編]／1907年12月05日〈一橋大学附属図書館・日本テニス協会〉

０８９　實験競走　遊戯全書

《ベースボールやクリケットなどのボール運動を含む約200種の競走（ゲームの意味）遊戯の解説書》

石橋蔵五郎･乙訓鯛助･中野篤一郎･小林磯治･広川治一郎･小林寅吉[編]／1907年12月19日〈国立国会図書館〉

０９０　明治事物起源

《「野球（ベースボール）の始」の項目に「野球技の、何年頃輸入されしやは明瞭ならざれども(以下、略)」などとあります》

石井研堂[著]／1908年01月01日〈国立国会図書館〉

０９１　野球年報　明治４１年(第６号)

《試合記録やルールを掲載》

野球年報編纂部[編]／1908年07月31日〈国立国会図書館〉

０９２　女子新書翰

《「ベースボール見に」と題し慶応野球部員の兄の試合を見に行こうと友人をさそう文例》

瀟湘女子[著]／1908年10月12日〈国立国会図書館〉

０９３　六學年配當 小學校新遊戯書 教授細目附

《「尋常科第五学年 第一学期 教材」のなかで「◎略式ベースボール（其一）」「◎略式ベースボール（其二）」として説明。女子には「ロンテニス用ラケット」を使うとあります》

早坂留平治・矢島鐘二・須藤榮蔵・相馬小太郎［共編］／1908年10月25日 〈国立国会図書館〉

０９４　遊戯の友

《「競争遊戯の部」のなか「二九、ラウンダース」(77から80頁)を解説するなかで、「(注意)一、本技はベースボールの根源にして同技と同じく活発装快なる運動にして」などの記述》

千葉県師範学校体操遊戯研究会[編]／1908年12月18日 〈国立国会図書館〉

０９５　體育談

《「野球の本場」などの七章からなる。『早稲田中学講義録』あるいは『早稲田大学講義録』の一部か？》

安部磯雄[講述]／1908年 〈早稲田大学・日本体育大学 図書館〉

０９６　米國野球事情

《リーチ・オール・アメリカンの来日を機にアメリカ野球の概略を紹介するために発行》

山口龍吉[著]／1909年08月13日 〈国立国会図書館〉

０９７　野球年報　明治４２年(第７号)

《附録として「米国野球界摘録」を掲載》

野球年報編纂部[編]／1909年08月２４日 〈国立国会図書館〉

０９８　新式ベースボール術

《松栄堂版。同じ著者による改版。134頁》

高橋雄次郎［著］／1909年10月26日(再版:1911年04月04日) 〈芦屋市立図書館〉

０９９　速成 英和 少年會話

《様々な場面を想定した英会話の本。野球を題材にした部分があります》

星野久成[著]／1910年01月22日 〈国立国会図書館〉

１００　學校歌集

《各学校の校歌のほか、早稲田、慶応の両大学野球部の応援歌を収録》

蘭汀書院[編]／1910年02月01日 〈国立国会図書館〉

１０１　水戸中學

《「十三、野球技の勃興」のなかで明治36年の東京野球遠征隊のことなど》

三島良太郎[著]／1910年02月13日 〈国立国会図書館〉

１０２　學生生活　バンカラ日記（前編・後編）

《野球練習など全365日の学生生活の記録》

松田彗星[著]／1910年02月21日・03月18日 〈国立国会図書館〉

１０３　米國見物

《390 から 410 頁 にかけて「ベースボール」の話題》
正岡藝陽(猶一)[著]／1910年02月27日 〈国立国会図書館〉

１０４　米國野球見物

《アメリカのプロフェショナル・ベースボールの平易な解説書》
正岡藝陽[著]／1910年05月13日 〈国立国会図書館〉

１０５　現代之諸名家　體育論 附・新撰遊戯法

《「学校体操に就て」(永井道 明)のなかで「野球の如きは社会 分 業の
標 本とも言つてよかろうと思ひます」などと述べています》
日本体育会[編]／1910年08月05 日 〈国立国会図書館〉

１０６　模範 新演説

《「◎野球の 樂　(学友会の席 上)」と題するスピーチの例が掲載》
松浪猛彦[著]／1910年09月17日 〈国立国会図書館〉

１０７　野球年報　明治４２年度秋(第８号)

《河野安通志「余の見たるトリック」などを掲載》
美満津商店内野球年報編纂部[編]／1910年10月15日 〈国立国会図書館〉

１０８　枯木

《主人公が野球に熱中したあまり 中 学を放校されるという 小 説》
本間 久　[著]／1910年12月08 日 〈国立国会図書館〉

１０９　現行野球規則 ＢＡＳＥ ＢＡＬＬ ＲＵＬＥＳ１９１０（附録:全試合記録法）

《目次には、「プロフェッショナル野球倶楽部用公認野球試合規則」とあります》
直木松太郎[編纂]／1910年12月２４ 日 〈国立国会図書館〉

１１０　現代娯楽全 集

《「ベースボール(野球)」は、1065 から 1082 頁 まで図解入りで紹 介》
晴光館編輯部[編]／1910年12月25日 〈国立国会図書館〉

１１１　桐陰會創立第二十 週 年記念號

《桐陰会(東 京 高等師範学校の校友会)の沿革に「野球部」とあり、明治二九年からの試合記録など》
大橋鋼造[編 輯 ・発行]桐陰会 [出 版]／1910年12月26日 〈国立国会図書館〉

１１２　布哇紀行

《有隣閣発行。1910（明治43）年の早稲田大学野球部のハワイ遠征記念 出 版。
野球関係記事は本文203 頁 の約１／３の 69 頁 にわたり 収 録》
安部磯雄[著]／1911年04月10 日 〈鶴見大学〉

１１３　東 京 風景

《写 真 集。「早稲田大学、慶応義塾の野球競技」という項目があります》
小川一真出版部[編]／1911年04月27日 〈国立国会図書館〉

１１４　野球年報 明治４３年度(第９号)

《表紙には「明治４４年」とあります》

野球年報編纂部[編]／1911年08月01日〈国立国会図書館〉

１１５　野球と學生

《いわゆる「野球害毒問題」に対し「野球擁護」の立場から安部磯雄、押川春浪のほかに鎌田慶応義塾々長、高田早稲田大学々長の意見を収録》

安部磯雄・押川春浪[共著]／1911年11月05日〈国立国会図書館〉

１１６　野球虎之巻（附:最近野球規則）

《附録に大隈重信、黒岩周六、安部磯雄、鎌田榮吉、高田早苗、長与又郎、中澤臨川、橋戸頑鐵などの「野球害毒問題」に対する駁論を掲載》

橋戸頑鐵(信)[著]／1911年11月10日〈国立国会図書館〉

１１７　野球

《例言のなかに「斯道に興味を持たるる初心者諸君の手引ともなり得たい」とありますが、決していい加減なものではなく当時の野球の水準を知る内容となっています》

伊勢田剛[編]／1911年11月28日〈国立国会図書館〉

１１８　少年獨習 繪葉書の畫と文との手本

《秋の部の文例に「来る〇〇日は東京の早稲田が来て、野球の競争をする筈」とあります》

金港堂編輯部[著]／1911年12月22日〈国立国会図書館〉

１１９　最新ボール遊戯法

《「第三節　教具」のなかで、「吾人の中學生時代にはベースボールを行ふに今日の如く、マスクもミットもグローブバットも其他網の如きものもユニホームの如きものも無かった」とあります》

渡辺誠之[著]／1912年02月25日〈国立国会図書館〉

１２０　趣味

《98から122頁にかけ「今秋の野球撰手」という記事があります》

横山健堂（達三）[著]／1912年03月05日〈国立国会図書館〉

１２１　致富成功 儲けばなし

《「野球試合の挙行」という記事のなかに、校友会の財源の確保のため有料の野球試合を行う時機だとの文章があります》

金々先生(岡雷平)[著]／1912年04月18日〈国立国会図書館〉

１２２　慶應義塾歌集

《野球部の応援歌を収録。松本楽器合資会社発行》

妹尾幸次郎[編]竹久夢二[装禎]／1912年05月04日〈個人所蔵｛リンクなし｝〉



１２３　日用　舶来語便覧

《附録の「第七章　野球用語」に４４語の用語説明があります》

棚橋一郎・鈴木誠一[著]／1912年05月10日〈国立国会図書館〉

１２４　全國高等學校評判記

《「第三高等學校」の部分に「関西野球大会」の項目があります》

出口 競 [著]／1912年06月28日 〈国立国会図書館〉

１２５　野球年報 明治４４年度（第１０号）

《表紙には「明治４５年」とあります。

安部磯雄の「野球試合に対する希望」など著名人の小論を掲載》

野球年報編纂部[編] ／1912（大正元）年10月09日 〈国立国会図書館〉

◎主な参考文献

『日本 野球文献解題』 (齋藤三郎 / 1939年)

『体育・運動競技図書目録 第１号』 (田尾榮一 / 1941年)

『体育書解題』 (野口岩三郎 /1953年)

『野球体育博物館蔵書目録（1969.3.31現在）』 (野球体育博物館 / 1970年)

『野球体育博物館増加図書目録（昭和４４年４月１日より昭和５１年３月３１日まで）』
(野球体育博物館 / 1978年)

『体育・スポーツ書解題』 (木下秀明 編著　能勢修一　木村吉次 共著/ 1981年)

『野球本国記 ： 県別郷土野球図書解題 ： 明治期～平成十六年度』上・下
(堀俊明/2010年)

NDL　ONLINE：国立国会図書館オンライン ・・・ 国立国会図書館の所蔵資料を検索できます

NDL　Seach：国立国会図書館サーチ ・・・ 国立国会図書館サーチは館内外の各種データベースを
一度に検索できます

National　Diet　Library　Digital　Collections：国立国会図書館デジタルコレクション
・・・ 国立国会図書館がデジタル化した所蔵資料と収集したデジタル化資料を
検索 ・ 閲覧・視聴できます

野球殿堂博物館 図書室 蔵書検索（OPAC）
・・・野球殿堂博物館図書室では約 50,000 冊の資料を所蔵
現在 この OPAC では野球の図書約 6,000 冊が検索できます
その他の図書・雑誌は登録作業中ですので随時更新しています

今回は **明治時代の野球文献** について少し調べてみました

子曰　温故而知新　可以為師矣
子ノタマワク　故キヲ温ネテ新シキヲ知レバ　以テ師タルベシ
『論語』為政第二より

附録Ⅲ　明治時代の野球年表

1871(明治04)年　横浜でコロラド号チームと居留民チームの試合がおこなわれる

1872(明治05)年　ホーレス・Ｅ・ウイルソンが第一番中学でベースボールを教える

1873(明治06)年　アルバート・Ｇ・ベーツが開拓使仮学校でベースボールを指導する

1876(明治09)年　開成学校の学生チームが外国人たちと試合をおこなう

1880(明治13)年　平岡凞がひきいた新橋倶楽部の活動が本格化する

1881(明治14)年　体操伝習所の卒業生たちが日本各地にベースボールを伝える

1882(明治15)年　平岡凞が「保健場」というグラウンドをつくる

1882(明治16)年　Ｆ・Ｗ・ストレンジが『ＯＵＴＤＯＯＲ　ＧＡＭＥＳ』を出版

1885(明治18)年　坪井玄道などが『戸外遊戯法　一名、戸外運動法』をあらわす

1890(明治22)年　「インブリー事件」がおこる

1894(明治27)年　中馬庚が「ベースボール」の訳語として「野球」という言葉を考案

1896(明治29)年　一高が横浜のＹＣ＆ＡＣなどの外国人チームと四試合をおこなう

1897(明治30)年　日本初のスポーツ専門雑誌『運動界』が創刊される

1898(明治31)年　白洲長平(エール大学)の周旋で一高がアメリカ遠征を検討する

1901(明治34)年　三高の校庭で関西の二府十三県の連合野球試合が開催される

1902(明治35)年　日本女子大学校などで女性の「ベースボール」が流行する

1903(明治36)年　慶応と早稲田の第一回の野球試合がおこなわれる

1904(明治37)年　京都市の小学校で女子の「ベースボール」対校試合がおこなわれる

1905(明治38)年　早稲田が初のアメリカ遠征をおこなう

1906(明治39)年　「早慶戦中止事件」がおこる

1910(明治43)年　直木松太郎が『現行 野球規則』を編纂する

1911(明治44)年　「野球害毒論争」がおこる

さあ、外へ出よう　青空の下で「プレーボール」！

みなさまのご意見 ご感想 新たな情報などもお待ちしています

最後まで お読みいただき 誠にありがとうございました

２０２３(令和05)年 08月26日

著者：弘田正典(野球史研究)

発行：スポーツ文献社

History of Japanese Baseball

for Junior and Senior High School Students

A Star Shining Toward Me -Baseball History in the Meiji Era-



Masanori Hirota

(Baseball History Researcher)

Sports Literature Publishing Co.